

演劇会議

一幕物特集

刊行にあたって	萩坂 桃彦	1
『とろいめらい』	黒沢 参吉	2
『兄 妹』	小島 真木	16
『お出かけ前』	栗木 英章	39
『喪の季節』	作間 雄二	44
『川向う』	和田 澄子	58
『あの世はこの世のあの世である』 こばやし ひろし		78

別冊
2

1972年1月

¥250

少ない予算で大きな安心



入会の手続

原則として個人会員は受付できませんが、5人以上で団体扱いとします。初回 400円 と署名捺印で会員になり、左記の行事のときに必要な物資、準備を格安な費用でまかさないです。

なお、会員には下記の特典もあります。

営業種目

- ☆ 結 婚 式 ☆
- ☆ 葬 儀 ☆
- ☆ 出 産 ☆
- ☆ 入 学 ☆
- ☆ 節 句 ☆
- ☆ 成 人 式 ☆
- ☆ 金 ・ 銀 婚 式 ☆
- ☆ 旅 行 ☆

会員の特典

ショッピング・レジャー（映画ボーリングその他）など、日常生活のいろいろな分野で、5～20%の割引でご利用になれます。

詳しくは下記へご連絡下さい。

神奈川県 総合サービスセンター

横浜市中区翁町2-8-7・熊谷ビル・TEL 045 (681)5412 (代表)

演劇会議

一幕物特集

刊行にあたって	萩坂 様彦	1
『とろいめらい』	黒沢 参吉	2
『兄 妹』	小島 真木	16
『お出かけ前』	栗木 英章	39
『喪の季節』	作間 雄二	44
『川向う』	和田 遼子	58
『あの世はこの世のあの世である』	こばやし ひろし	78

別冊

1972年1月

¥250

少ない予算で大きな安心



入会の手続

原則として個人会員は受けませんが、5人以上で団体扱いとします。初回 400円と署名捺印で会員になり、左記の行事のときに必要な物資、準備を格安な費用でまかします。

なお、会員には下記の特典もあります。

営業種目

- ☆ 結 婚 式 ☆
- ☆ 葬 儀 ☆
- ☆ 出 産 ☆
- ☆ 入 学 ☆
- ☆ 節 句 ☆
- ☆ 成 人 式 ☆
- ☆ 金・銀 婚 式 ☆
- ☆ 旅 行 ☆

会員の特典

ショッピング・レジャー（映画・ボーリングその他）など、日常生活のいろいろな分野で、5～20%の割引でご利用になれます。

詳しくは下記へご連絡下さい。

神奈川県総合サービスセンター

横浜市中区鶴町2-8-7・熊谷ビル・TEL 045 (681) 5412 (代表)

別冊2 戯曲集刊行にあたって

萩 坂 桃 彦

機関誌には、その組織体の活動を忠実に記録する任務があると同時に、他方、活動の推進力となり、そのエネルギーの源泉を培養するという仕事も附帯しなければならぬ。

実は、その点で云えば、遺憾ながら、現在の誌面は十分とは云えない。

こんなことを、こんなかたちで提起すべきではないとは思いますが、「演劇会議」を真に魅力あるものにするためには、そこに偽らざるわれわれの実態を写し出し、とり繕わずに、問題点をさらけ出すことで、さらに問題性を昂めてゆく——といった姿勢が必要のようである。

いま、どの集団でも、その活動の中で、たぐさんのことを抱えている。簡単に云って、レポートライのこと一つにしても、決めるのに一ヶ月も二ヶ月もかかって、まだ決着がつかぬという話もよく。

その場合、問題は、レポートライのあれこれにあるのではなくて、何をやろうとしているのか、そしてやりたいのか、全員がどこで燃えられるのか、根っここのところでの創造の志が定かになっておらぬところに原因

があるようにおもえる。

七〇年二月、別冊(1)として刊行された戯曲集の収獲はたしかに、われわれの活動に記録すべき成果をもたらした。

しかしそれで事足りりとするわけにはいかないし、むしろその後の活動の中で、一そう、創造エネルギーの原点への凝視が必要となって来たのである。——運動の形態から質への転化が必要になって来たのである。

この別冊(2)はそのことを踏まえて出された。

初志のさかんさにもかわらず、取り組みに行きどにかぬところもあって、作者の顔ぶれが東に片寄ったという指摘は免れえないが、しかしこの企画はこれ限りということではない。

仮りに、そうした不十分さを伴いつつ、また、作者にとっても力価の到らなさがあったとしても、それは、必要にして、且つ今後克服されてゆくべき、現実のわれわれの姿として見るべきだろう。

きびしい批判の前に、裸身を投げ出した六人の作者たちに拍手を送りたい。

1972年 おめでとうございます!

東日本リアリズム 演劇会議

(事務局センター・劇団はぐるま内)

- 劇団さっぽろ 札幌市琴似山の手2条1
- 劇団新劇場 札幌市平岸旭町10
- 弘前演劇研究会 弘前市品川町1
- 劇団支木 青森市安方町2-10-11
- 仙台小劇場 仙台市鶴取字大谷地3-3
- 劇団群馬中芸 前橋市昭和町3-15-2
- 劇団埼玉 川口市領家5-1-69
- 演劇集団土の会 東京都港区西麻布4-5-9
- 舞芸小劇場 // 豊島区高松2-20今成方
- 劇団労芸 // 品川区南大井1-14-16
- 劇団協同 国立市北3-2
- 劇団民衆劇場 府中市栄町3-28
- 青年劇場 東京都新宿区信濃町25
- 京浜協同劇団 川崎市古市場2-109
- よこはま青年座 横浜市中区滝上129
- 劇団やまなみ 甲府市青沼1-8-5
- 信濃小劇場 松本市深志2-6-8
- 劇団静芸 静岡市昭府町289-2
- 劇団つくしの会 富士宮市西町20-2
- 劇団からっかぜ 浜松市中島町2419
- 名古屋芸術劇場 名古屋南区沙田町3-40
- 劇団演集 // 中区栄4-9-26大東ビル
- 四日市市民劇場 四日市市栄町4-9
アンデレセンター
- 劇団すがお 桑名市大福229-1
- 上野市民劇場 上野市丸ノ内
中央公民館内
- 劇団はぐるま 岐阜市西野町1

西日本リアリズム 演劇会議

(事務局センター・劇団未来内)

- 関西芸術座 大阪市安倍野区
文の里4-18-16
- 劇団なぎ // 東成区中道元町2-96
八阪神社内
- 演劇集団息吹 八尾市堤町1-40
- 南大阪演劇研究会 大阪市西淀川区
野里町489
- 劇団潮流 // 南区上本町4-625
鼓ビル
- 劇団未来 茨木市駅南通1-9-21
森本方
- 大阪協同劇場 吹田市津雲台5-15
D53-307
- 劇団いこら 和歌山県有田郡
湯浅島の内
- 劇団京芸 京都市伏見区納所北城堀
31-18
- 人間座 // 左京区下鴨東塚本町44
- 人形劇団京芸 宇治市白川釜倉山35-20
- 劇団四紀会 神戸市兵庫区荒田町3-6
宝地院内
- 劇団福演 福山市西町3-3-5 柏原方
- 劇団月曜会 広島市豊平北2-12-28
- 劇団こじか座 愛媛県新居浜市船木
えひめ学園内 酒井方
- 劇団桑の実 今治市日104-6 鴨川方
- 若者座 宇部市東区野中 篠田方
- 劇団生活舞台 福岡市警固2-9-18
- 福岡現代劇場 福岡市南庄1-87-2

演劇会議発行所

川崎市小田4-28-17

とろいめらい

黒沢参吉

——劇では、途中指定のあるところをのぞいて、ラジオからの音声（ニュースや、コマ・シヤルや、音楽や）が、メインになったり、ブリッジになったりしながら、不断にながれている。

ラジオのアナウンス …… 沿道には、多数

の市民が日の丸の旗をもって歓迎しましたが、一部にはご訪問に反対する在郷軍人や学生からなるデモ隊の姿もみられました。デモ隊は、ヒトラーの同盟者とか、ヒロヒト・ゴーとか書いたプラカードを手に、天皇皇后陛下のお車めがけて、卵やトマトを投げつけましたが、まもなく警官隊によって排除されました。天皇陛下は、終始沿道の市民にお手をふられ……」

——やつとので、グルグル廻って

る床屋のあめん棒。正面に向いた二つの燈子のひとつに、白布をかけられた鬨髪中の初老の男。脇のベンチに、願番をまわっている若い男。うす汚れた白衣の床屋は、近所のおかみさんの熱心な説得をうけている。

初老の男 なんだ、君は両陛下のヨーロッパご訪問に反対？

若い男 あ、猫背のじいさんは、ほんとならA級戦犯のトップで絞首刑。あんたら当時のおとながポケツとしてたおかげで、地獄をご訪問にならずにすんだんだぜ。

初老の男 君、なんて物騒なことを。

おかみさん じゃ、いいね、一緒に行くんだね。

床屋 ……（何か口の中でボソボソ云う）

おかみさん じれったいひとだね。ハッキリしなよ、ハッキリ。

床屋 わしゃ……くたびれてんだわ。

初老の男 君、つとめは何処？ ……それも、そんな恰好してるが、学生かね。

若い男 そういふあんたは、クタンクン臭きまわるとこみると、毎年のおまわりか、ドルシヨックでガタのきた中小企業の労働か。

初老の男 ひどいこと云うねえ。私は、昔の親父といつていい位の年輩だ。だから心配するんだ、そういう過激な思想をね。

若い男 いちばん嫌いだ、あんた位の年の男が、（漫画に首をつっこむ）

おかみさん ……それとも、お前さんとこじや、あのモクモク煙はいてる工場や、埋た

初老の男 天皇陛下にむかってトマト！ 昔
だったら、まちがいなく不敬罪だ。

若い男 （漫画週刊誌から顔をあげて）フケ
ーザイ？ ふん、あんた、窪田でやつらの
飛行機に、大日本帝国方才とやったクチ
か。……いまだって、まちがいなく不経済
さ、おれたちの税金、メタメタに無駄づか
いしやがって。

床屋 （しおれて）ああ。

おかみさん 駄目だって云ったじゃんか、あ
んな儲け主義のヤブは。

床屋 そいでもな、親の代からわしらんとこ
じゃ、あの先生に……

ての石油会社から、私にやいなない特別

のつけとどけでも貰ってんのかい、ええ。

床屋 そんなもの……いちどだって、貰やし
ねえよ。ああ。

おかみさん だったら、おいきたって一緒に
来なよ。私ら、伴の働いてる会社だけで、
それでも抗議に行くんだからね。

若い男 （吐鳴る）公害だ、公害……！
おかみさん （大きく頷いて）むろん、そう
だともね。

初老の男 （床屋に）おい、いい加減でやつ
てくれ、タオルがつめたくなっちゃったじ
やないか。

床屋 いやあ、猫もシヤクシも公害公害って
騒ぎだす、よっぽど前からもう、ゼンソク
だったんだわ。

おかみさん そらそら。私だって、伴が二直
から帰る前に、チョコットのつもりで来た
んだよ。……いいね、明日一時。あてにし
てるよ。

おかみさん こういう頑固だから、うちの伴
なんか腹たてるんですよ。……公害って名
がつこうとつくまいと、永年このツーンと
鼻をつく厭な空気が吸わされてきた、そのせ
いにや変りないだろ。

床屋 うーん、なにしろ……（口の中でボソ
ボソ）

若い男 今夜はおかみさんは店へ出ねえのか
よ、こちやって椅子があいてんのに。

初老の男 もみあげがビッコだ、こつちをも
う少し刺つてくれ。念入りにやってもちわ
んと、なにしろ明日は、会社のおえら方が
ズラツと並んだとこへ出て行くのだから。

初老の男 風邪ひいてるのかね。

おかみさん おや、すると旦那さんも抗議に
行きなされる。……

初老の男 風邪ひいてるのかね。

初老の男 コーザ？

おかみさん （床屋に）そらみな。このチヤ
ンとした旦那さんだって、行くと云つてる

床屋 うちの小僧の鳩小屋へ、よく鳩をみに
きたっけが、あの女の子は……。

おかみさん 知ってるよ、お前さんとこの子
とは一番仲がよかったのさ。……だのに、

お前さんときたら全くのわからず屋だね。
床屋 どうして、そう……(モゴモゴ)

おかみさん まあ、きいてください。春の市長選挙のときだって、こうですよ。……戦争がおわってから、ずつと二十六年もつづけた前の市長さんは、たしかにえらぶつにゃない。でもね、この街のでかい会社が軒なみとおししてること、その会社が苛められてる私たちの得にゃならないって証拠じゃないかね。今度って今度は私ら市民と一緒にやって、この街に青空をとつかえすカクシンの市長さんを当選させようよ。……そういつて、口がすっぱくなる程念おしといたのに、この調子でモゴモゴいいながら、前の市長に投票しちゃったんですからね。呆れて、ものが云えないじやありませんか。

——床屋のおかみさんの姿。

おかみさん 旦那さんからも、よく教えてやつくんなさい。明日の抗議の会にゃ行かなきゃ駄目だつて。……ああやって、苦しがつてるおかみさんのためにもね。

初老の男 あれはしかし、生まれつきの体

若い男 呼吸をとめて、大急ぎでタクシーを拾うのよ。乗ったたら、何でもいから北へ向かってとばすんだ。

初老の男 いや、そういう危険があれば、チヤンと市役所からこつちの会社へ電話がかかってくるのだ。悪硫酸ガスが出ない、硫酸分の少ない燃料をつかってくれつてね。床屋 へーえ。……いつたい、どういふわけで、普段からそのガスの出ねえ方の燃料をつかわねえのかね？

初老の男 解りきつたことじゃないか。コストがちがうのだ、重油のコストが。

おかみさん コストが第一なんだからね。若い男 そうとも。……原材料のコスト、燃料のコスト、下請加工賃のコスト、それからおれたちの賃金のコスト、明けてもくれても、どうやってコストを下げるか。

初老の男 そのとおり。……そのおかげで、国民総生産世界第二位という経済大国にのしあがったのだ、日本は。

おかみさん 世界第二位だつて、死んで花実が咲かないからね。……少々儲けが減つたつて、空気をよごさない算段してもらわな

若い男 そんな抗議ぐらいで、あいつら公害

質つてももあるのだな。……いい例がうちの会社へ、足かけ三十四年勤続した勘定だが、このとおり至つて健康だ。

若い男 (笑う)

初老の男 信じられないかもしれんが、公休のほかに会社を休んだのは、足かけ三十四年の間に、たった七日だ。弟の出征の時、その弟の戦死したとき、諸の買出しが二回部長の葬式の手つだい、課長の引越しの手つだい、さいごが係長の息子さんの交通事故故のお見舞。親父は暮れのしごと納めに死んだし、おふくろは五月の連休に死んだから忌引きにしないで済んだ。まして、病氣欠勤は一度もしていない。……いや、すこし位具合わるくても、出勤してこの空気を吸えば、ケロッとなおつてしまふんだねえ。

おかみさん ……へえ。

若い男 まるで、あの魚だ。

初老の男 魚、どの魚？

若い男 テレドでやつたる。ヘドを喜んでバクバク啖つちまう魚よ。

初老の男 そのくらい毒舌で、私は傷つきはしないと、君。……明日私は、無欠勤永

まさちらして三十九の独占が、ビクともするもんか。

おかみさん ビクともするもんか、宇宙人みたいな口きくけど、お前さんだつてこの街の空気を吸つてんだよ。抗議じゃ駄目なら、どうしたらいいつていうんだい。

若い男 ゼネストよ、ゼネスト。

おかみさん ……何だね、そりゃ。

若い男 労働者のおふくろが、ゼネストも知らねえ。やつぱりおくれてるな、日本は。……街中の生産を労働者の手でぶつとめるのよ。工場じゃ何もつくらねえ、電気もガスも送らねえ、電車もバスもストップだ、

役所も銀行も市場も新聞社もみんな閉鎖だ。三十九の独占がカブト競ぐまで、革命的ゼネラルストライキを決行すんのよ、ゼツタイだ！

おかみさん ばかばかしい。

若い男 フランスなんかじゃ、しよつちゅうりだ。氣にくわねえことがありや、すぐぶつくらわすんだぜ。

おかみさん 北廻は、日本だよ。……いいかい。明日の昼から三時間ばかり抗議の会やりまして、四回も五回も足はこんで、舌が鵝を

年勤続で会社から表彰されるのだ。おえら方の前で専務が賞状をよむ、それを金一封と一緒にうけとる。きょう作業が終つてから食堂で、その予行演習があつたのだ。

若い男 おききのとおりさ、これじゃ連も公害の抗議はできねえよ、おばさん。

初老の男 うちの会社じゃ公害はだしてないんでね。全くだしてないという訳じゃないが、つまり、よその会社ほどじゃないのだ。それに、これは個々の会社へ直接抗議するより、行政上の問題なのだから市へ陳情するのが筋だろうねえ。

おかみさん そりゃ何回となくやってきたそうですがね、何もしてくれなかつたでしよ、前の市長は。

初老の男 そんなことはない。市役所の前にたつてる電光掲示板。あれは重宝だ。本日は〇・〇五PPMとでている。あれをみれば、なるほどこれが自分の吸つている亜硫酸ガスの分量だな、とたちどころに解る。床屋 で、それが解るとどうなるね。

初老の男 どうなる、だと。……つまり、それに従つて考えればいい。今のこの空気はそのまま吸つても大丈夫とか……

床屋 で、大丈夫でねえときはどうなるね。

ンテンおこすほど喋りまくつて、根くらべで引っぱりだす騒ぎなんだよ。それを、街中の労働者全部にストライキやらせるだつて。……そんな荒唐、かりにカクシンの市長さんが号令かけたつて、できっこないじやんか。

若い男 あたりきさ、あんなだら幹市長の号令なんか、おかしくしてきけるかい。革命的労働者は、別の手段をとるんだ。

おかみさん はあ、別の手段で、ガードの下や電柱にベタベタビラ貼ることだね。あれも文句は勇ましいけど、ビクともしないね、三十九の会社じゃ、

若い男 ケツ、骨のズイまでニセのカクシンに毒されてら。あの市長だつて、前の市長と同じ穴の何とかさ。モミ手しながら大企業に、亜硫酸ガスをもう少し減らしていただけませんか……

おかみさん それが、かけひきつてものさ。火船ピン投げりばかりが喧嘩じゃないんだよ。公害だしてると会社じゃ、何方で労働者が働いておまんま喚つてんだ。その人たちの口には、会社のためならエンヤコラつてこの旦那みたいな人もいるけど、手前も家族も公害で泣かされてる人だつていっばい

いるさ。だけどその人たちは、公害に反対したら会社がたちゆかなくなる。会社がたちゆかなきゃ自分の首が危くなる、そう思つて我慢してんだよ。昔で云やあ、労働者は会社にとられた人質。……だから、市長さんだつて。モミ手で喧嘩をはじめなきゃならぬんだよ。

若い男 勝つてのねえ喧嘩をかこ。
おかみさん 勝ち負けは市長さんだけじゃない、私らやお前さん……つまりは、この街の市民でものがきめるんだろ。

——床屋のおかみさんのはげしい夜。

床屋 (鴉小屋を見あげて) おい。母ちゃん
の背中、さすつてやんねえかよ。

男の子 ……。(反応しない)

初老の男 何をしているのだね、あそこで。

おかみさん 一週間前、とばした鳩を待つて
るつていうんですがね。

初老の男 帰つて来ないのかい。

若い男 鳩だつて帰つちゃ来ねえや、こんな
きたねえ街。

床屋 やい。……きこえねえんかよ、母ちゃん
のあの喉が……。

おかみさん いいよ、いいよ。私がいつとき
さすつてやろう。(裏へ入っていく)

床屋 ……しよんねえガキだ。

若い男 夢みてんのかもしれねえや。

初老の男 夢？

若い男 誰だつてみるさ。

初老の男 どんな夢かね。

若い男 忘れちゃった。……ガキのじぶん
のこころ。(漫画の頁を繰る)

——ディスクジョッキーの音楽が、プツン
と断れて

ラジオのアナウンス 一ただいま入りました
緊急ニュースをお伝えいたします。警視庁
の発表によりますと、今夜九時ごろ、帝國
鑛管株式会社ある街工場の工場長カネトイ
ノチさんの自宅から、イノチさんの孫で生
後二ヶ月のタイコちゃんをベットの縁から誘拐
されたと届出がありました、また、同じこ
ろ、大正電工株式会社の社長ヨシホーダ
イさん方でも、生後五ヶ月のススムくんが
行方不明になったと届出がありました。一
方、ある街警察本部からの連絡によります
と、やはり今夜九時ごろ、東洋石油化学工
業株式会社ある街工場の工場長タンナガン

タローさん方からも、孫で生後三ヶ月のサ
ナエちゃんが子供部屋から姿を消した、と
捜索願いがだされました。……」

若い男 き、きいたか！

ラジオのアナウンス 「……警視庁では、こ
の三つの事件が、ある街にある大企業の本
部首脳の家裏に共通しておこつた点から、
ある街の公害に反対する団体か、過激派グ
ループが、公害発生を阻止する目的で赤ち
やんを誘拐したのではないかとこの見方をつ
よめ、捜査を開始することにも、ある街の
公害発生源とみられている三十九企業の、
幹部の家裏を機動隊によつて厳重に警戒し
ております。……なお、この赤ちゃん誘拐
事件については、新しい情報の入り次第、
臨時ニュースとしてお伝えいたします。……
くりかえして申し上げます。警視庁の発
表によりますと……」

——ラジオをかきつけて、東から西から
走りかうバトカ、のサイレン。

初老の男 何ということ、いやはや。

若い男 つ、痛決！ このカツコよさ！

初老の男 こんな大それた過激な犯罪を、痛
快なんて。警察にきかれたら、君……

若い男 てめえにカンケイねえこういふこと
にや、犯罪は大それた過激な奴ほど痛快な
のさ。……毎に何回かこういう犯罪がおこ
る。そのたびにわれは感じるぞ。つまん
な世の中だけだ、やつぱり生きててよか
つたつてよ。

おかみさん (戻つてきていて) 云うに云わ
れぬ残船な男だね、お前さんは。……い
ふ会社が憎いつたつて、乳呑児にや何の罪
もないじゃんか。

若い男 ヘッ、そうくるならうとおもつた。
じゃ誰かどうよ、六百五十人とかいるこの
街の公害病認定患者……このおかみさん
だつてその一人だ、なあ。

床屋 うちものは……普通の、ただの、ゼンソ
ク。……私がたまつてんから、認定はで
きねえつて、先生がよ……

若い男 そういうテキの手先になつてるヤブ
医者のために、網の目渡れたのまでかぞえ
たら、被害者は何万人いるかわかりやしね
え。……この連中は、じゃ何か罪があつた
のかよ。

おかみさん ……そりや。

若い男 さっきの女の子だつて、そうじゃね
えか。何の罪もねえのに、三十九の独白が
よつてたかつて殺したのさ！

初老の男 それじゃ君、話が飛躍しすぎる。

若い男 殺したんだとも、調査だの、経済成
長だの、都合のいい理屈こねながら私腹肥
やしてる独白資本の犯罪よ。

おかみさん そりや、そのとおりでよ。ここ
のおかみさんだつて、たつた今あの並んで
る壇突に蓋してやりたい。涙をがしてそう
云つてるよ。……でもお、それでも、赤ん
坊に流すなんてこたあしちやいけな。

若い男 何故よ？

おかみさん 何故つて……(のまる)

若い男 (腹をふりまわして) 目には目を、
歯には歯を！それが労働者の首領よ！

ウヒーッ！

おかみさん ちがうわ。何故だか、おかん
いけど、御く人間はそんなことはしないも
んだよ、昔からね。(出て行く)

ラジオのアナウンス 「……赤ちゃん誘拐事
件に関するその後のニュースをお伝えしま
す。警視庁とある街警察本部にひきつづき

届出のあつた、赤ちゃんの誘拐件数は十五
件にたつし、さきの三人を加えると誘拐さ
れた赤ちゃんの総数は十八人になることが
わかりました。警視庁では、この十八人が
どこどこ公害発生源企業の代表、幹部の
縁故者であること、また十八人という数が
ある街の公害病認定患者の死亡者数と同じ
であることから、過激派グループによる報
復的な犯罪であるとの見方をつよめており
ますが、十八人の赤ちゃんが午後九時ごろ
いっせいに蒸発しているに拘らず、犯人と
おぼしい人影をみた例が一件もたいため、
今後の捜査は難行するものとおもわれま
す……」

若い男 ウンシン……あらわれたぞ、正義
の東方、ウルトラマン！

初老の男 どこだろ、あと十五の会社。ま
さか、うちの会社は……

ラジオのアナウンス 「……この事件につい
て帝國鑛管のカネトイノチ工場長は、誘拐
犯人の要求が公害の防止にあるならば、関
連企業と相談して善処する用意がある。し
かし、誘拐された子ども命は地球よりも

重いという人道的な自覚にたつて、安全かつ速やかに両親のもとに返すよう要請するとの談話を発表しました。」

若い男 ヘッ、何たるナンセンス！ 地球よ

り重いのは、てめえの孫の命だけか。

床屋 でも、この……十八人の赤ん坊てえとミルクだけでも……だいいち、毛布かなんかにチャンとくるんで、あれかね……

初老の男 シーツ！

ラジオのアナウンス 「……つづいて、誘拐

された十五人の赤ちゃんと、関連ある会社名をお知らせいたします。アラビア石油株式会社社長ヌンテナワダさん方からアワゾーくん、東京アルコールある街工場長コメノミズオさん方からシボリちゃん、日東化学工業株式会社……」

初老の男 ウワッ！ (椅子からころげ落ちる) うちだ、うちの専務だ！

若い男 天誅、天誅、ザマミろ！

ラジオのアナウンス 「……火力発電所副所長タビオキッタさん方からツナグくん、東

亜油脂株式会社社長サギノメイジンさん方から……(と続く)――

若い男 ヤッホー、うちのおやじもやられや

がったか！

初老の男 何だ、君のところもか。

若い男 ふーん。(考えながら歩きまわる)

こいつは……ちつとばかり、面白いことになつてきやがったぞ。

初老の男 面白いだと、とんでもない。これじゃ折角の明日がメチャメチャだ。……実をいうと、明日は私ら停年退職者の退所式の日なのだ。

若い男 さっきは、永年勤続の表彰式だといつたじゃんか。

初老の男 両方いっしょなのだ

若い男 はあ、表彰状もらつて、ついでにチョコんでわけか。

初老の男 だが私は、専務に望みを託していた。専務は目頃から私のつとめぶりを買つてくださつていたし、おねがいすれば再就職、それがムリとしても子会社のどこかへ……しかし、お孫さんが誘拐されたとなつては、私のことなんか……

若い男 絶好のチャンス。すぐ表通りで車ひ

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

初老の男 莫運な。こんな事件で、ゴツタがえしているところへ……

若い男 だから、ゴツタがえす前にとびこむのさ。今、ニュースをきいて、とるものとりあえず飛んで参りました。可愛いお孫さんをさらつて行くとは、何たる極悪非道人道に外れた行為であります。しかしご安心ください、不肖……あなた、何て名前？

初老の男 名前？

若い男 ま、そんなの何でもいいや、不肖私めがかつけましたからには、たとえ草の根を分けてもお孫さんは探してみせます、とか何とか云えばよ、奴は今ワラにもすがりたいとこだから、おお君、ありがとう！

初老の男 なるほど。……しかし、そんな立派な口きいて、もしお孫さんが草の根分けても探しだせなかつたら、逆効果じゃなかねえ。

若い男 全くあなたつて男は、生まれつきの

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

初老の男 莫運な。こんな事件で、ゴツタがえしているところへ……

若い男 だから、ゴツタがえす前にとびこむのさ。今、ニュースをきいて、とるものとりあえず飛んで参りました。可愛いお孫さんをさらつて行くとは、何たる極悪非道人道に外れた行為であります。しかしご安心ください、不肖……あなた、何て名前？

初老の男 名前？

若い男 ま、そんなの何でもいいや、不肖私めがかつけましたからには、たとえ草の根を分けてもお孫さんは探してみせます、とか何とか云えばよ、奴は今ワラにもすがりたいとこだから、おお君、ありがとう！

初老の男 なるほど。……しかし、そんな立派な口きいて、もしお孫さんが草の根分けても探しだせなかつたら、逆効果じゃなかねえ。

若い男 全くあなたつて男は、生まれつきの

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

初老の男 莫運な。こんな事件で、ゴツタがえしているところへ……

若い男 だから、ゴツタがえす前にとびこむのさ。今、ニュースをきいて、とるものとりあえず飛んで参りました。可愛いお孫さんをさらつて行くとは、何たる極悪非道人道に外れた行為であります。しかしご安心ください、不肖……あなた、何て名前？

初老の男 名前？

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

初老の男 莫運な。こんな事件で、ゴツタがえしているところへ……

若い男 だから、ゴツタがえす前にとびこむのさ。今、ニュースをきいて、とるものとりあえず飛んで参りました。可愛いお孫さんをさらつて行くとは、何たる極悪非道人道に外れた行為であります。しかしご安心ください、不肖……あなた、何て名前？

初老の男 名前？

若い男 ま、そんなの何でもいいや、不肖私めがかつけましたからには、たとえ草の根を分けてもお孫さんは探してみせます、とか何とか云えばよ、奴は今ワラにもすがりたいとこだから、おお君、ありがとう！

初老の男 なるほど。……しかし、そんな立派な口きいて、もしお孫さんが草の根分けても探しだせなかつたら、逆効果じゃなかねえ。

若い男 全くあなたつて男は、生まれつきの

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

初老の男 莫運な。こんな事件で、ゴツタがえしているところへ……

若い男 だから、ゴツタがえす前にとびこむのさ。今、ニュースをきいて、とるものとりあえず飛んで参りました。可愛いお孫さんをさらつて行くとは、何たる極悪非道人道に外れた行為であります。しかしご安心ください、不肖……あなた、何て名前？

初老の男 名前？

若い男 ま、そんなの何でもいいや、不肖私めがかつけましたからには、たとえ草の根を分けてもお孫さんは探してみせます、とか何とか云えばよ、奴は今ワラにもすがりたいとこだから、おお君、ありがとう！

初老の男 なるほど。……しかし、そんな立派な口きいて、もしお孫さんが草の根分けても探しだせなかつたら、逆効果じゃなかねえ。

若い男 全くあなたつて男は、生まれつきの

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

初老の男 莫運な。こんな事件で、ゴツタがえしているところへ……

若い男 だから、ゴツタがえす前にとびこむのさ。今、ニュースをきいて、とるものとりあえず飛んで参りました。可愛いお孫さんをさらつて行くとは、何たる極悪非道人道に外れた行為であります。しかしご安心ください、不肖……あなた、何て名前？

初老の男 名前？

若い男 ま、そんなの何でもいいや、不肖私めがかつけましたからには、たとえ草の根を分けてもお孫さんは探してみせます、とか何とか云えばよ、奴は今ワラにもすがりたいとこだから、おお君、ありがとう！

初老の男 なるほど。……しかし、そんな立派な口きいて、もしお孫さんが草の根分けても探しだせなかつたら、逆効果じゃなかねえ。

若い男 全くあなたつて男は、生まれつきの

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

初老の男 莫運な。こんな事件で、ゴツタがえしているところへ……

若い男 だから、ゴツタがえす前にとびこむのさ。今、ニュースをきいて、とるものとりあえず飛んで参りました。可愛いお孫さんをさらつて行くとは、何たる極悪非道人道に外れた行為であります。しかしご安心ください、不肖……あなた、何て名前？

初老の男 名前？

若い男 ま、そんなの何でもいいや、不肖私めがかつけましたからには、たとえ草の根を分けてもお孫さんは探してみせます、とか何とか云えばよ、奴は今ワラにもすがりたいとこだから、おお君、ありがとう！

初老の男 なるほど。……しかし、そんな立派な口きいて、もしお孫さんが草の根分けても探しだせなかつたら、逆効果じゃなかねえ。

若い男 全くあなたつて男は、生まれつきの

ろつて、専務の家へとんで行くんだ！

――床屋のおかみさんの嘆。

床屋 (力なく戻ってくる) わしや……どうも、駄目な男だ。(鳩小屋を見あげて) おい。……もう、店を閉めるぞ。

男の子 ……。(ふりむかない)

床屋 お前までわしに販たててんのか。……けんどわしや、誰にもさからわす悪いこともせず、やってきた。隣のかみさんはポロクそに云うが、誰の邪魔にもならんようにやってきた。……つまりは、運が弱いんだわ。(咳をきいて)……あのぶんじや、明日の朝はまた発作だ。(裏へ)

――音楽。(管楽器のソロ)

男の子 ……！(たちあがる)

――工場の赤い火を反映して閃けたホリゾントの色が、インディゴの夜空に

だんだん染めかえられ、満天の星が美しく燦めく。

――それそれ、ゴンドラに乗った女の子と老人が、舞台の上空にあらわれる。

老人 いいかね、忘れないように。潮のひき

い。それに、みちしお母にしても、ひきしお母にしても、あそこの特急は光と同じ速さであの宇宙を走るのだからね。

女の子 あの子に、さよならすれば、もうそれでいいよ、おじいさん。

女の子 じゃいいわ。……だってあの子は、あたしの夢なんかもう見ないにきまつてるんですよ。

老人 とくべつ、仲がよかったのかね、あの子と。

老人 (笑う) いいから、行つといで。

女の子 ……どうして、そうおもうの。

女の子 おじいさん、そこで待っていてくれる。

老人 あれからちょうど一週間たった。いよいよ出発するときには、誰でも、とくべつ仲がよかった人のそばにとどまっていたがるものだからな。

老人 わしは、海まで行って来なきやならん。

女の子 でも、その特急に乗って、あそこへ行ってしまつてからでも、こっちへ来たいときには来れるって、云つたでしょう。

女の子 海？

老人 そら、もう忘れたぞ。

老人 いいや、あれはもう海じゃない。潮の匂いもしなげりや、小魚いっぴき泳いじゃおらん。……昔の海辺の、古い小さい家におばあさんがひとり寝ている。そのおばあさんに逢つてくるんだよ。

女の子 あら、ちがうの。

女の子 そのおばあさんは、おじいさんの……およめさんだったの？

老人 わしらが来たいときじゃない。誰かがわしらを、夢の中でよんでくれたときだ。

老人 (首を振る) ……わしの乗った輸送船が、敵の潜水艦に沈められたときいて、わしの友だちのおよめさんになった。……戦争がすんで、わしは生きて戻つたが、友だちは戦争のおわる年の春、空襲で亡くなつてしまつた。

女の子 そうだった。……でも、お母さんは毎晩あたしの夢をみる。だから、お母さんには、これからもずっと逢えるわけでしょう。……でも、そんな毎晩だと特急に乗れなかつたり、お母さんの夢に間にあわなかつたりしないかしら。

老人 (首を振る) ……わしの乗った輸送船が、敵の潜水艦に沈められたときいて、わしの友だちのおよめさんになった。……戦争がすんで、わしは生きて戻つたが、友だちは戦争のおわる年の春、空襲で亡くなつてしまつた。

老人 しょっちゅう臨時がでてるから心配な

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 しょうちゅう臨時がでてるから心配な

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 きつと来るとおもつたけどな。

男の子 へきてね、菊の花をかたづけようとしたらそのままだしといひ頂戴って、先生……。

女の子 あのとときからずっと、お母さんのそばにいたわ、だって、ひっきりなしにあたしのこと憶いだしては泣いているんですけど。

女の子 ……いくら、いい先生だって、駄目さ。

男の子 父ちゃんは……。

女の子 (うなだれて) ええ。……あたしは行つちやわなきやならぬんだわ。

女の子 (考えて) よく、おかないけど……あの病院のやり方は親切じゃなかったとか、夏なか呼吸器科の先生が泊つてくれたら、あんなことにならなかつたとか、悲しがつてゐるより憤つてゐるみたい。

男の子 ……沈黙。

男の子 (驚いて) 男だもんな。……新しい学校の奴らに、逢いに行つたんだろ。

男の子 ……。

女の子 教室へ二回行つたわ、あたしの机には、菊の花がいっぱい置いてあった。黄色と白の。……二回目のときは、もう夕方ですぐ帰つてしまつた。教室に先生が片残つて四角のお皿をのけてた。学校の花畑で写生したあたしの真赤なサルビアの絵ができてたとき、先生の目が涙でいっぱいになつたわ。

女の子 ……じゃ、あなたのためにお祈りするわ、この街の空気をきれいにするようにそれで、あなたのお母さんのセンソクがなくなるように。……そのために、あなたが科

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

男の子 父ちゃんはどこにくらしいって、その先生が云つたって、隣のおばさんが新聞を手に突た。

男の子 ……。

女の子 もう一べんおじいさんのおよめさんになれなかつたの？

老人 うむ。……そうなれたかもしれないが、でも、わしらはそうしなかつたのさ。

女の子 どうして？

老人 ……いまでもおばあさんは夢をみる。青い海を背にまつ赤な大漁旗をたてて港に帰ってくる船の夢や、竜神さんのお祭りで買つてならした海ほろびぎの夢や、甘煮魚にするハセを団扇の火で香ばしく焼いている夢、……もちろん、亡くなつたご亭主の夢もだ。

女の子 それから、今のうちに、おじいさんの夢も。

老人 ……さ、あの鳩小屋のそばにおりてお行き。小さな女の子にも小さな女の子なりに、この世にのこしていけるものがある。それを、のこしておいで。

老人 ……老人は去り、女の子のゴンドラは鳩小屋の男の子のそばへ降ろる。ふたりは、ぎこちなく見つめあう。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

女の子 わかつてたわ、あたし。

男の子 待ってたんだ、ずっと。

男の子 抱いたりしちゃ駄目だ。(鳩籠をバタンとしめる——泣き声きこえなくなる)

女の子 あら。

男の子 かわいくなんか、あるもんか。

女の子 ……どうしたの、あなた。

男の子 どこから連れてきたか、話してやるうか。

女の子 ……こわいわ、あなたの目。

男の子 盗んできたんだ。

女の子 何ですって。

男の子 盗んできたのさ、あいつらのところから。

女の子 それで……どうするの。

男の子 仇をうつんだ。

女の子 仇を……どうやって。

男の子 簡単さ。この籠をもって、あの煙突

のてっぺんに登ってやる。脱いだ靴の中へ

手紙を入れとくん。手紙にはこの街の空

気をきれいにしてください。きれいにした

ら赤ん坊は返しますって書いてくん。

女の子 おまわりさんや、先生や、おとなが

皆あなたを追つかけるわ。

男の子 手紙に書いてくん。おとなが登っ

てきたら、この籠と一緒に煙突からとびお

りますって。

女の子 そんなことしたら!

男の子 ……(沈黙のち)死ぬのって、う

んと苦しいかい。

女の子 よく覚えてないわ。でも、ゼンソク

の発作で寝がつかまって息ができないのど

きにくらべたら……もつと苦しいことなん

てないとおもうわ。

男の子 うん、跳箱とぶときみたいに一べん

踏みきつちゃえばな。

女の子 でも……それからは、寂しいわ。

男の子 ……。

女の子 話ができるのは、誰かがおもいだし

たり、夢をみたりしてくれたときだけ。そ

して、あたしのこと可哀そうがってくれる

だけ。あれからはもうふざけたり、髪をひ

っぱったり、叱ったり、ぶったり、誰もし

てくれない。……生きていたかった、あた

し。

男の子 だから、しかえししてやるんだ。

女の子 あたしのために……?

男の子 ああ。

女の子 そうしたって、生きかえれやしない

わ、あたし。

男の子 じゃ、どうしたら。

女の子 知らないわ。……どうしたって、そ

これは駄目なのよ

男の子 絶対に、かい。

女の子 (肯く) ええ。

——沈黙。

女の子 十八人の赤ちゃんにしかえしたら

工場のえらい人の命令で、何日かこの街の

空気はきれいになるかもしれないわ。お正

月か台風のとみたいに。

男の子 ……それだっさい。

女の子 ちつともよくないわ。何日か空気が

きれいになったって、そのあとで十八の工

場じゃ休んだ分までとりかえすために、夜

中までしごととして、倍も空気を汚すじゃな

い、あなたのしかえしは、又しかえしされ

ちゃうのよ。

男の子 それじゃ、あいつらに復讐もできな

いっていかかい。

女の子 ええ。……あたしも、おじいさんも

死んだ十八人のだれも、復讐はできないの

よ。復讐しないことが、あたしたちにでき

る、たったひとつのしかえしなのよ。

男の子 復讐しないことが、……しかえしだ

って。

女の子 そうよ。

男の子 わかんない……わかんないよ。

女の子 あなた……いまでも……あたしのこ

と好き。

男の子 何だって、そんなこと訊くん。

女の子 ほんとに、あたしの仇をうってくれ

て……。

男の子 だから……

女の子 しかえしや復讐じゃなしに、仇をう

って。あたしには間にあわなかつたけど、

この街の空気をきれいにする科学者になっ

てね。もしもなれなかつたら、無理に科学

者じゃなくてもいいわ、あたしじゃない、

およめさんをもらって、それから赤ちゃん

が生まれて……

男の子 およめさんなんて、もらうもんか。

女の子 莫迦みたい、おとなになりや誰だっ

て皆もらうわ、そして皆、およめさんと赤

ちゃんのしあわせしか考えなくなっちゃう

のよ。……科学者じゃなくてもいいけど。

およめさんや赤ちゃんと一緒に、この街の

子どもたちのしあわせのために働くひとな

なってね。

男の子 判るもんか……そんな、先のこと。

女の子 それが、あたしの仇をうってくれる

ことなのよ、……あのおじいさんのよう

に、あたしも逢いに来るわ、あなたの夢の

なかへ。

——舞台の高みに、老人。

老人 (女の子に) さあ、おいで。……時間

だ。

男の子 もう、行っちゃうのかい。

女の子 赤ちゃんをみせて。

男の子 ああ。

——男の子、鳩籠の蓋をあける。赤ん坊

たちの泣き声。

女の子 ほら、いいものをあげるわ、(貝殻

を一粒づつ、籠の中へ赤ん坊の手に握らせ

る) しっかり握って頂戴。お耳のそばへも

っていくと、波の音がきこえるでしょう。

波のうねりの上をはしる風の音もきこえる

でしょう……。

——赤ん坊の泣き声しずまり、音楽にか

わる。

女の子 青い波と空をわたる風の音をききな

がら、ねんねするのよ。いい夢がみられま

すように……仲よしの友だち、お日さまと

花の匂い、しあわせな未来の夢。(最後の

一粒をにぎらせながら)……それから、も

つと生きたかった、あたしの夢もいっしょ

に。(籠の蓋を閉じ、立ちあがる)……さ

よなる。

男の子 ……。

——女の子のゴンドラ、老人のそばへの

ぼる。

——老人と女の子のゴンドラ、去る。

老人 涙をおふき。

女の子 ……あの、赤ちゃんたち。

老人 もう帰ったさ。

女の子 お母さんのそばへ。

老人 ああ、おまえさんの貝殻を握って。……

(星を指さして) ごらん、シグナルの星

が青にかわった、でかけよう。

——老人と女の子のゴンドラ、去る。

——男の子、長い間そのあとを見お

り、やがて鳩籠のそばにうすくまっ

て、その蓋をひらく。

男子の 子 あ……。

——ラジオのニュースがはじまって、音楽はきえ、照明もかわる。

ラジオのアナウンス 「十八人の赤ちゃんの蒸発事件にかんする緊急ニュースをお伝えいたします。……まことに信じがたいことでありますが、今晚午後九時ごろいつせいに姿をけし警察当局が凶悪な誘拐事件とみて捜査をすすめていた、帝國鋼管ある街工場長カネトさんの孫、タイコちゃんはじめ十八人の赤ちゃんは、全員無事であることがたまたま判明しました。……」

——初老の男と若い男、くたびれた恰好で入ってきて、ベンチに腰をおろす。

ラジオのアナウンス 「……これらの赤ちゃんは、蒸発の際と同じ寝室、子供部屋などでいつせいに発見されましたが、外部から運びこまれた形跡は全くなく、診察にあたってはいる医師たちも、赤ちゃんの体には外へ連れ去られたり連れ戻された徴候は、何ひとつ認められないと言明しております。

初老の男 今度も私は遅すぎた。……専務の家の電話は、きみのような素直しい男たちには占領されてしまっていて、私の罰こむスギなんかこれっぽっちもなかったよ。……だが、君も昏くはいかなかったのだね。

若い男 おれははやりすぎたのさ。……杜長のところから、あてずっぽにかけたしょっぱなの電話が、遽りによつて、非番で休んでのおまわりの自宅へつながつちまやがってよ。……赤ん坊があつたから助かったけど、あぶなく犯人にされるとこさ。

ラジオのアナウンス 「……ただ不思議なこととは、発見された十八人の赤ちゃん全員がひとつ宛小さな貝殻を握っていた点で、家人は、貝殻など与えたおぼえはない、と口をそろえて証言しております。警視庁鑑識課では、これらの蛤、キシヤゴ、巻貝、桜貝などの貝殻が、赤ちゃんの手に渡った経路の割りだしを急いでおります。……」

初老の男 貝殻が、どうか云ったねえ。
若い男 ああ。貝殻が、どうか云った。

若い男 てんで判んねえな、床屋のクセに頭刈らねえなんぞ。

床屋 (ラジオを消して) お前さんの好きなセ、セネストだあ。……わかつたかね、わかつたわ……帰ってくれ!

若い男 床屋のストライキ、きいたこともねえや。(出て行く)

初老の男 今とき三百五十円のかみどころなんて、安すぎると思つたら。……私は、どうして、こんな目にばかりありのかねえ。
(出て行く)

——遠くの工場で、鉄を叩いてるグラウングラウングという音。

……床屋、鳩小屋の下から板つべらと棒をひっぱりだし、赤錆した鋸でゴングゴングやりはこめる。

——男の子、それを見ている。

男の子 プラカードかい。
床屋 ……「エエがねえこやねえか、母ちゃんか、その……明日、行ってくれば、きかねえんだからよ。

男の子 ふーん……。
床屋 (息を吐きかきながら) きかねえノコだ。

初老の男 何のことだろう。(椅子にのぼつて、白布をまとう)

若い男 知つちやいねえや、(漫画雑誌をとりあげる)

初老の男 (裏へ) おおい。はやくやつてくれ。
——床屋がでってくる。それから、近所の
おかみさんがでってくる。

おかみさん 赤ちゃんが、みんな無事で戻ったんだって……やれやれだよ。

床屋 なんだなあ。
おかみさん おかみさん、どうだい。
床屋 やつと、おさまつて、寝ついたとこだわ。

おかみさん さつきね、うちの件知ってる病院へ一緒に行こうって話したんだよ。その病院なら、儲け主義じゃないし、公費病の申請だって親身にやつてくれるし……おかみさんから、話聞いたる。

床屋 (頷く) ああ。
おかみさん じゃ、明日の朝むかえにくるか
らね。(去りかけて、立ちどまる)……作
が、こう云うんだよ。母ちゃんは風の神様

……おい。降りきて押さえてくれ。
男の子 うん。(立ちあがつた目で) あ、流
れ星!

——幕がおりる。
……証日女の子と老人の乗るゴンドラが、設備上不可能な場合、階段か椅子を用いても不都合はないとおもつた。

じゃないけど、ビュービュー北風で床屋の小父ちゃんのオーペー脱がそうとしてる。ほんとに脱がしたいんなら、おてんと様になつて小父ちゃん援める方が利口だぜ。
床屋 ……オ、オ、オ、わしの。
おかみさん (笑う) 親に理屈いふんだからねえ、きいた風なさ。(出て行く)

床屋 ……(口のなかで、ゴツゴツ呟きながら、考えている)

初老の男 おい、どうしたんだ。
若い男 いつまで待たすんだよ、店の漫画全部読んじゃつたじゃんか。

床屋 今夜は、もう、店じめえだから……若い男 何だつて?
初老の男 おい、おい。
床屋 (珍らしく断乎と) 店じめえだあ。
若い男 そんなの、あつかよ!
初老の男 こんな、途中までのやりかけで外が歩けるか!

床屋 (初老の男の白布を脱ぎとつて) さっき、もう歩いてきたつたでしょうが。(グルグル回っているあめん棒を、スイッチを押して停める)

きょう
兄

だい
妹

その一

木造のあまり新しくないアパートの一室、六畳と二畳、それに申し訳けのような小さな台所がついている。新しい三面鏡、テレビ、冷蔵庫が、生活を始めてからの日の浅さを思わせるような僅かしかない家具の中で目立っている。三畳の部屋の隅には、ダンボールが積み上げられている。

西日が差込んで、夕方が近い気配。

昌江、鏡に向ってお化粧している。傍で隣の主婦が、鏡の中の昌江の顔を、好奇心に満ちた目でのぞきこんでいる。

隣の主婦 いやあ、すごく綺麗になった。

お化粧映える顔だね、奥さんは。やっぱ、もががいい人は違うねえ。

昌江 何云ってるだか、奥さんなんか若いだ

ないし……。

昌江 割合に、奥さんのアルバイトも多いだよ、このごろ。今はホステスって云ったって、普通のお勤めと同じだもん。本人さえしっかりしてれば、何てことはないだよ。

正明とびこんでくる。大人に身体をすり寄せてくるような淋しい側面を持っている。

正明 ママ、お姉ちゃんが来たよ。

昌江 葉子姉ちゃん？

葉子、Gパンにナップザックを肩にかけて軽装で入ってくる。

葉子 こんにちは。お姉さん、まあちゃんたらあぶないよ。バスの停留所の近くで遊んでいたよ。自転車道の中をスイスイ走ってるんだから。

昌江 まあちゃん、駄目じゃない。あぶないところへ行っちゃいけないって云ったでしょ。

隣の主婦 まあちゃん、真弓も二緒だった？

小島真木

もん、もつと綺麗になるよ。

隣の主婦 あたしや、何やったって駄目だよ。お化粧して、おしめ洗ってりや世話ないじゃん。このあいだ、実家でね、もうちよつと、こじっかり出来ないだか、おまえはやるせありったけって格好しているって云われちゃっただよ。ねえ、失礼しちゃう。二人も小さいのがいるだから、仕様が

昌江 みんなそうだよ。子供が小さいうちは仕様がな

隣の主婦 ほんと、そう云っちゃ悪いけどさ、奥さんだってこのごろだもんねえ。——わあ素敵だね。これ着てくの？

昌江 そういつも同じ洋服ばっかって訳にもいかないからね。無理しちゃったじゃん。隣の主婦 いいねえ。ねえ奥さん、変なこと聞いて悪いけど、一晩いくらぐらいになるの。

正明 真弓ちゃんは、幼稚園の方へ行っちゃ

隣の主婦 あら困る。一緒に連れて来てくれればよかったのに。じゃ、おじやまさま。

電気屋が、安物のステレオを持ってくる

電気屋 ごめん下さい。毎度どうも有難うございます。ステレオを持って来ました。

昌江 ご苦労さま。悪いけど、ここへ置いて、

電気屋 はい。

隣の主婦 ステレオも買ったの？ いいねえ。うちでも、お父ちゃんが欲しがるとだけどねえ。

電気屋 (テキパキと作業を続けながら) 奥さんもおかですか、今、売り出し期間中ですから、たいへん、お買得になっていますよ。

隣の主婦 (指で丸をこしらえて) これが

電気屋 お金は、何時でも結構です。お手軽に買って頂くように、月賦もあります。ぜひ御引き期間中に買って下さい。定価の

昌江 二千五百円よ、とにかく、出さえずれば、それだけ保証してくれるだよ。

隣の主婦 二千五百円！ いやあ、いいねえ、内職じゃ、毎晩十二時迄やったら、いいところ、月五、六千円だもんねえ。

昌江 内職は、割りが合わないよねえ。パーっていったってね、外から思う程いやらしいところじゃないよ。うちなんか、すごく上品なお店だもん。客種だっているし、ごく大事にされて、どっちがお客だか分らない位だよ。話し相手するだけだもん。

隣の主婦 それで税金がもらえるんだから……いいねえ。——ねえ。奥さん、あたしじや駄目かしら？

昌江 何が？

隣の主婦 (冗談めかして) あたしでも、使ってくれるかしら？ お父ちゃんとこ毎話でしょ。今輸出が駄目じゃん。どうも危ないらしいだよ、早く土地も買って置きたいし。——夜だったらさ、お父ちゃんに子供みてもらえるじゃん。

昌江 聞いてみてあげると。このあいだ、ママが、人を入れたって云ってたから。隣の主婦 うん——まだ決めた訳じゃないからさ。お父ちゃんが、何て云うかも分ん

二割五分引きになってますから。こんな値引きは、うちでも、そうそうは出来ませんからねえ。

隣の主婦 まあ、考えとくわ。

電気屋 (チラシを渡して) 他にもいろいろとありますから、ぜひ店の方へ来て見て下さい。

隣の主婦 じゃ、おじやまさま。真弓を捜してこなきゃ。

去る。

昌江 まあちゃん、ママがいない時は、家の傍で遊んでなきや駄目って云ったでしょ。

正明 ママ何時もいないんだもん。ぼく淋しくなっちゃったから、迎えに行っただんだよ。

昌江 美容院はね、あぶない道渡んなきゃならないから、来ちゃ駄目って云ったでしょ。

葉子 まあちゃん、こんなに税金持ってたよ。

昌江 ああ、出掛ける時、持たせたの。葉子 でも、まあちゃんに、百円は多いんじゃない。

昌江 ねえ、仕様ががない。このごろ、お金使
うの覚えちゃって

電氣屋、サ・ビス用のレコードをかけ
る。

昌江 あら、いいじゃない。

電氣屋 ええ、これは、値段のわりに、音が
いいんです。これが説明書です。

昌江 お金の方は？ 頭金払うの？

電氣屋 月末で結構です。じゃここにサイン
をお願いします。――冷蔵庫やテレビの調
子はいかですか？

昌江 別に悪くないわ。

電氣屋 そうですか、じゃ、どうも有難うご
さいました。

去る。

葉子 お姉さん、大丈夫なの？

昌江 月賦だもん。何とかなるわよ。

葉子 そんならいいけど。――お姉さん……

昌江 え？――ああ、このごろね、あたし、
パーへ勤めてるの。パーっていったって、
ちゃんとしたお店よ。

葉子 保険の方は、やめたの？

昌江 葉ちゃんにも、入ってもらっちゃって

悪かったけど、あたしにや向かないのよ。

ノルマがすごいでしょ。あたしなんか、親
戚に入ってもらっちゃえば、あとはあてが
ないんだもん。パパも商売始めたし。

葉子 商売って？

昌江 お通し屋よ。パーや飲み屋へ卸して歩
くのよ。

葉子 何を卸すの？

昌江 お酒のおつまみよ。

葉子 ……このあいだ、新しく出来た合板会
社へ入いれそうだったって云ったのは、どう
なったの？

昌江 あれもねえ、決りかけてただけど、
結局駄目だったんだよ。

葉子 どうして？

昌江 だって、ちよっと調べりや分ることじ
やないの。

葉子 ……だけど、どうしてそんな商売やる
ことになったの？

昌江 あの人の昔の友達が、やってみたりっ
て云ってくれたんだよ。今日も名古屋の市
場まで仕入れに行ってるんだけどね。もう
とっくに帰って来ていい頃なのに……

葉子 ねえ、お姉さん、大丈夫なの、それ？

昌江 あの人だって、もう年だもの、葉ちゃ

ん。まえみたいなことはないと思うよ、あ

たしだって、パパの方が上手くいけば、お
店すぐやめるから、心配しないで。

葉子 あたし、苦勞性なんだね。

昌江 葉ちゃんには、あたしたち、心配かけ
ちゃったもん。

正明 お姉ちゃん、早くお土産、ちょうだい
よ。

昌江 なに、まあちゃんたら。お土産の催促
なんかして。

正明 だって、お姉ちゃんが、お土産持って
来たよって云ったんだもん。

葉子 そうだよねえ。お姉ちゃんが、おうち
へ行ったらあげるよって云ったんだもんね
え。はい、これは、本とお菓子。これは、
まあちゃんの好きなキリンさんのセーター
お姉ちゃんが、初めて編んだんだよ。

正明 わーい。

昌江 よかったね、まあちゃん。

葉子 着てみて、まあちゃん。お姉ちゃん、
一生懸命、編んだんだから。（正明に着せ
る）

昌江 いいじゃん。お姉ちゃん、上手だねえ
葉子 学校で習ってるんだよ。まあちゃん、

カツコイイ！ この次は兄ちゃんやお姉さ
んのも編んであげる。ただし、一枚づつ。

毛糸買うお金がないからね。

昌江 あたしらはいいいよ。それより、自分の
でも編みなよ。葉ちゃんも、そろそろ年頃
なんだから、もっと女の子みたいな格好し
なよ。

葉子 だって、山へ行ってきたんだもん。

昌江 どこ行ってきたの？

葉子 浜石。面白かったよ。

敏明、浩司、にぎやかにとびこんでくる

敏明 ああ、参った参った。夜中に出てっ
て、すぐとんぼ帰りだからなあ。

昌江 おかえり、遅かったじゃん。

敏明 先きに、一回りしてきちゃったんだ。

葉子 なんだ、葉子来てたのか？

葉子 今来たばっか。

敏明 そうか、おい、熱いお茶くれや、頭が
ボーっとしちゃってらあ。一睡もしなかつ
ただもんなあ。浩司、これ、おれの妹だよ

浩司 見貴に似てるから、すぐ分ったよ。

敏明 そろか、おれ、こんな悪い顔か。

昌江 葉ちゃんの方でそろ云いたいよ。ねえ

葉子 ほんと。しよってる、兄ちゃん。

敏明 そいでも、もうちっと、何とかならな
いだから。傍へ行ってよく見なきゃ、男
だか女だか分からないじゃないか。おまえは
女じゃなくて、カンナだ。

葉子 兄ちゃん、いつも悪口ばっか云うだ
もん。やっさりしちゃう。

敏明 あれ？ 悪口か？ おりや、本当のこ
と云ったつもりだけなんだ。

葉子 また、兄ちゃんは！

敏明 おつ、ステレオきたじゃんか。カツコ
イイな、（かけてみる）いいなあ。

浩司 分かるのか、見貴。

敏明 失礼なこと云うなよ。ジャジャジャン
ぐらいい知ってるさ。

昌江 そこだけでしょ。

敏明 馬鹿野郎。だけん、やっぱ、古いや奴
だとお思いでしょうが（鶴田浩司の真似
で）の方がいいな。

浩司 おれは、高倉健の方がいいな。あんさ
んには、なんの恨みもござんせんが

敏明 変な声だすな。だけん、今はサイン一
つで、何でも買えるんだからな、ちよっと
いなない割に、これも随分変わったよなあ。お
れは、びっくりしたもんな。前にや、おめ

え、小さい店ばっかだったに、デパートか
ら何から大きい店が進出してきてる、金さ
え出しや欲しいもんは、何でもあるだから
な、今度は、カラテレビだな。

葉子 サイン一つで買えたって、結局は、お
金払わなきゃなんないだからね、兄ちゃん

敏明 月賦だったら、知らない間に払えちゃ
わあ。金貯めてつかから買うなんて、馬鹿み
たいだよ。……これ食ってみるよ。昌江、
包丁持って来い。カマボコの中に、チーズ
が入ってるんだぞ（包丁で切る）

葉子 きれいだねえ。

敏明 こんな他じゃ、住入れの三倍ぐらい
で流るだぞ。おれっちは、なあ、浩司、倍
ぐらいで卸すもんで、みんな置いてくれる
よな。

浩司 間のマージンが入らないからな。

敏明 おか守で、市場に間に合わなきゃなん
ないから、夜うち朝がけだよ。こっちは。

昌江 ボロ自動車で、よく行けるだよねえ。

敏明 二万円の車だな。ハハハ。早く金貯め
て免許とらなきゃな。そうすりや、浩司と
交代でやれるからな。こいつは葉子、自動
車学校も行かないで、一画で免許取っちゃ
ったのよ。学科もだぞ。

浩司 修理工場にいたことがあるからだよ。

敏明 どうだ、うまいだろう。

葉子 うん、おいしい。

敏明 正明もほれ。

正明 だまって取り、少し離れたところで食べる。

敏明 ここで食やいいじゃないか。おまえは、可愛気がないな。

葉子 だって、荷物が置いてあるんだもんねえ。

昌江 あんた少し、この子に神経質すぎるんだよ。二年も一緒にいなかったんだから、仕様がないうじやん。

浩司 まあ坊、こっちのポケットへ手を入れてみるよ。

正明 (浩司のポケットをさぐる) あ、かえるだ。

浩司 ほれ、動くぞ。

正明 ほくにやらせて。(空気を送ると動くかえるのおもちやを動かして遊ぶ)

敏明 こいつが赤ん坊の時は、俺が毎日湯を浴びさせたぞ、おまえが寝ている間中、おしめの洗濯から何から、みんなやってた

大変なのは、あたしらばっかじゃないんだって思ったっけよ。みんな仲間なんだから、支えあって、あたしらが明るく暮らせる世の中になければって云うんだよ。

敏明 そいつら、赤じゃねえのか。

葉子 そんなんじゃないって、だけど、もしそうだとすると、本当のこと云ってるのさどうして悪いの。

敏明 おれは、赤はきらいだ。夢みたいなきとばっか云やがって。クみんな仲間だク笑わせるな、結局、自分のことは自分で始末つけるしかないのよ。誰が他人のことなんか考えるか、そんな奴がいたら、何か魂胆があるに決ってる。赤は会社、ぶっつぶすのが目的なんだからな。

浩司 おれも、そういう奴に誘われたことがあったけえが、都合いい奴だっけよ。すぐやめちやったもんで、それっさりになっちゃったけえが。だけん、そんなこと云われなろ、シラケちやんな。

敏明 ドツチラケよ、おまえ。氣をつけるよ、富士紡っていや、こちらじゃ知らないもんがないくらい、大きいところじゃなか、そこで働いてて、なんの不眠があるだよ。(浩司に) こいつんとは、会社の中に学

ぶな、こいつ、よく肥えてて可愛いっけぞ。おれは、今、赤ん坊が欲しいな。

昌江 冗談じゃないよ。今できたら、お手上げじゃんか。

敏明 早く商売を軌道に乗せなきゃって訳か。がんばらなくっちゃだ。おい、浩司、これ、やっちゃわさあ。

浩司 あいよ。まあ坊、またあとでな。

二人、仕事を始める。

葉子 まあちゃん、お姉ちゃんとやろう。お水で泳がせると面白いんだよ。

台所から、水を入れた洗面器を持ってきて遊び始める。

昌江 葉ちゃん、今夜泊ってくでしょ？

葉子 うん、泊めて。外泊とってきたんだ。

昌江 葉ちゃん、浜石へ行つて来たんだって

敏明 誰と？ 恋人とか？

葉子 いやだ、兄ちゃん。サークルの人とち

と行つたじゃん。

敏明 サークルって何だ。

葉子 山へ登ったり、歌ったり、駄べったり

校があつてよ、働きながら高校を卒業させてくれるだぜ。

浩司 古いな、見貫は。それが解なんだよ。

敏明 悪いっけな、おれは、どうせ、餌ももらつたことがあるからな。

葉子 学校つたつてね、兄ちゃん。先生は課長や倉庫だもん。会社の名前を恥しめないようにとか、自由をはきちがえないようにとか、会社の為になることばっかしか教えないだよ。あとは花嫁修業みたいなことばっか。

敏明 だけん、おまえは、学校へ行けるからつて入つたんだろ。おれはロクでなしだけけえが、こいつはよく出来ただよ。高校なんで、一発で入つちやあ。おれが、もうちいつとっしかりしてりやな、こいつは可哀想。

昌江 ほんと、葉ちゃんには、何もしてやれなかつたね。あたしらが、現代にならな

きやいやないのに、心配はっかかけて。

葉子 何云つてるだか。

敏明 いいつていいつて。露光が上手くいつたら、大学だつて何だつて行きたいところへ行かしてやるからな。

昌江 あてにしないで待つてね。葉ちゃん

読書会やったり、楽しいことは、何でもやる会なんだ。

敏明 なんだ、会社のレクレーションか。

葉子 会社のなんかじゃないよ。会社のサークルなんて、何にも面白くないじゃん。お

葉子やお弁当、ただでもらえるけどさ、会社のお膳立てしてくれた通りに動くだけだ

もん。会社で働いて、中にある学校へ行つて、寮に住んで、寝るのから食べるのから

全部会社に管理されちゃってるんだもん。

せめて日曜日位は、誰が何て云つたつて、

自分で使いたいじゃん。お部屋のおねえさ

んにさそわれて入つたんだよ。サークルの中なら自分の思つてることも話せるし、す

ごく楽しいんだ。みんな日曜日が待遠しい

つて云うよ。今日はさ、他の会社の人とち

と一緒に رفتつたの、すごく面白い人がいて

ね、ほく石原裕次郎です。年は二十才、給

料は三万円、デーリする金もない男ですな

んで、自己紹介しちやてる。

浩司 キザ。

敏明 全くキザ絵に描いたみたいだ。

葉子 いや、すごく明るくて、くじけたと

ころのない人だっけよ。みんな仕事のこと

や会社のことなんか話してくれたっけぞ、

敏明 馬鹿野郎。もうちつこの我慢だ、なあ浩司。おまえも、行きたいところへ行かしてやるぞ。おまえも、定時制へ行つてたずら

浩司 こっちへ来たばっかな。五時にや、仕事あがつていって約束で来たんだ。初め

だけだっけな。忙しい時にや、いやあな顔

されたりするもんで、つい休むたる。それでズルズルやめちやったんだ。みんな、夜

中の二時頃まで、語飲みながら残業するだ

ぜ。

敏明 なんだ？

浩司 製材だ。電線巻くドラマつて奴作つて

たんだ。

敏明 悪いところへ、入つたもんだな、製材工

なんて身は屑扱いだ。給料も安かつただ

ぜ。おれのおやしは、丸太降す時、ロイブ

が切れて、下敷きになつて死んじやつたの

よ、おれも、ちよつといたことがあるん

だ。ちよつと、ヨタつてた時だつたもんで

な、三人で夜中に材木運び出して、売っ

ばらちやつたんだ。それで喰込んだのが

一番最初よ。今考えりや、馬鹿したもんだ

な。

昌江 そんな大きい声で云わないでよ。よそ

へ聞えるよ。

敏明 聞えたりいいじゃないか。今更、休
裁振ったって仕様がな。いよ。

浩司 富士新なり、集団就職で一緒に来た奴
がいたっけな、佐々木夕子と白鳥何て云っ
たっけかな、あと、二、三人いたかな。

敏明 おまえの初恋の相手か？

浩司 そんなんじゃないよ。

敏明 赤くなんなくたっていいじゃないか

浩司 また嘘云う。赤くなんなくなっていない
よ。

敏明 鏡見てみよう。まっかつかだ。これぞ
初恋の味。

葉子 兄ちゃん、佐々木さんは、学園で一絡
の組だったけど、去年やめて家へ帰った
よ。他の人って、八木さんと水野さんじゃ
ない？たしか佐々木さんと一緒の秋田の方
だって云ってたと思っただよ。

浩司 おお、そうだよ。

葉子 二人とも、もうやめたよ、喫茶店に勤
めてるって聞いたけど。

浩司 ふうん。

葉子 やめてく人が多いだよ。二年たつと、
だいたい半分になっちゃうもん。

浩司 俺ばっかじゃないだ。

敏明 流れ流れて落行く先は、男一匹、お通

し屋か。おまえは、秋田にしちや、ズー
ー弁じゃないな。ちいつと変だけえが。

浩司 笑われるのは糞だからな。

敏明 よく、こんなとこ迄来たっけな、おれ
なら東京へいくな。

浩司 おやじや兄貴がみかんの援農で出稼ぎ
に来たことがあるんだ。暖かいし、いい所
だって云ったもんでな。

昌江 港町だから、ガサガサしてて、いいと
ころないっけでしよ。

敏明 おまえは、さつきから、何シコロシ
コしてるだよ。

昌江 何だか髪が気に入らなくて、いいじ
つてたら、余計変になっちゃったんだよ。

葉子 何んにもおかしくないよ、お姉さん。

敏明 髪がおかしいんじゃないよ、おまえ
の顔がおかしいんだよ。

昌江 何ともいいいな。ああ、何だかいやに
なっちゃった。

山下 入ってくる。一見して、チンピラ風
だったで、ちよつと乗せてけや。満男っちへ
どこもなく幼い感じが残っている。

敏明 あてにしないで、待ってるよ、兄貴。

敏明 馬鹿野郎、葉子にや、どんな無理して
も着物着せてやらせえて女房とも話した
んだ。ついでに浩司にも作ってやるぜ。

浩司 ついでか。

葉子 あたしは、着物なんかいらんないよ。そ
んなの意味ないもん。

敏明 そういうもんじゃないうって、世間な
のことはしてやりたいだから、いいじやな
いか。

山下 おれ、来年よ、おれのも覚えておいて
ね。

敏明 山さんよ、赤ん坊役で成人式へ行く
気か。

山下 子供がいちや駄目だって規則はないか
らよ。——敏さんの妹か、敏さんに似せ、
マブインやねえか。

葉子 (無視して) まあちゃん、おなかせい
たでしよ、先きに御飯食べな。

敏明 敏さんに似ずは余分だよ。こいつ、富
士新に行ってるんだ。

山下 富士新か。あそこの紡ねえをひっか
たことがあったなあ。すぐ、ひっかかるの
よ。休みの日に、車で行ってよ、遊びに出
てくる紡ねえに、お茶でも飲まないかと
ドライブしないかなんて云や、一コロよ。

敏明 おい、葉子、おまえ気をつけるよ。男
なんか、こんなのばかりだから、おれは
そんなことになつたら、やつた奴、只じゃ
おかないから。な

山下 男はみんな狼よか、やつてもよ、訴え
やしないから、安心よ。紡ねえは、男と遊
びたくって、うずうずしているからなあ。

葉子 (押えた声で) 仕事が終わってお部
屋に入ると、みんな、そのまま殺ころん
で起ちがれなくらい疲れちゃうんだよ。

敏明 仕方なしに学校へ行つて、あとは食べて寝
るだけで毎日が経つちゃう楽しいことも面
白いことも起りやしないのよ。だから町へ
出て行くんだよ。だから、ひっかかっちゃ
うんだよ。——紡ねえって言葉は、あたし
ら一番嫌いな。そう云われるからみんな
劣等感持つちゃうんだよ。

敏明 葉子、こいつは、まだねんねで——
なんだ、そのギターは。

山下 鏡輪で金貸したら、そのまんま、逃
ちやつたのよ、聞きまわつて、やつと家が分

金とりにいくからな。

敏明 金くれるってか。

浩司 満男っちおやじも可哀想だな。興行の
切符の金、ちいつと使い込んだだけなのに
な。

山下 本人はトンスラしてるんだから、分り
やしねえよ、ほれるだけぼらなきやな。な
んだ、奥さん、まだ行かないのか。うちの
奴はとっくに رفتたぜ。

昌江 ほんと？もういい。行ってくるよ。葉
ちゃん、悪いけど、正明に御飯食べさせて
くれる。

葉子 いいよ、あとは、あたしがするから大
丈夫。

昌江 じゃ悪いけど、お願いね。

葉子 行ってらっしゃい。

正明 バイバイ。

昌江 バイバイ、お姉ちゃんの云うこと聞い
てよ。

山下 あつ、奥さん、首にバンソウコウが
いてるよ、はがさなきや色酒だし、はが
しや……だし、な。

昌江 何云ってるだか、なにか出来たから、
つけておいたんだよ。

山下 おれ、とつてやるか。

ったで、とりに行って来たのよ、息子のだからかんにんしてくれて云やがったけえが持つて来ちゃったんだ。

敏明 うまい商売だな、競輪でノミ屋やって儲けてよ、そのうえ金貸して、一日一割か。

浩司 (ほつんと) おれはいやだな、おやじを思い出しちゃう。

山下 そんな甘っちょろいこと云うな。全くおめえも、ねんねだよ。

敏明 おまえみたいな、もそつとしたのが。なんでこんな世界に入ったか。全く、人は見かけによらないよ。

浩司 俺だつて分らないや。なんとなく面倒くさかったんだ。

敏明 カッコイイこと云うな。

山下 こいつ、毎日、朝っからパチンコやってやがんのさ、大きい面してやってるから、ガンとばしたら、俺と一緒に働いてたことがあるって云うら、ガクリよ。

浩司 あん時はひどいや。酒飲みに行つて、俺がつぶれちゃったら、勘定払わずに帰っちゃまったんだ、俺は、一週間の失業保険がバアよ、頭へきたなあ。

山下 こけの一念でよ、おれんとこ探してきな。

て、なぐりかかってきやがった。こいつ、強いんだ、それで、いろいろあつて、おれち仕事を手伝ってことになったんだ。

敏明 分んねえ、おれちや、トッポイ格好して、町の中のし歩いたり、いっばしの不良みたいなことして、いい気持になつてたら。そんなことで、チンピラの仲間に入つただけえが、——おまえのは、何度聞いても分んねえ。

山下 世の中、狂っているんだよ、人の気持も変るのさだ。(うたう) 敏さんち遊んだ頃とは違わぬ、安い金でいいい働かされる位なら、死んだ方がましよ。おれちや、働かなくなつたつて、女と金にや不自由しねえわ、な、浩司。

浩司 気ままでいいや、おれが決めて、したい様にしつてりやいだから。

敏明 そりや、おめえつちは、若いからそんなこと云つてられるんだ。やつば、人並に暮らすのが一番よ。おめえら、カッコイイこと云つたつて、刑務所の味知らないら。二度も行ってくりや、沢山だよ。

山下 おれだつて、少年鑑別所の味ぐらい知つてるよ。

敏明 そんなもんぢやないつて。おれは今度

は、あとを振り返らないで出て来たぞ。あれ振り返るとまた帰つてくるつて云うからな。

山下 そしたら、実家から、縁切られても迎えに来た奥さんがいて、感激して泣いたつて云うんだろ。その明日は、二人とも、お天道様が黄色く見えたんだつて。

敏明 馬鹿野郎。だけんな、おれみたくになつちや、もう遅いだから、金の卵のうち、いいところへ入つとけつて浩司にや、云うだけえが。

浩司 今は、不景気だから、鉛の卵ぐらいになつてらる。おれちや、金の卵ぢやないんだよ、かけずり廻つて探すから、使う方の都合で云うだけだよ。入つちまえば、ブリキの卵ぐらいにしか思われないんだ。おれは、兄貴と馬鹿云つちや仕事してる方が余程いいや。

敏明 馬鹿野郎、そいじや、おれが馬鹿はつか云つてるみたいぢやないか。

山下 浩司に敏さんは気が合うだな。

敏明 おれは、こいつが死んだ弟みたいな気がするんだ。

山下 あれ、弟がいたのか、そうだらうな、あんまり、敏さんと年が離れすぎてるもん

な。

敏明 自殺しちゃつたのよ。タリーニング屋へ住込んでたんだがな、配達の時、ポンボンの後に付けといた洗濯物盗まれて、その晩、薬飲んじやつたのよ。

山下 馬鹿つくさい、それだけでか。

敏明 なあ。——おれは入つてる時だし、おふくろはガンで死んで、こいつは親戚に引取られてた時だから、——世の中、いやになつちやつたのかもしれないな。な、葉子 浩司はあいつに似てるら。

葉子 (息をひそめるように聞いていたが) さあ、達ちゃんも、もつと細かつたし……

敏明 (葉子の涙に気付いて) 似てないか。 どうして、そり思つたのかな。——さあ、がんなばらなくつちやだ。浩司、もう一まわりするか。

山下 浩司、おれの方は、その後でいいわ。家で待つてるからな。

浩司 おお。

山下 去る。

葉子 まあちゃん、ほら、しつかり食べななきゃ大きくなれないぞ。

正明 ぼく、眠く、なつちやつた。

葉子 そいじや、ほら、早く食べて。お姉ちゃんが、食べさせてあげるから。(食べさせる)

敏明 じゃ、行かざあ。葉子、あと頼むな。——おまえ、二万円ばかなんとかならないか。仕入れの金に使いたいんだ。今度は絶対返すから。

葉子 兄ちゃん、商売やらせてくれる人つて誰なの。あの人の?

敏明 ありや、下っ端よ。おまえも知つてるら、うちの近くに細田つていう、おれより一年上の奴がいたら。あいつに町で逢つたらうよ、ぶらぶらしてるなら、やつてみるつて世話してくれたのよ。

葉子 細田さんで、やくざぢやないの。兄ちゃん、また。

敏明 いくら、おれだつて、もうそんな馬鹿はしないよ。おれは、初めにちゃんと断つたんだ。もう悪いことはしたくない。早い話が、やくざにやなりたくないつて云つたんだ。そしたら向うも、そんなつもりはないと、もうやくざだつて法をくぐつて悪いことする時代ぢやない。普通の人間として事業をやつてるだけだから大丈夫だ。昔の

「することないって。おれは、この商売に賭けてるんだ。今まではどんな仕事も長続きしたことはないけえが。今度は違つつもりだ。」

葉子 「でも、兄ちゃん、やくざなんて、そんな甘いもんじゃないんじゃないの。お金だけ納めて、あとは関係ないなんて、信じられない。」

敏明 「おれだって、ただで臭い飯は食つてこないつもりだ。順調になったら、金ためてうまく独立するつもりだよ。」

葉子 「そんなに、うまくいきつこないじゃん兄ちゃんは、いつまで経つても、人が好いんだから。」

敏明 「馬鹿野郎。そいじゃ、どうしろつて云うんだよ、おまえは。——この不景氣におれなんか、いい仕事があると思つたのによ。もう、氣を使つて探すのは、うんざりなんだ。どうせまた、土方ぐらいしかない。土方やつてると、働くのがいやになつてきて、また悪いことしたくなるような氣がするんだ。今度は、やつただけのこと、そのまんま帰つて来るような仕事がありたいのよ。——今度こそは、おまえに心配かけないつもりだ。」

葉子 「ライオンについていってもらつて、暗い部屋にクレヨンをとりに行けたんだよ。こうして、ラチはどんどん強くなつて、もう何でも出来るようになりました。まあちゃん。だんだんに読んてかなき駄目じゃんラチは、いじめつ子にも勝つちやつたんだね、あら、いつも、ポケットに入つていてライオンが赤いリンゴになつちやつて。ライオンがついていなくてもラチは強かつたんです。でもライオンは、どこへ行つたのでしよう。ライオンの手紙です。ラチ君へ、君は、ライオンと同じ位強くなつたね、もう、ぼくがいなくても大丈夫だよ。ぼくはこれから、弱虫の子供のところへ行つてやわなくちゃならないんだ。ぼくをいつまでも忘れないでくれたまえ。ぼくも君のことは忘れないよ。じゃ、さようなら、ライオンより。」

正明 「(そつと) ぼくもね、暗いとこ、怖いな。」

葉子 「あれ、まあちゃんも弱虫なの。」
正明 「ぼく、暗くなるよ、おふとんかぶつてじいっとしてるの、少し我慢してると眠っちゃうでしょ。目がさめるともう朝なんだもん。パパもママも寝てるもん。」

葉子 「……お金、帰つたら送るよ。」
敏明 「いつも悪いな、今度は、必らず返すからな借用証入れるか。」

葉子 「いいよ、そんなもの。」
敏明 「これでも会社だからな。おつまみ株式会社だもんね、浩司。(葉子に) おまえを株主にしてやるか、ハハハ。」

葉子 「その代わり、しつかりやつてよ。ヤクザなんか引込まれないでよ。」
敏明 「分つてるつて。浩司。行くか、浩司。うん。バイバイ。」

二人去る。見送つたまま、じつと立つている葉子。——間。

正明 「(眠そうな声で) お姉ちゃん、本読んでくれるつて云つたじゃん。」

葉子 「あ、——じゃ、ここへおいで。傍にあるふとんに、正明を寝かす。」

葉子 「ラチとライオン(マレーク・ペロニカ文・絵)この家に、ラチという男の子が住んでいます。ラチは世界中で一番弱虫でし

た。ラチは、飛行士になりたいと思つていました。でも弱虫の飛行士なんているでしょうか。ラチは、犬を見ると逃げ出しません。暗い部屋には、怖くて入れません。だからみんなは、ラチを馬鹿にして遊んでくれないでました。ラチは仲間はずれにされて、いつも泣いていました。」

正明 「(ページをめくつて) わあ、ライオンだ。」

葉子 「こわい顔してるねえ。ラチは、この絵が一番好きでした。ぼくに、こんなライオンがいたらなあ、なんにも怖くないんだけだよ。とところが、ある朝、目を覚ますとベットの傍に小さな赤いライオンがいるではありませんか、でも、ラチは、大笑いしました。こんな小つげけなライオンじゃ、何の役にもたないじゃないか、ライオンは怒りました。ラチにとびかかると、えいやつて床に倒しました。どうだい、強いライオンだろ。君も強くなりたいたら、ぼくが強くしてやるよ。」

正明 「ライオンが体操しているよ。」

葉子 「強くなる体操だね。まあちゃん、そんなに、一ペんにめくつちやつ駄目じゃん。」
正明 「ここ読んで。」

強くなりなきやね。パパは強かつたんだよ。けんかしても、負けたことなかつたんだよ。だから、お姉ちゃん達、他の子に比べられたことなかつたの、それにね、パパはやさしかつたんだ。ごはんを食べさせてくれたり、保育園に迎えに来てくれたり、おふとん敷いてくれたりしたんだよ。」
正明 「ふん。ぼくは、ちよつと、こわいな。」
葉子 「どうして？」

正明 「だつて怒るんだもの、ぼく、ママとおばあちゃんにいた方がいいな。ママだつてもつとやさしかつたもん。」

葉子 「——いまね、パパもママもお仕事のこと一杯なんだよ。でも、お仕事がうまくいくようになれば、きつとまあちゃんと遊んでくれるよ。パパつちも、がんばつているんだから、まあちゃんもがんばらなきや、お仕事は、大変なんだよまあちゃん。お姉ちゃんのお仕事はね、運搬つて仕事なの。ほら、おねえちゃんの腕見て太いでしよう。」

正明 「うん、太いなあ。」
葉子 「やだ、まあちゃん、あんまり太そうに云わないでよ。」

昌江 何云ってるだね、あんなにすごまれりや誰だつてふるえあがるよ。

葉子 兄ちゃんは、本当にそんな人からお金借りたの？

敏明 そりゃな、細田の奴に金納めるのが、少し遅れたのよ、今、あがった金みんな仕入れに廻してるし、つけが多いから現金がないんだ。それをおれがごまかして、金使ひこんでいるって、いちゃもんつけやがったのよ。

葉子 だって、兄ちゃんが始めた商売でしょ昌江 向うは、共同経営だつて云うだよ。

敏明 馬鹿野郎、細田んな、仕入れの金でおめえばつか苦勞させちゃ悪いで、おれも出すよって、五万円出して寄越したのよ、それが貸したって云つてる金のことだよ。十萬貸したって云つてるらしいがな。とにかく、形だけの共同経営で、今迄通りの金寄越しやいって云つたんだ。そりゃ、浩司も聞いて知ってるよ。金使い込んだなんてだいたい、葉子に借りたり、昌江に都合させた金でやったんだからな、今じや、おれつちが苦勞して開拓した商売とり上げて、自分ちがやつてるのよ。つけだつて、品物だつてまだ相当残つていたんだ

葉子 お願い、やめて、(手で顔をおおい、泣きだす)

問
ドアをノックする音、敏明、腰を浮かせる。

昌江 だれ？

浩司 おれ。

昌江 ああ、浩ちゃん。ちよつと、待つて、今、あけるから。

ドアをあけに行く昌江。敏明、坐る。

浩司 入ってくる。また、鍵をかける昌江

浩司 切符買って来たよ。千葉まで買っちゃったけえが、いいだか。

敏明 おお、いいだよ。悪いっけな。見つからないっけか。

浩司 と思ふな。どっかで見られているかも分らないけえが。

敏明 おごかすなよ。

浩司 あれ、このスニツケニスも、持つてく

のたつけ？

葉子 あ、それは、あたしの。

葉子 だつたら、兄ちゃん、なぜ逃げるの、そのことを、ちゃんと云つたらいいじゃないの、商売やめるつもりになれば、きちんと整理できるでしょ。あんまりインチキすぎるじゃないの。

敏明 そんなことが通る相手じゃないよ、見つかつたら、どんな目にあわされるか分らないだから。

葉子 それに分つて、どうして、そんな人つちと——

敏明 おまえの云う通り、おれは、人が好すぎたなあ。

昌江 なにカッコイイこと云ってるだね、おえ、葉ちゃん、そうなつたら、被害を一番小さいところで食止めるのが普通じゃないか。それをこの人は、二、三軒集金して、テレビやあたしの着物質に入れて逃げちゃつたんだから。あとのことなんか何にも考えないで、よくそんなことが出来ると思つてさ。なんであたしが、尻ぬぐいしなきゃならないだね、商売始めてから、生活費なんか一銭もくれやしなかつたにせよ。

敏明 何回云や、気が済むだ、耳にタコが出来らあ。今更そんなこと云つたつて、どうにもなりやしなはずら。

浩司 そいじゃいいけえが、小荷物預りに預けといたよ、これ、番号だ。ふとんは、チツキで送つておいたぜ。

昌江 ありがと。何から何まで、世話になつちやつたね、浩ちゃん。

浩司 いいだよ、別に。

敏明 そのうち、ちゃんとしたら、埋合せするから、勘忍しようよ。

浩司 あてにしないで待つてるよ。

敏明 今、あんまり、本当のこと云うなよ。

葉子 え？うらん——やめた友達の荷物を頼まれたもんでね。——兄ちゃん、千葉へ行くの。

敏明 うん、こうしても仕様がなからな。なんとかしなきゃ、おまえにや、落着いてつから、手紙でも、出そうと思つてんだ。昔の友達に逢つたらな、千葉の方で、山をくずして、土地の造成やつてるで、いつでも来いって云うもんでな。結構いいらしいだよ、人も大勢使つてるらしい。

葉子 兄ちゃん、その人は……。

敏明 ああ、今度は大丈夫。足を洗つた奴だ

昌江 そんな云い方つてないでしょ。どうにもならないように、誰がしたんだね！

葉子 ねえ、もうやめて、二人とも。

昌江 だって、あんまりいい気なことばっか云うから、やつきりしちゃう。自分は、ちつとも悪くないんだから。この人がいなくなつた間、どんな辛い思いをしたか(泣く)

敏明 ふん。おまえこそ、いいカッコするな。おれが帰つてるのも知らないで、酔っぱらやがって、男を引張り込もうとしたのは誰だよ。

昌江 あればね、送つて来てくれたから、お茶だけでもつて思つただけじゃなか。

敏明 夜中に男を部屋にあげて、何がお茶だけでもだ。正明のことも考えろ。

昌江 あんたが、子供のことを云う資格はないよ。何だよ、あなたに出来るのは、妬くことだけじゃなか、葉ちゃん、この人はね、あたしが店から帰つてくりや、やきもち焼いて、なぐつたり、けつたりするんだよ。それもね、顔へは絶対手を上げないんだよ。商売に差しつかえるからね、ずるいんだから、この人。ヒモと同じだよ。

敏明 なに！

から。

昌江 あんたの友達は、ロクなのはいないんだから、あてにやなんないよ。

敏明 馬鹿野郎。本当に更生した奴つてのは普通の奴等より、しつかりしてるぞ。

昌江 そいじゃ、あなたは、どうなつてんのさ。

敏明 人がいるから、我慢してるんだ。もうちいつと気を付けてものを云えよ。

昌江 ——さあ、そいじゃ、仕度しなきゃ。

浩司 ねえさん。余分なことだけけえが、キャパレーの方、あのまんまで大丈夫か？

昌江 だって、仕様がなじゃん。また、お金でもできたら送るつもりではいるからさ

敏明 十万借りのか。

昌江 そうあなたの借金の為だね。店にまで来られて、すこまれちゃ、いられたもんじやないもん。

葉子 お店替わつたの？

昌江 今度は、キャパレーよ。支度金借りられるからね。

葉子 借りたお金、そのままじゃ……。

昌江 だって、どう仕様もないもん。

葉子 お姉さん……、兄ちゃん、あんたがちゃんと言つておいで。向うの云うこ

とがデタラメなんだから。警察にだって訴えたらいいじゃんか。

敏明 おまえらにや、ヤクザのこわさが分らないのよ。そんなことしたら、あとでどんなことされる分かんないだぞ。

葉子 兄ちゃん、分つてて、どうして、そんな人つちと——

敏明 おれだって、こんな善じゃなかったんだよ。

葉子 恐がつてばっかいるから、あんな連中が、のさばるんだよ。やっぱり、兄ちゃんが自分で、後始末しなくちゃ。ここで、出直して、もっと、地道なくらしをしてよ。

敏明 ——

昌江 —— あたしだつてね、自分の生れたとこ離れたくないよ。この人と別れて、ここでやり直そうかと思うけど、別れたつて、この人じゃ、結局、何だかんだ云つてきて、別れたことにならないだろうからね、あきらめるより、仕様がなしのよ。

敏明 別れたきゃ、別れてやるよ。おれだつてその方が、せいせいすらあ。

葉子 兄ちゃん！

ドアをどんとどんとたたき音

正明 ママあけて、ママ、あけてよ！

浩司、あけてやる

浩司 どうした、まあ坊

正明、部屋の隅に行つて、堅い表情で立っている。隣りの主婦、泣きじゃくる小さい女の子の手を引いて入ってくる。敏明、見えない場所に異動する。

隣りの主婦 ちよつと、竹下さん、これ見てもちよつとだよ。(真弓の額に薄く血がにじんでいる)

昌江 正明がやったの？

隣りの主婦 おもちゃ貸さないつて、いきなりこの子を突きとばして、足で蹴つたのよ

昌江 正明、あんた、本当に、そんなことしたの！

隣りの主婦 あたしが見てたんだから——。少し、子供にしても、やり方がひどすぎると思うよ。

昌江 正明、何でそんなことしたの、真弓ちゃんにあやまりなさい。

隣りの主婦 このごろのまあちゃんたら、す

ぐカッとなつちや、つきとばしたり、たたいたり、すぐく、非道いことするんだからこの間もね、アパートの裏で、マッチすつて遊んでたんだよ、あたしが見つけて、やめさせたんだけど。火事でもなつたら大事だもん。

昌江 正明一人でやったの。

隣りの主婦 真弓も一緒にいたけど、この子はマッチのすり方なんか知らないもん。

昌江、いつだつて、悪いことは、正明のせいにするんだから。

隣りの主婦 変な言い方しないでよ、奥さん。うちの真弓は、あたしがうるさく云つてるから、マッチなんか持ったことないんだよ。お宅じゃ、まあちゃん一人で蹴くことが多から、もう少し、気をつけてやってよ。

昌江 どう気をつけたらいいの、首に縄付けとく訳にもいかないでしょ。

隣りの主婦 みんな、口には出さないけど、いろいろ迷惑してるのよ、もう少し、子供のこと気をつけてやってよ、お宅も、いろいろと取込んでいらいらしいけど。

昌江 そんなこと、あなたに云われる筋合いはないよ。どう、取込もうと余計なお世話

でしょ、あなたが放送局になって、随分いらんな噂ふりまいてくれているらしいけど余計なお節介はやめてちょうだい。

隣りの主婦 あたしが何を云つたつて云うだね、こつちこそ、迷惑してるんだからね。ヤクザだかなんだか知らないけど、変な人がウロウロして、安心してられないじゃんか。

昌江 悪いつねね、どんな人間がウロウロしようよと、こつちの勝手じゃん。ちゃんと家賃払っている以上、どんな人間が入りしようが、あんたつちがとやかく云う筋合いはないでしょ。あんただつて、バーへ動めたいつて云つたじゃない。人種が違ふみたいな顔して、きれいな口聞いているけど。

隣りの主婦 それは、冗談に云つただけじゃんか、すごいこと云うね。真弓、おいで、もう、まあちゃんとなんか、遊ぶんじゃないよ。

去る。成行を見ながら待っていた、他の主婦達と興奮して、いきさつを話し合っている様子が伝わってくる。昌江、ドアを強く叩め、鍵をかける。敏明、正明の傍へ行こうとして、浩司にとめられる。

昌江 正明、あんたは、何でことしたの？ あんなのおかげで、ママは。

激しく、正明のお尻をたたく昌江。葉子 正明を奪いとるように抱いて。

葉子 やめて、お姉さん。——まあちゃんの気持ちも考えてやってよ。こんな小さいまあちゃんが、どんなに不安か、考えてやってよ。まあちゃんに当たつて仕様がなしじゃんか。まあちゃんの責任じゃないじゃんか

間

昌江 ……あたしだつてね、葉ちゃん、この子に可哀想だつて思つてるよ、だけど、どう仕様もないじゃんか。—— あたし、もう、明日つから先きのことは、考えたことなんかないんだよ、葉ちゃん。(泣く)

敏明 世間の奴等は冷たいよ。寄つてたかつて足を引張りやがる。だから、前科者は、また悪いことするよになつちやうだよ。

葉子 世間つて何なの、兄ちゃん。世間つてもんが、兄ちゃんをこんなにしたつて云うの。そりや、まわりの人つちは、兄ちゃん

ちびい顔しなないかもれないよ。だけどそれが兄ちゃんをこんなにしたつていうの——小さい時から、兄ちゃんだつて、死んだ小さい兄ちゃんだつて、あたしだつて、自分の思つた通りに出来たことなんか一つもなかったよ。自分で働くようになったら、少しはよくなるかと思つたけど、やっぱりおんなじだつた。でも、それは、あたしだけじゃない、他にも大勢いるんだよ、兄ちゃん。働いてるあたしらが、幸せに暮らせるような仕組になつてないからじゃん、何故そうなつたか、ちゃんと見据えて、一つづつ積み上げていかなきゃ駄目なんだよ。——兄ちゃんは、また、まあちゃんをあたしらと同じ目に逢わせようつていうの。また、あたしらと同じことが、ここから始つていくの。兄ちゃんの弱さがお姉さんやまあちゃんまで駄目にしちゃう。——あたし、もう、兄ちゃんのこと可哀想だなんて思わない！——弱いのは、悪いことなんだわ。

敏明 だあれも、おまえに可哀想がつてもらうつもりはないよ。

葉子 ——どうして、兄ちゃんは、つまずくと坂道ころけ落ちるみたいに、一番下まで

落ちちやうの。どうして、途中で、踏みとどまれないの。

敏明 おまえの云う通り、おれは弱いだらうよ。

葉子 ——あたしら、どうして弱いんだらうね、兄ちゃん。

敏明 そんなこと知るか。——おまえ、今日は何か用事じゃないっけの。

葉子 ううん、何となく、来たくなかったから——。

敏明 虫が知らせたって奴だな、死んだおぶくろでも知らせたかな。

ドアを開けようと、ノブを廻す音。

敏明、押入れに隠れる。昌江、ドアをあける。山下、さっと入って、部屋の中を見廻す。

山下 なんだ、浩司、おまえ、何でこんなところにいるんだよ。

浩司 ——車の中に、兄貴のサングラスが入っていたで、届けに来たんだ。

山下 そりゃ、御親切なこと。なんだか荷物が少くなつたな。

昌江 月賦が払えなくなったから、持ってか

れたのよ。

山下 奥さん、まさか、どっかへ行くんじやないだらうな——おめえ、駅へなにに行つたんだ。大きな荷物持ってたつてな。おれの友達が見たってよ。

浩司 うちへ、ミカン送つたんだ。

山下 ふうん。——奥さんよ、敏さんまだ帰つて来ないのかい。

昌江 見てちょうだい。狭い家なんだから。

山下 居所ぐらい知ってるんだらう。

昌江 知らないよ、捜す気にもならないよ、あんな奴！

山下 敏さんも可哀相に。

昌江 冗談じゃないよ。可哀相なのはこっちだよ。借金で身動きも出来ないんだから

山下 なに云ってるだい、キャバレーはい金になるだらう、ちよっと一晩お客と付合や、そんな金なんて、チャラだろ。

昌江 あなたの女房なら、その位はやるかもれないけど、あたしや、ごめんだよ。

山下 なにノヤさしく云つてりや、付上がりがあつてノオサワリ専門のキャバレーにいて、あんまりきれいな口きくなよ。(スーツケースを見て)これは何だよ。まさか、トンスラしようつてんじやないだらうな。

葉子 それは、あたしのです。

山下 どうかな。

スーツケースを乱暴にあける。中から、葉子のセーターや下着が、こぼれる。

葉子 何するの、あなたに、そんなことする権利があるの。

山下 もう一辺云つてみる。

葉子 お金を貸したつていうだけで、そんなことする権利はないはずよ。

山下 こっちにやあるのよ。敏の奴がいなくても貸したものは、返してもらうぜ。

葉子 借用証書はあるんでしょね、兄がい

ないんだから、そういうのがちゃんとしてなきや本当かどうかわからないじやん。

山下 うるさい。男と男の約束よ、てめえは初めつから気に入らねえ女よ、やらねえように氣いつけるよ。

葉子 書類がちゃんとしてない分だけ、おどかすの。

山下 なに。

葉子 あんたたちは、ハイエナと一緒よ。兄ちゃんちみたいに、普通の社会から、はみ出て落ちてくるものを、待ちかまえていて

でよくしてくよりないんだから、兄ちゃん。

敏明 分つた分つた。おれも、今度こそ、直すつもりだ。フフフ(おかしそうに笑つて)おれは、出直すつて、何回云つたかなあ。一生、こんなこと云つて終つちやうかもしれないな。ハハハ。

昌江 冗談じゃないよ、こつちが堪らないよ。葉ちゃんも浩ちゃんも、元気でね。

敏明 そいじやな。あ。浩司、こいつを、途中でまて送つてやつてくれなかな。

浩司 うん、いいよ、兄貴つちも元気でな。

敏明 おまえにや、悪いっけな、こんなことになつちやつて。

浩司 おれは、いいだよ、結構、面白いっけ

敏明 なあ、浩司、おれつちは、何をしたのかなあ、夢でも見たただか。

浩司 そうかもな。まあ坊、バイバイ。

正明 バイバイ。

三人去る。

葉子、部屋を片付け始める。

まだ、くいものにしようつていうの。

山下 この野郎。

葉子をなぐろうとする

浩司 やめろよ、(山下を、反射的に強く押え込んでしまう)

山下 てめえは、どつちの間人だ、いい加減にしろ。(浩司をなぐりつける)

浩司 ——女、相手にしたら、こつちがヤバイよ。みんな見てるからな。

山下 警察なんかこわくて、こんな渡世やつてかれるかよ。奥さん、あと五万円、今週中に何とかしてくれよ、うちの兄貴を、あんまりなめんなよ。浩司、商売にまわれよ。

浩司 おお。

二人去る。

葉子、ふつと、しゃがみ込む。押入れがあいて、敏明出てくる

敏明 ああ、身体が痛くなつちやつたな。

昌江 あんたつて人は……。

敏明 葉子、勘忍しようよ。

葉子 ……兄ちゃんの弱虫。

浩司もどつてくる。

浩司 兄貴、もう行つた方がいいよ、山ちゃん、港の方へ行つたからな。

敏明 そうか。おい、いいか。

昌江 出るばかりになつてるよ。バスの方がいいね。

葉子 行くの、本当に行つちやうの。

敏明 北極へでも行くような声出すな。二、三時間で逢えるところへ行くんだぜ。

葉子 ……まあちゃん、お姉ちゃん、ライオンを作つて来たんだっけ、ほら、ラチの赤いライオン。まあちゃんのポケットへ入れてこようね。(ポケットへ入れてやる)

正明 (やつとほぐれた笑顔で)ほく、もうなんにもこわくないよ、ラチみたいに、つよくなるんだ。

葉子 うん、強い子になつてね、がんばるんだよ、お姉ちゃん、また、まあちゃんこへ遊びに行くからね。

正明 うん。

敏明 そいじや——落着いたら手紙出すからな、おまえも元気でいろよ！

葉子 ……。どこへ行つても同じだから、いいことなんかありやしないんだから、自分

浩司 送るよ。

葉子、浩司に背を向けて首を振る。
手で顔を覆い、じっと動かない葉子。

間

浩司 ついでだから、会社まで送ろうか。

首を振る葉子。

間

薄暗くなった部屋の中に、夕食の仕度の音や、子供を叱る声、夕方の活気に満ちた音、外を通る車の音が流れ込んでくる。他の家の灯が暖かく、しみいるように、窓に映る。

浩司、窓から外を見ている。バスの発車音。

浩司 あのバスかな

葉子 ……あたしは、まあちゃんに、お話し
かやれなかつた——。

浩司 おれっちは、話ももらえなかつたぜ。
大丈夫だよ、まあ坊はきつとい子になる
よ、兄貴だつて、なんとかやってくさ。

葉子 ……ごめんね——兄ちゃんの為には、
泣いちゃいけないのに、あたし……もう、

サッパリしたわ。

戸口に近く置いてあるスーツケースをとりに行く。窓に映る灯をじっと見つめる葉子。

葉子 暖かそうなあかり、——あたし、また

帰えるところがなくなっちゃったわ。
浩司 他人の中に入ると、しんから淋しくな
る時があるな。

葉子 ……たよりにならないあんな兄でも、

つい、よりかかるといなる時があるの。——
自分がしゃんとしなければいけない時
に、何もかもがいやになって、ただ無性に
懐しくなる時があるの。

浩司 あんた、会社やめてきたんじゃないの
か。

葉子 ……どうして分かる？

浩司 おれ、なんども、経験あるからな。な
んとなく分かるんだ。

葉子 ……そのつもりだつたの。……だけ
ど、やっぱり、会社へ帰える。

浩司 どうして？

葉子 ……会社が、あたしらのサークルを
ぶそうとしたんだよ。このごろ、サークル

もかまひやになってしまったの。あんなと
こで働くのが。もう、堪らなくなっちゃ
たの。今やめたら、会社の思うつぼだよ、
負けたことになるんだよ。こういう時だか
らこそ、仲間同志支え合つて、がんばらな
きゃつて、サークルの仲間が引き止めるの
に、あたし、自分一人で、逃げだしてきた
の。

浩司 どうつてことないさ、いゃんなつた
ら、やめるしかないさ。

葉子 やめないよ、あたし。——あたし、会
社に入っている時、いろんな夢があつたわ。一
番目は、高校へ行くこと。二番目は、貯
金して、二十万円貯めること、三番目は、
保母の資格をとること、四番目は、しっか
り働くこと。でも、毎日綿ぼこまみれにな
つて、日曜出勤までさせられて働いても、
食費や寮費や日用品なんかのお金引かれる
と、パーゲンのブラウス買うのがやつとぐ
らいいし残らないし、二交代だから、学校
へ行くのも、えらいし、勉強はつまらない
し、——夢なんて、二ヶ月も経たないうち
に、みんなあやしくなっちゃったわ。毎
日、憂うつで、何の為に働かなきゃなん
ないのか分からなくなつちゃつて、生きてるこ

とも、つまらなくなつちゃつたよ。そう
なつたら、遊ぶか会社やめるか、しかない
んだよ。——でも、あたし、お部屋のおね
えさんに誘われて、初めて、サークルに行
つて、みんなの話を聞いた時、辛いのは、
自分一人だけじゃなかつたんだつて思った
ら、胸が、じんとつまっちゃつたわ。今
まで、どこへぶつつけていいか分からなくつ
て、小さい時から、胸の奥へ仕舞いこんで
来たことが、糸をほぐすように、分つて来
たの。あたし達の手で、生活を変え、社会
を変えることが出来るんだつて、知つた時
は、目の前がベツト明るくなつたような気
がしたわ。紡績で働いているって云えな
かつた。紡績で働いたが、胸をはつて働ける
ようになつたんだよ。サークルに入つてか
ら、なんだか、毎日に張りが出て来たみたい
だつた。サークルの仲間がいたから、今ま
でがんばれたんだよ。会社は、あたし達の
夢をみんな摘み取つてしまった嫌に、あた
し達みんなで作つた夢まで摘取りとして
るんだよ。会社に、どうしてそんな権利が
あるの。私達は、何も悪いことしちゃいな
いんだよ。あたしは、負けちゃいけない
んだよ負けたら、兄ちゃんみたいになつて

しまふ。兄ちゃんを駄目にしてしまったも
のも、あたし達を駄目にしようとしてい
るものも一緒なんだから。——お姉さんの
働いてたとこ知つてる？
浩司 え？知つてるよ。メトロつてキャパレ
ーさ。
葉子 これを返して欲しいの。
浩司 ……？
葉子 お姉さんの借りたお金だけは、返した
いの、どうしても、そのままにしておきた
くないの。
浩司 だつて、十万だぜ。
葉子 丁度それだけあるよ。
浩司 上げな。
葉子 だつて、二年半も働いているんだも
ん。でも、それで、おわり。会社じゃ、あ
たしがやめると思つて、黙つて、おろして
よこしたわ。いつもは、何に使うかとかう
るさいくせに。
浩司 あんた、困らないのか。
葉子 働いていれば、何とかなるもん。
浩司 ……おれ、このまんま、持つて逃げち
やうかもしれないぜ。
葉子 ……。それでも、仕様がないわ。あた
し、お金を持つていたくないの。持つてい

で、ノートを返し初めたの。みんなの嬉し
いことや辛かつたことや、思つたことを自
由にノートに書いて廻しているの。そのな
かから選んで、文集も作つたんだよ。すご
く評判がよくつて、サークル外の人たち
も、読んでくれたわ。それが会社にや
入らなかつたの。会社の悪口はつて書か
ない。毎日一人づつ課長に呼び出されて、サ
ークルの中心になつてる者は誰だとか、お
まえらは、赤に、欺されてるだけだとか、
か、ああいう連中とは、口を聞くななんて
責められたんだよ。だから、もう、三分の
一ぐらいに減つちやつたの。でも、そのく
らいなら、あたしだつてがんばれたよ。だ
けど——あたしが、誘つて入つた仲良しの
子が、あんまり云われて、//ごめんね、も
う、あんたとは、話も出来なくなつた、サ
ークルにも行けない、みんなを裏切つてし
まつた//つて、置き手紙して、会社をやめ
て、どこかへ行つちやつたんだよ。家へも
帰つていなかつたの、あたし、辛かつた
わ。課長から、//可哀相に。あんたが誘う
から、こんなことになつたんだ。あんたの
責任だつて云われたら、もう、あたし、何

ると、つい、逃げだしたくなるかもしれないから、あたし、お金がなかったら、どこへも行けないと思うの、だって、なければ、何もできないってことよく知ってるもん。

浩司 あんたは、強いなあ。

葉子 強くないじゃない。弱いから、自分を縛りつけるじゃん。

浩司 おれ、この金、ちゃんと届けるよ。

葉子 ありがとう。

浩司 おれ、送ってやるよ。

葉子 ううん、一人の方がいいの

浩司 じゃ、おれ、この金届けて、そのまんま、家に帰えるよ。——もう、ここにや戻

って来ないつもりだ。

葉子 うちって？秋田へ？

浩司 うん、どうせ、長くはいられないけれど。

葉子 また、働きに出るの。

浩司 他に仕様がなければ——もう、おやじっ

ちも、出稼ぎに出ないだろうな。——ヤクザも、おんなじだよ。おれっちを働かせて搾るだけだ。——何となく、踏ん切れなかったんだ、ここから、出て行こうって思ってたんだけど、——ここにいたりや、割と

気楽で、何にも考えなくなっちゃって、一日が経っていくら、カタギになっても、面白いことなんか、ありやしないもんな。

葉子 あたしらは、楽しいことなんか、自分のちの手で作っていくしかないんじゃないの。

浩司 さあ、どうかな。いまの、おれに分

てるのは、もうここへは二度と戻ってこないってことだけだ。——おれ、行くぜ。

葉子 いろいろ、有難う。がんばってね。——また、何処かで逢えるかしら。今度は働

いている仲間同志で。

浩司 さあ、そんなに、うまくいくかな。——さいなら。

葉子 さようなら、元気だね。

浩司 去る。

葉子 窓に鍵をかけ、そのまま、窓の灯を見つめる。やがて、スーツケースを持ち、部屋を出ていく。

誰もいなくなった部屋。

——幕——

お出かけ前

栗木英章

人物

夫

妻

男(セールスマン)

その他 子供(進)の声

所 郊外にあるマイホーム

(下手は庭に面している大きな窓、上手は入口のドア。居間である。)

日曜日午前、お出かけ前のひと時——

夫は窓から外を眺めており、妻は三面鏡に向かつて化粧をしている。)

夫 (外へ) 進、危ない！……そんな高いところから飛び下りるのはよせ。足を折るぞ……(妻へ) まだかい？

夫 進も待ちくたびれてしまっじゃないか。妻 貴方の方でしょ、待ちくたびれるのは。残業残業で遅い帰りを待ってる私の気持ちを、たまには味わってごらん下さい。

夫 だからそのことは言っただろう。これから会社もうんと厳しくなって、残業も臨出も少なくなるって。

妻 あら！そうすると収入がへっちゃやうってわけ？

夫 まあ、そりゃあ——

妻 (手をとめて) えっ？

夫 いいじゃないか、早く帰ってくるんだから……そうだろう。

妻 でもねえ、家の借金が月々あるし、それに何かと物価が上がって……(化粧をしつつ) どうしたのかしら、少しも肌にはらな

くって……何だか急に年とったみたい。

夫 (新聞を手にとり) 判定勝ちか。近ごろ

とんとノックアウトはみられないな。

妻 野蠻よ、ボクシングなんて。ねえ新しい化粧品、一そろい買っていいかしら。

——幕——

夫 (驚いて) 一万三千……(黙る)

妻 ねえ。

夫 ……

妻 結婚前のころだったら、すぐいいよって言ったくせに。

夫 (テレビをつけて) さて——

妻 ねえ、ちよっと赤っぽいかしら。(顔をみせる)

夫 (見ないで) いや……いいよ。

妻 ううん、ちゃんと見てよ。

夫 (改めて見て) ……そういえば……さあ、行こう。(テレビを切って) 雨が降るって予想だ。

妻 大丈夫よ。当たったためしなんかいないから。

夫 近ごろはよく当るぞ。

妻 (ヒステリックに) 当らないわよ。

夫 (疲れて再び眼をかけ新聞をひっくりかえすが、また折られたんで) まだかい?

妻 もう少しよ。……貴方、きちんとたたんでいて。

夫 はいはい。(折りたたみ直す)

妻 ネットイ変えたら?

夫 これでいいよ。

妻 地味よそんなの、センスない人は係長にもなれないんでしょ。

夫 わかったよ。(洋服ダンスからかわりのを出して) これか。

妻 ちがう。(別のを指して) それ、その茶色の。

夫 そうか。(変えつつ) 早くしないとデパートも混み出すぞ。

妻 混んでないデパートなんて魅力ありませんよ。

夫 (再び窓の外へ) 進、その鉢に水やってくれ。……進、服をよごさんようにな。……

妻 (ドアのノック音)

妻 はい、どうぞ。
(男——化粧品セルスマンが入ってくる)

二人……?

男 ごめん下さい。突然おじやまして……

妻 ……(と言いつつ自然に名刺を出して) 私、ビュティフル化粧品の訪問セールを担当しています。(化粧をしている妻をみて)

夫 ああ、奥さま、丁度メイクアップ中でいらつしやいますか。

妻 ……ええ。

男 (じつとみつめて) そうでございますね。失礼ですが、奥さま、少おし皮膚に艶

妻 ……(と言いつつ自然に名刺を出して) 私がございませんですね、ほんと。

男 そうなの、何となくのりが悪くって……

妻 そうでしょう。ねっ、御主人、いつまでも若く美しくあってほしいのは、すべから

夫 ……(カバンの中から商品を出して) この

男 ……(カバンの中から商品を出して) この

妻 ……(カバンの中から商品を出して) この

男 ……(カバンの中から商品を出して) この

妻 ああ、あの女優が……

男 従来のように肌へベトベト塗るんではございませんで、内側から栄養をたっぷり与えて、肌そのものをみずみずしくするとい

妻 ……(カバンの中から商品を出して) この

夫 ……(カバンの中から商品を出して) この

男 ……(カバンの中から商品を出して) この

妻 ……(カバンの中から商品を出して) この

夫 ……(カバンの中から商品を出して) この

男 ……(カバンの中から商品を出して) この

妻 ……(カバンの中から商品を出して) この

夫 ……(カバンの中から商品を出して) この

男 ……(カバンの中から商品を出して) この

妻 ……(カバンの中から商品を出して) この

男 ……(カバンの中から商品を出して) この

いと良さが御理解していただきにくいかと

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 (夫を軽くたしなめて) 貴方。

男 さあ、ここまでできましたら、どうぞ、こ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

男 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

男 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

男 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

妻 ……(言いつつ手ぎわよくガ

夫 ……(言いつつ手ぎわよくガ

(妻は鏡に見入る)

夫 終わったのか?

男 どうもどうも御主人お待たせして、お二人様ほんとお似合いです。まさに美男美女、いかがでございますでしょう。この商品一セット組み合わせて一万五千円——

夫 一万五千円!

男 まっ、お出かけ前をお引き止め致しました分サービスマンさせていただきます。一万三千円に勉強します。この豪華なボックス入りですから、今がチャンス、お買い得でございますよ。

妻 まあきれいな(夫に)ねえ貴方、どうかしら。

夫 だっってお前。

妻 (すねて)ううん、お隣りでもよ。

男 そうでございますとも。奥さまがお美しくなることに反対なさるわけがありませんよ、ねえ御主人。いえ先日おね、表通りの魚屋さんでおすめしましたところ、奥さんが迷っているのに旦那がよしってんですぐお使いいただくことになりました、はい鶴の一声というか、男らしい決断を久し振りに見せてもらいましたが、いいもんですねえ。ほんと。

妻 いいでしょ貴方。

夫 まっ……いいようにしろよ。

妻 うれしい!

男 ありがとうございます。やっぱりみる眼がある方がいらいますよ。どうもどうも、ではこの箱にお入れしまして——

妻 ちよっと。二千円はどこにでもまけてるんでしょ?

男 いえ。どこにでもってわけではありません。そうそう値引きしてましたら、私どもの商売あがったりでございますから、精一杯ってところで、ほんと。

妻 そうだったらもう一度考えさせてもらおうかしら、買うこと。

男 またまた意地悪を。はいはいいりました。特別大奉仕で二千五百円お引きいたしましょう。それからこの試供品もお入れしときます。

妻 できるだけたくさんね。

男 はいはい。でも奥さま、このことはご近所へ内緒にしたいして下さいね、ほんと。お願いしますよ。

妻 わかっているわ、お金は後でもいいんですよ。

男 はい結構でございます。では御主人、月

末に伺わせていただきますから。

夫 ……ああ。

男 どうも、今後ともよろしく願います。おじゃましました。(去ろうとして戸口に落ちていたハガキを拾い上げ)ハガキがきてますよ。(表をみて)ええっと電気屋さんから、

妻 電気屋から?

夫 (強く)かしたまえ。

男 はっ、どうぞ。では失礼します。ごめん下さい。(去る)

妻 どうも。(化粧品を出したり入れたり並べたりしつつ)ああ、ついに買わされちゃったわね。

夫 (黙ってハガキをみている)

妻 でもいいわね。少しづつ買うよりは結局安くつくんだし、ものは最高級なんだからねえ。

夫 (ハガキを破り)電気屋に言っとけ。月賦は月々きちんと払うから、いちいち請求なんかするなって。

妻 あそこのおかみさん、ほんとに几張前の人だから毎月ハガキで——いいわ。

夫 ……あと五ヶ月間か。払い終わらないうちに、このテレビもう色がおかしくなっ

た。(切って)さっ、出かけるか。

妻 ほんと。

(子供の声)「パパ、ママ、雨が降ってきたよ」

夫 (舌打ちして)雨か。だから言わんこっちゃない。

妻 (化粧品をしまいつつ)えっ?

夫 お前がぐずぐずしているからだ。

妻 仕方がないわよ、買物したんだもの……ねえ、かえってよかったわ、途中で降られなくて。(窓の外へ)進、出かけるのやめるからね。勉強しなさい。この間のテスト点数がよくなかったでしょ。いい。(夫に)パパ、たまにはしっかり見て下さいよ。

夫 お前。

妻 何?

夫 いや……

妻 ちよっとお隣り行ってきますからね。

(いそいそと去る)

(夫は新聞を手にとるが、すぐ投げ捨てる。テレビをつけるが、これまたすぐ切る)

夫 (化粧品をみつめて)……一万二千五百円……か。

(子供の声)「パパ、パパ」

両音がだんだん激しくなって——溶暗のうちに。

〈幕〉

新劇人 第六号

(頒価二五〇円)

特集1 俳優と技術の思想

■ 座談会「俳優の技術をめぐって」

伊藤敦子 入江洋佑

後藤陽吉 鈴木端穂

■ 中村たつさんにきく

山本安英

■ きくことの創造性

江藤文夫

■ 俳優がセリフを語る時

山本 圭

■ ベトナムを訪問して

宇都宮吉輝

■ 鑑賞の質を高めつつ量的ひろがり

乾 一雄

■ あらためて一演劇要求の課題

河述文夫

■ 労演運動の新しい課題

安保体制打破新劇人会議

発行 東京都千代田区麹町2の12
電話(二六一)六九二六

喪の季節

作 間 雄 二

時 現代 一九七一年、そして回想。
所 ある地方都市。

人

庄司知治 一六才
庄司知雄 五七才（知治の父）
庄司せい 四二才（知治の母）
庄司 勝 一九才（知治の兄）
平田邦江 一六才
市川京子 一六才
吉岡 貢 四〇才（知治の担任教師）
山内正則 三五才（教師）
尾沼 純 五二才（教頭）
堀田和夫 一八才（知治の級友）
向坂時子 三九才（学校事務員）
所轄署の刑事 五〇才
喪章の女 四二才

舞台は構成舞台である。

ロコの粘液の目を白く輝かせながら、あだしを睨んでいる。心の内側から、この二十六年のあいだ、あだしは睨まれ続けてきた。正直なところ、いままで幾度も悲鳴をあげてきた。なぜあだしは、それほどまで睨まれ、責められなければならないのか。睨みかえし、ヒステリックに声を荒げながら、しまいには——勘弁して、もう許して、と狂ったこともある……。

——間（蟬の声のみ）

でも……（と、重く息を吸い）とうとう、今日まで、その人、その少年、その庄司知治という激しい、あの季節を運んできてしまった。世間は、この古い喪章を捨ててしまえという。骨董品みたいな古い喪章を、後生大事に胸に抱いて、いま時ナンセンスだとおっしゃる。しかし、駄目だろう。それどころか、来年も、再来年も、その次の年も、あだしは夏が来れば古い喪章を引きずり出し、生きていく限り叫ぶだろう、——誰が知治を殺したのだ！と。

女は闇にのまれて消える。油弾の声も

油弾（あきぎみ）の声に、幕があがる
と、暗い舞台の一隅に薄い明りが浮かびあがり、輪郭だけの中年の女が立っている。

喪章の女 此年も、あたりまえに春が来たように、透明で焦げくさい夏が、暦との約束だけで訪れる。もう二十六年も経っているが、夏の陽差しの雲母のようにキラキラした痛みは、二十六年まえの事件の時と嘘のように変わっていない。それは、意地の悪い警告に似て、慥慥で執拗な囁きである。あたしはヒステリックな蟬の鳴き声にも、アスファルトのうえでキナ臭く舞い上がる埃にも、その囁きを聞きとることができる。そんな、あだしを、あたしは時には隣れんで、〈喪の季節の女〉と称んでみる。夏がくると、ナフタリン臭い喪服を身にまとい、喪章を、此年は四十二才のあたしの胸

やむが、しばらくして今度は、鯛（かなかな）の音が聞こえだし、舞台の一隅に照明がはいる。庄司家の奥座敷である（と言っても、具体的に飾りたる必要はない。これからの他のト書きも皆そうである）。まん中に庄司知治（遺体）が寝かされ、それを囲んで、庄司知雄、せい、床柱をしよって、勝が坐り、反対の方に、山内正則、平田邦江、市川京子が坐っている。一九四五年八月二十二日の昼すぎである。（庄司 勝の衣裳について。彼は海軍経理学校の制服である。例の七ツボタンであるが、予科練のとは違う。麻製、ハイカラー、鎗の肩章である。但し、当時は白でなく、薄い草色に染められていた。）

溶明後しばらく——間——枕頭で線香の煙りが薄くのぼる。刑事がはいってくる。国民服に国民帽、黒いゲートルを巻いている。

刑事

じゃ、自分等は戻るか。あんた、明日、さっき指示された時刻までに、署へ出頭するように、事情聴取するから、いい

につけるのである。あたしは未亡人である。ああ、なんと封建的言葉である。夫に死なれても、あと追い死にもせず、未だ亡くなれないで生きている人。だが法廷に立つ原告として、事実は然りそうなのである。あたしは死ぬまで生きるであろう。そして、毎年の夏、此の喪章を胸につけるのだ。あたしは確かに未亡人である。しかし、あたしには、死んだ夫はいない。夫と称ぶまえに、あたしはその人を失ってしまった。二十六年前、その人をあたしは愛していた、いた筈である、のにもうその想い出は現実ではない。だいいち、愛とはどういうものか、知る年令ではなかった。それより今、現在のほうが、あたしの

その人への想いは熱い。逢えれば、想い出しもできようが、今、この頭の中にその人の、十六才の少年の顔を思い浮かべようとしても、思い浮かべられない。ただ、一つ律義者の暑中見舞のように、夏、忘れられないのがたった一度光ったウロコのような少年の瞳である。その瞳だけは、あたしの記憶から切りはなせない、いやむこうで切りはなれないものであるのだ。それも、あたしの眸の奥深いところで、瞳は、そのウ

ね。（書類を差し出して）これの、此処へ判おして……。

知雄……はい（と、弱々しく返事して、判をおす）

刑事 ま、なんだな、確かに御愁傷さまなことだが、戦争が終ったからって、いやだから警察は、自分等は四六時中寝もせんで、事件の処理にあたっておる今日なんじゃから。自殺事件などおこして、人騒がせな。保護者としての、あんた責任をせめられても仕方ないんだよ（チャリと、山内の方を見る）、そのお、父親として。

知雄 ……はい。

刑事 じゃ、なんだ、現場の梨畑の持ち主に、その、御迷惑をかけたのじゃからしてちゃんとしてな。じゃ、まあ、気いおとさんで（と、去る）。

知雄 御苦労さまでした……。

——間——

せい （ふと気づいて）ああ、お茶もいれませんで……。

市川 あ、お母さん、よろしいんです、いえ、あの私たちでいれますから、ね、邦江

さん。(と、立つ)ね、山内先生？
せいでも……。

山内 うむ、そうしなさい、市川さんと平田
さんで。お母さん、やらしてやってくださ
い。お母さんは、鉢やすまれて……。
せい すみませんね……。 (と、二人を見送
る)

——短い間——

山内 (坐っているが、右脚は曲がらない)
無礼な刑事ですな……。

知雄……。

山内 あの二人の女子生徒は、うちと同系の
女子学院の生徒なんです、ソロバンが上
手なんで、動員先の毛織工場からうちの事
務に回ってもらっていたんです……。

せい 良い娘子さん方です。

山内 背の高いほうが、平田邦江です。

せい ……あの、知治と？

山内 え？ いや……。なんか、本なんか貸
してやっていたらいいですな。…… 庄司
は、本の好きな子だった。(せいの指が目
に、それを見て)すみません……。

尾沼 純が登場する。

尾沼 あ、山内先生……、御苦労さまです
(と坐り)私尾沼でございます。

山内 教頭先生です。教頭先生、そちらがお
父さんです。そしてお母さん、お兄さん。

尾沼 校長は入院中として、代理で御挨拶に
お伺い致しました。(焼香をすませてか
ら)この度はなんと申しあげたらよいか……。
……。まったく突然のことで、さぞ、お力お
としのことだろうと、只今も、校長と話し
合ってまいりましたところで、心から御伺
情申しあげる次第でございます。せつかく
戦争も終り、平和がやっつてまいるというの
に、優秀な御子息を、このようなカタチで
お亡くしになるという……、御両親、また
御兄弟の、いかほどに御心痛かと、御推察
申しあげる次第でございます。(深々と頭
をさげ、やがて起こすが、そこへ邦江、京
子があらわれたので)なんだ君たちは？

山内 私が連絡して呼びました。庄司にとっ
て、最後の友だちですから……。

尾沼 ふん……。 (邦江が再び去る、その背
をシロッと見て)船水女子学院とは関係な
いことじゃないか……。

市川 私、この近所なんです、お隣りの町内
なんです。

尾沼 ……うむ、ま、君には関係のないこと
だ。ところで、御両親、庄司君の最近の動
向と申しますか、別に変ったようなところ
は、お感じになっておられない？ 聞きま
すと、遺書はもちろん、それらしきモノも
皆目みあたらないとか？

せい ……はい。

尾沼 ふん……。じつは、庄司君は終戦の日
以来、今日まで一週間、学校に出ておらん
のです。お家のほうは、如何でしたか？

せい はい、一昨日までは、夕方には戻って
おりました。知治が休んでおりましたと？

尾沼 ふーん、すると、いつもと変わらない
様姿で？ 朝、登校すると言って？

せい ……はい。と言っても、戦争が終つて
から、急に無口になってしまつて、でも、
もともと口数の少ない子でしたが、家の屋
根にあがって、日射病になるからって言っ
ても、何時間も、坐ってぼんやり空を見上
げていたり、ですから、知治が変だと言え
ば、そのように……。

尾沼 それは、私どもにしても、終戦の玉音
放送以来みなショックを受け、変わったと

言え、日本全体が変わつたのですから、
でも、これからは自由な、いや、敗戦の悲
しみから祖国日本の再建にですな、立ちあ
がろうと……、ですから庄司君のように……。
……。なんと言うか……。

山内 子供たちの受けた傷は、我々大人より
ひどいのではないのでしょうか……。

尾沼 う？ うむ、それは、だからもし庄司
君が学校へその登校していたら、学校とし
ても教師としても、この事件は未然に防げ
たのではないのだろうか……？

山内 ……。

平田 (茶を持って来ながら)山内先生、堀
田さんが……。

山内 ああ、堀田か……。
せい まあ、堀田さん。さあ、お線香あげて
やってくさい。

堀田 (部屋の片隅に坐り、動かないが)庄
司の英助野郎……、なんで死にやがったん
だ。ばかやろう(呟くように)……。

尾沼 やめなにか堀田君、さあ、お線香あげ
なさい。

吉岡 貫、走りこむようにはいってく
る。汗だくである。

吉岡 (ひれ伏すように頭を畳につけ)担任
の吉岡 貫でございます。御両親さま、申
しわけございません。担任教師のこの吉岡
の責任であります。なにかも、私が悪い
のであります。

尾沼 な、なにを言うんです、吉岡先生、
吉岡 はい、教頭先生には、はい、もちろん
校長先生にも、全く責任はございません。
すべての責任は、この吉岡にあるのです。

庄司を殺したのは、この私であります。
尾沼 君、責任なんて、軽々しく口にするも
んじゃないですよ。いや、責任が、もし責
任があるとしたら、この教頭のボクです
よ。ボクに責任があるのです！

吉岡 いいえ、教頭先生、担任教師として、
この吉岡が全責任を負うべきであります。
私は、覚悟してまいりました。

尾沼 君は、教育者として、もっと冷静にな
らないといけません。ただ興奮して、ま、
その気持はもちろんわかります。わかると
しても、理にかなわぬことを口ばししては
いけません。教師に責任が、もしあるとし
たら、その上司に、教頭の私に教師に対す
る責任があります。私に責任がもしあると
したら、私の上司である、監理者であると

この校長に、責任があるのです。

吉岡 先生は、教頭として七百余名の全校生
徒を監督する責任は、おありかもしれませ
ん。しかし、生徒一人ひとりに対する責任
は、担任の教師にあるのです。(悲痛に)
ああ、どうか、お父さん、お母さん、この
吉岡の教師にあるまじき失敗を、お許しく
ださい……。

——間——

山内 堀田、君は庄司とはいちばん仲がよか
った筈だ。なにか思い当ることはないか？
なにか悩みか相談をもちかけるとか、君を
たずねたりしたことなかったか？

堀田 (皆の視線をあつめて)たずねてきた
ことは、最近では、ありませんでした。で
もほく……。今日のこと、ぼく漠然とだけ
ど、知っていたような、それも、それをど
うしようもないというような、気がしてい
た……。それは、先生、この前の晩もそう
だったし。

山内 ……(何故か、顔をそむける)

堀田 それからあの、八月十五日、あの放送
を職員室で、在校中の先生方と、ぼくら学

校守備班とで聞いたあと、事務室でだつた。ぼくはあの時、もしかしたら、予感したのかもしれない……。

——溶暗。

——溶明すると、それは舞台一隅の学校の事務室である。三つの机と同じく椅子。窓の外は校庭。燦とした夏の陽差し。

一九四五年八月十五日、昼すぎである。前景より七日まえ。

——舞台空虚。

やがて、向坂時子、市川京子、すこしおくられて、平田邦江が登場し、それぞれ自分の机へ。事務をとるでも、ソロバンをはじくでもなく、ぼんやりしている。

向坂

もう、終わったんだねえ……。もう、なにもかも終っちゃったんだねえ……。此う言っちゃなんだけどさ、死んだ人は死に損、生き残ったあたしたちは、千に一つの拾い得、これが人間の運命だもン、しかたないよね、そうだろう、邦江ちゃん？

平田

ええ、……。兄が、柏の連隊にいるんですけど。この前の面会日に、なにかちかく戦地へ出発するらしいって、喋っていたん

です……。

向坂 大丈夫よ、邦江ちゃん。もう、いまの日本にや、戦地へ行く輸送船なんか、ないって言うよ。学校の講堂にいる爺さん部隊なんか、鉄砲だつて、ゴボウ剣だつて、三人に一人、あとは竹槍じゃないの。負けるわけよ。みな黙っていたけど、日本は負けるって、みいんな知ってたわよ。あゝあ終つちまったんだな……。

市川

でも、主任さん。アメリカ兵がくるんでしよう？ そしたら、私たちどうなるんです。アメリカ兵って乱暴なんですよ。私たち、山の中にでも隠れにゃいかんのでしよう……？

向坂

心配せんで大丈夫よ、京子ちゃん。アメリカ兵って国は、女の人を大切に扱うところなんだから。

市川

敗けた国の女に對しても？

向坂

主任さんはいいけど、日本の若い女の

向坂

なには、どうすればいいんだろ？
なに言つてんのよ、あんな、あたしだつて、未だ女ですよ、失礼な。大丈夫よ京子ちゃん、いざとなつたら二人で、裏山へ逃げようよ（と、笑う。）

市川 九十九里の海岸が、危ないんです

て。

向坂 ああ、それより邦江ちゃん、庄司君どうしているだろう。九月一日に入隊するんだつて、張り切っていたじゃない。

平田

……。
向坂 こうなつちまうと、大変だよ、ひどい
ちばい真面目なあの子だもの。

——堀田和夫がはいってくる。

堀田

主任さん、庄司のやつ来ませんでしたか？

向坂

いいえ。あたしたち、今、庄司君のこ
と心配してたのよ。

堀田

心配……？ そうだ心配だ。放送が終つてから、姿消しちまったんだ。家へ帰つたんだらうか。そんなら、黙って帰る等ないしな……。

向坂

みんなは？
堀田 裏山の原ッばで、みんなひっくりがえつてる。だから、庄司ひとり見えないんで、ぼくだけ下りてきたんだ。

向坂

自棄おこすような子じゃないけどね。
堀田 そんな、度胸のある奴じゃないですよ。だから、かえつてね、気がかりなんだ

とも言える……。

市川 ……静かだな、学校中シーンとして

向坂

あの子は友だちも妙いしね、堀田君ぐ

らいでしょ、親友は？

堀田

親友か、どうか……。不思議とね。机をならべてきたんですよ。それに、ぼくは、奴より二つ年上なんだ。

市川

あら？ 知らなかった。

堀田

二年生ンとき、二年間病気で休学して

るんですよ。

市川

どおりで、兄貴分だったのね。

堀田

それに、ぼくが三年生に復帰した四月に、庄司は強制疎開で、東京から転校してきて、ぼくの隣の席へ坐つたんですよ。

向坂

あたし覚えてるよ。転校手続きにきて、青白い都会っ子そのものよ。ひょろっとして、跡が悪いんじゃないかって思つた。

堀田

そういう事で、陸軍幼年学校、受けて

んだからね。

市川

じゃ、相当、頭いいのね、庄司さん？
堀田 いや、自分で言つてたよ、オレはキリ野郎だつて。

堀田 うむ、ピンからキリまでの、キリ。二

年に上がるとき、及落会議にかかったんだ

つて。そういう奴が、幼年学校受験する

てんで、職員室で笑いもんなつたそう

だ。でも、ぼく、その話し聞いた時、笑え

なかつた……。それより、嫌な予感した

んだ……。

——その時、急ぎ足で、尾沼 純がはい

ってくる。

向坂 あ、教頭先生……。

尾沼 おい堀田君、知らないかね、こないだ

一年生の大川からとりあげた、短刀？

堀田 短刀……？

尾沼 うむ、机の引き出しから消えているん

だよ。

堀田 自分が疑われているんですか？

尾沼 いや、そうじゃないが、校内に生徒は

いないし、壁ごしに君の音が聞こえたもん

だから……。ま、その……。

堀田 自分（当時、中学でも「私」を、教師

及び上級生に對し「自分」と言わなければ

ならなかつた）は知りません！

尾沼 うむ、そうだろうな……。庄司の奴か

もしれん……。

平田 庄司さんは、そんな人じゃありません。

尾沼 （はじめキョトンと邦江の顔を見詰

ていたが、忽ち憎しみの色をいつぱいに浮

かべ）どうして、君に、それがわかるん

だ？

平田 ………。

尾沼 ほう、君は庄司とどういう仲なんだ？

そんなに解りあえる仲なんだな？ 恋文で

も、やりとりする仲なんだな？

市川 先生、私たち、ただときどきお話しし

ただけです。

尾沼 君は黙っているノ平田君、明日から、

君（市川）もだ、自分の学校へ戻りなさい、

い、戦争は終つたんだ。生徒はみな工場か

ら帰ってくる……。平田君、明日学校へ行

つたら、すぐ私の女房に、いや校長先生に

会いなさい。そして、自分のふしだらな行

為を、心からあやまりなさい。庄司みたい

な、勉強のできない不良とちくりあうの

は、船水女子学院の恥じゃないか（と、部

屋を出ていく）。

市川 （泣き出してしまふ）

平田 （唇を噛み、蒼白な顔で立ちつくす）

堀田 勉強のできない……。いったい、ぼくらにどれ程、勉強を教えてくれたってなんだ……。庄司の奴が不良だって？ 戦争中だろうと、男が女を好きになるのは、人間の普通じゃないか……。庄司がなに言ってる言うんだ。

堀田 そうよ……！

堀田 平田さんが、なにをしたって言うんだ。

堀田 そうよ……！

堀田 (堀田を残して暗くなる) ぼくら学校守備班というのは、二年から五年生まで工場に動員され、一年生は畑仕事という、空っぽになった学校を守るといふ事で、病弱者、軽い病気になる者たちで編成されたもので十人ほどの、三、四年生であった。庄司は今年の四月に、予科練を受け、適性検査に土浦まで行き、不合格で帰ってきた。そして、六月、不合格の原因が肺浸潤にかかっていることであることを、市役所の兵役課の通知で知り、すぐ工場動員から学校へ帰ってきたわけだ。やがて、ぼくたち守備班の四年組の数人は、庄司が、平田邦江に好意を抱きはじめていることを知った。空襲は東京ほどでないしろ、やはり

時偶、爆弾、焼夷弾をおとされた。そんな不安と、息苦しい毎日、ぼくらはいつの間にか、庄司の平田邦江へのほのかな思慕が、一つのロマンとして、ぼくらの胸にも宿りはじめ、とうとう、庄司に平田邦江へ手紙を書かしてしまつたのである。それだけで……。もちろん、平田邦江から返事がくるわけでない。二人っきりで話し合ったこともないだろう。しかし、二人の胸の内に育ち始めたものがあることは確かであった。これが、不良の仕業だといふのか。これが、尾沼先生のちくりあう、といふことなのか。あれは七月も、最後の日であつたと想う。庄司に、市役所の兵役課から呼び出しの電話があつて、奴は自転車に乗ると、すつとぶように出ていった。

舞台一度暗くなり、溶明すると、前景の事務室。向坂、市川、平田、それぞれ事務をとっている。校庭では遠く国民兵(爺さん部隊)の訓練の号令が聞こえてくる。壁電話の受話機は外れ、その箱の上に置かれてある。堀田がはいつてくる。

堀田 ありがと、誰からだろう？

市川 庄司さんよ。

堀田 そう(と、受話機をとる)、はい、もしも、堀田です。……ん、……ん、え？

え？……そうか。……うむ、よかった！それで何日？……九月一日。何処だつて？……久里浜だな？……うむ、そりゃいいよ言つとく、しかし早く帰つてこいよ、いいね、じゃ。(と、受話機をかけるが、しばらくその姿勢のまま立っている)。

向坂 どうした、堀田君？

堀田 ヘッ、病人まで征くのか……。オレも死ぬるぞ……。か……。

向坂 じゃ、やっぱり庄司君……。

堀田 市川さん……。とうとう、庄司も兵隊だよ。九月一日、久里浜の分隊に入隊だつてさ……。

市川 海軍さんか、飛行機乗り、若鷲ね、庄司さん似合うわよきつと。

向坂 庄司君の胸、癒つたの、もう？

堀田 知りません……。でも仮に癒つていたとしても、予科練の訓練に耐えられるとは、ぼくには考えられない……。それに、第一、ぼくの経験からすると、再発の危険があるし、再発ほど厄介なものはないん

だ。しかし、今は戦争中だ、そんなこと言っちゃおられんのだろう……。ぼくも国に尽したい、斗いたい、でもそれはその秋がきてからだ。あいつはなんで死にいきのたろう……。それとも、ぼくのほうが卑怯なんだろうか……？

市川 庄司さん、勇気があるわ、ね、そうでしょ、邦江さん？

平田 ………。

向坂 でもね、十六才の兵隊さんとはねえ、可愛いのか、可哀そうなのか……。

市川 主任さん、そんなこと喋っては駄目ですよ。今は一億総戦起の秋ですよ。私の従姉弟は少年戦車兵なんです。十五才ですよ。

向坂 ………うむ、そういう秋なのねえ、いま日本はそうなのねえ……。

堀田 ぼく、先生方に知らせてくる(去る)

市川 私たちだって、沖繩のひめゆり部隊に負けれないわ、アメリカは九十九里の海岸ねらつてるって。邦江さん、毛織工場で善枝さんたち、昼休みは竹筒訓練だつて。

平田 このまえ、昼の空襲で日本の戦闘機がやられたでしょ……。此の窓から私たちが見てた……。

市川 そりゃ日本だつて、やられる時あるわ。

平田 ……高かっ、雲ひとつない蒼空だった。豆粒みたいな飛行機が、黒い長い煙りの尾を引いて落ちていく。いつまで経っても、見えなくならない……。京子さん、叫んだわね、落下傘はないの！落下傘はないのって！

市川 ………。

平田 まだ見えてる、まだ見えてる……。

それで、物の陰にはいるというところで、ポツと小さい炎となつた。

向坂 たまらなかつたねえ、あれは……。

平田 私、初めて見たの、戦争で人が死ぬのを、いえ、殺されるのを……。

市川 ………。

庄司 知治が息をきらし、汗みづくになつて帰ってくる。職員室へ報告に行こうとして、事務室まえを通りかかるが、思わずはいってくる。

向坂 そう、おめでとう……。
市川 元気でね、庄司さん……。

堀田 ありがと、誰からだろう？

市川 庄司さんよ。

堀田 そう(と、受話機をとる)、はい、もしも、堀田です。……ん、……ん、え？

え？……そうか。……うむ、よかった！それで何日？……九月一日。何処だつて？……久里浜だな？……うむ、そりゃいいよ言つとく、しかし早く帰つてこいよ、いいね、じゃ。(と、受話機をかけるが、しばらくその姿勢のまま立っている)。

向坂 どうした、堀田君？

堀田 ヘッ、病人まで征くのか……。オレも死ぬるぞ……。か……。

向坂 じゃ、やっぱり庄司君……。

堀田 市川さん……。とうとう、庄司も兵隊だよ。九月一日、久里浜の分隊に入隊だつてさ……。

市川 海軍さんか、飛行機乗り、若鷲ね、庄司さん似合うわよきつと。

向坂 庄司君の胸、癒つたの、もう？

堀田 知りません……。でも仮に癒つていたとしても、予科練の訓練に耐えられるとは、ぼくには考えられない……。それに、第一、ぼくの経験からすると、再発の危険があるし、再発ほど厄介なものはないん

だ。しかし、今は戦争中だ、そんなこと言っちゃおられんのだろう……。ぼくも国に尽したい、斗いたい、でもそれはその秋がきてからだ。あいつはなんで死にいきのたろう……。それとも、ぼくのほうが卑怯なんだろうか……？

市川 庄司さん、勇気があるわ、ね、そうでしょ、邦江さん？

平田 ………。

向坂 でもね、十六才の兵隊さんとはねえ、可愛いのか、可哀そうなのか……。

市川 主任さん、そんなこと喋っては駄目ですよ。今は一億総戦起の秋ですよ。私の従姉弟は少年戦車兵なんです。十五才ですよ。

向坂 ………うむ、そういう秋なのねえ、いま日本はそうなのねえ……。

堀田 ぼく、先生方に知らせてくる(去る)

市川 私たちだって、沖繩のひめゆり部隊に負けれないわ、アメリカは九十九里の海岸ねらつてるって。邦江さん、毛織工場で善枝さんたち、昼休みは竹筒訓練だつて。

平田 このまえ、昼の空襲で日本の戦闘機がやられたでしょ……。此の窓から私たちが見てた……。

吉岡 おめでとう、庄司ノ(と、握手)

庄司 はいノ、ありがとうございます。

尾沼 庄司君、本学園の名誉のために、しっかりやってくるんですよ。いいですか。

吉岡 これから入隊までの一ヶ月間、健康に留意して、御国の為め、天皇陛下の御為めに、生命を賭して闘ってこいよ!

尾沼 すでに君の上級生の多くは、陸軍、海軍それぞれの学校に入隊しています。その、本学園の誇りであるそれ等諸君と共に伍して、君も立派に務めを果してくるんです。

庄司 はいノ、覚悟はできていますノ!

山内、群れから、ついと離れる。目立たなく二、三步追う平田。

山内を追う明りの輪。それ以外は暗くなる。

山内 背中に痛いほどの、平田邦江の視線を感じた。卑怯者ノなんで逃げるんだノ! 一言も喋らないで、黙くとも知治がいちばん信頼し、慕っている教師の貴方が、何故、黙して群れから離れるのかノ 神に捧げる小羊のように、死ぬことのみを熱中して、

だろう。だが、何故、それを、昨日までにしなかったのかと、訊われたら、答える言葉のながあるだろう……。私は、教師である……。

暗くなり、再び照明がはいると、其処は学校の宿直室である。山内、堀田、庄司がいる。庄司は、山内のものでもらう書物の、読むではなしに頁を繰っている。虫の声――夜。

堀田 先生、自分たちは、黙くとも二年学業がおこなっているんです。学校へ出てきても、先生方は全然教室に顔を見せられないどうしたんですか、先生?

山内 ……うむ、それがねエ、校長が入院しちまって、此れからの方針なんかね、決められないでいるんだよ……。

堀田 自分らこのままで、来年卒業しちまうんですか?

山内 そんなこともないだろうが……。教科書なんかね、今までのものを、そのまま使うわけにもいかんし……。

堀田 じゃ、先生のお持ちの本、小説でもなんでもええ読んでください。

今、少年は征くというのに、哀れ、一つの言葉もかけられないのか……。全く、私は哀れなやつだ……。 教頭や、吉岡の無責任

な、それも歯のうくような言葉……。 だが、私はそれすらも責められない。私には言葉がないのだから……。 しかし、しかし、しかし、しかし、しかし、なんと

いえよう。戦に征く少年に、死ぬな、生きて帰ってこいと喋ることが出来るだろう。か。もし、できたとしても、誰がその白々しさに堪えられるだろうか……。少年にとって死は現実であって、自然ではないのだ

……。 (これまで、ビッコをひきずりながら歩きまわっていたが、ふと立ち止まって) 私は、日増しにふえる東京からの転校生徒の係りとして、初めて庄司知治に接して

から、彼の純粋さを誰よりも愛してきたつもりだ。彼から、予科練を受けると相談された時、私は乙種でなく、甲種にしろと言った。四年にならないと、甲種は受けられない。それで四年になって、甲種をと言ってきたら、兵学校にしろと私は言うつもりだった。庄司に合格する力はない。しかし、そんな姑息な手立てにどんな効果があっただろう。今年の冬、庄司は乙種に受か

山内 ……うむ、それもねエ……。 堀田 なア、庄司。 庄司 ……。

山内 うむ、ぼくもねエ、そうできれば、そうしてやりたいんだが、なにぶん、学校の方針がねエ……。 (と、投げだした膝を撫でている)。

堀田 不安でしょうがないんです。日本が戦争に負けて、今日、東京へ行ってきたんですが、東京にやなにもないんです。本場に焼けの原なんです。電車の中で喋ってました。有楽町の駅から、新宿の駅が見える。日本はどうなるんですか?

山内 ……すまんが、ぼくにもわからない正直って……。 だが、どんなことがあっても、日本はもう二度と武器をとらないだろう。

堀田 なア、庄司。土浦から練習機が飛んできてピラ撒いたんだらう? 先生ピラに書いてあったんですって、――海軍はまだ斗う、戦斗機も軍艦も健在である。志ある者は土浦へこい――。

山内 ……。 田堀 だから先生、落ちつきたいんです、一生懸命に勉強して、なんか本を読んで、本

ってしまった。駅から土浦へ、適性検査にむかう庄司を見送りながら、私は不合格を祈った。だが結局は、一時は不合格になったものの、やはり、久里浜分隊に入校ということになり、また逆転して、半月後、敗戦をむかえるのである。その後、庄司は、

教頭の言うとおり、学校へ姿を見せなくなった。ただ、確か十九日だったかの、私の宿直の夜、堀田が尋ねて来、そこへ庄司もやってきた。そして、庄司は蒼白な顔に一瞬紅をうかべて、私に訊うのだった。――

敗戦の責任は誰にあるんですかノ!―― 此の戦争は誰が始めたのですかノ!―― 私は、答えられなかった……。 いや、答えはあった。しかし、答えがあったとしても、どうして今更口にできようか。戦時中、牡蠣のように口をときし、子供たちの出征に、この時ばかりは誰よりも大きな声で、万才!! と叫んだ大人たちに、今更なにを答える資格があるというのだ、……。

私が久里浜の海兵団でただ一冊の英語の本を持っていったというだけで、憲兵に半殺しのメにあい、片輪にされた事を。奴等の残酷ぶりを語るのもよいかもしれない。戦争屋の名前を片ッぱしからならべるともい

なんかなにも無いんです。薄っぺらな教科書も、学校にとりあげられたし。先生は先生で、本は貸せないって言うし。

山内 (弱々しく笑って) そういじめるなよ、堀田。 いや、つくづくぼくはぼくの無力さを感じるよ。

堀田 すみません……。 恐いんです、ぼく。 山内 うむ、そうだ、ぼくもそうなんだ……。 だがなあ、堀田。 そりゃこれから、そう簡単にはいかないだろうが、これ以上、日本は暗くはならんだろう。君たちも、もうすぐ勉強にもどれるだろうし、自分の好きな学問を、自由に研究できるようになるだろうよ。 だから、な、堀田、な、庄司、希望を持つんだ、希望を、明日にな。 そうすれば明日はひらいてくれるだろう。 そりゃア、保証はないよ。 しかし戦争は終わったんだ。 もう殺されることはない。 生きていける。 生きていける以上、人間には明日をきりひらく力はある。 人間を信じることだよ。 自分を信じることだよ……。

――短い間――遠く(職員室で) 柱時計が九時を告げる。

堀田 あッ、いかん、おふくろに叱られる。

先生、帰ります。お邪魔しました。庄司、

君は？ まだいる？

庄司 ……（頷く）

堀田 じゃ、おやすみなさい。

山内 ああ、氣をつけて帰れよ。

堀田、去る。

——短い間——虫の声。

山内 どうした、庄司、久しぶりだな。君、あれから、逢ったかい、那江クンと？

庄司 ……。

山内 教頭先生に、なにか言われたって……

……？ 氣にすることないよ。奥さんが恐

いんだよ、あの尾沼先生て人は。

——短い間——

庄司 山内先生……。

山内 ……うむ？

庄司 この敗戦の責任は、誰にあるんですか？

山内 ……？

庄司 自分にも責任の一端はあるのでしょ

か……？

山内 そんな、君、君に責任なんて。責任は

君……。戦争を始めた者にあるんだ。

庄司 ……誰が、戦争を始めたんですか？

山内 ……？

——間——虫の声。

山内 ……いまにわかることだよ、庄司。……

……誰に責任があり、誰が贖罪しなければならぬか、これからの歴史が教えてくれる……。尠くとも、君に、君たちに、責任なんか絶対ないことは確かだ……。

重い空気に堪えかねて、山内の肩が、徐々に徐々に沈む。舞台暗くなり、闇に虫の声のみ残る。風がでてきた。

山内の声（フィルターを通して）尠くとも

君に、君たちに、責任なんか絶対ないことは確かだ……。

一条の明りが差すと、小さな川の堤に腰をおろした体の、平田那江をとらえる。セーラー服にもんぺ。風の音。

度も知治さんとは会っていませんでした。

一度、事務連絡で学園には行っているのですが、堀田さんたちは、その時お会いしているのですが、知治さんには会うことができなかったのです。……はい、……どれほど、会いたかったか……。そんなことは、絶対ありつこないことなのに、そんなこと自分でよく知っているのに、玄関がガラリとあいて、——知治です——と、知治さんが姿を見せやしないかと、よく勝手な想像をしたものです……。

庄司の声（フィルターを通して）今のほく等に行ける事は、国のために、天皇陛下の御ために生命を捧げることだけだよ。

尾沼の声（フィルターを通して）庄司君、本学園の名譽のために、しつかりやってくるんですよ。いいですな……。

吉岡の声（フィルターを通して）これから入隊までの一ヶ月間、健康に留意して、御国のため、天皇陛下の御ために、生命を捧げて闘ってこいよ！

平田 ……知治さんは死んだ。信じられないような死にかたで、死んだ。十六年の短い生涯……。ただ、茫然と立ちつくし、果とあけた、私の口の中で風が齒に鳴って

いた。

平田は闇にのまれる。と、鯛（かなかな）の音が聞こえだし、此の幕始めの景、庄司家の奥座敷にもどる。

——溶明。

堀田 ……やっぱ、ぼくが殺してしまったんだ……そうなんだ。

山内 ……莫迦な、そんなことはない。

堀田 ぼくは、庄司の親しい友人のつもりでいい気になって、結局は、ぼくは、自分のことしか考えていなかった。庄司のためになにか一つ考えてやろうとしなかったんです。いえ、生意気に文句ばかりつけていたんです……。

吉岡 私といたしまして、庄司君の勤静は、常に注意いたしておりました。純真一途な庄司君の、敗戦の痛手はまず担任のこの私が、慰めあってやらねばならなかったのです。ところが、なんとしても庄司君は姿を見せませんのです。いくら一生懸命、捜しても、見あたらないのです。

山内 やめたまえ……。吉岡 ……なんだ、君……？

平田 昨夕の嵐は、まだ生ぬるい風が地を這

うことで残っていました。川はあふれるほどに濁流となり、橋桁にぶつかり、高いし

ぶきをあげているのです。八月二十二日の

朝知治さんの学校の小使いさんが、自転車

で、山内先生の使いだと言って、私を迎え

にきました。その川の向こうの梨畑に、知

治さんはいました。川ッぶちの、道路のい

っぱいの人だかりを——ごめんよ、ごめん

よ！——と、楽しんでるように、小使い

さんはかきわけて、橋を渡って、私を其処

へ連れて行くのです。其処には、知治さん

の屍体が叩きつけられたように、平たく土

にへばりついていました。一晚、激しい雨

にうたれたためでしょうか。土を舐めた知

治さんの顔は、真ッ白にふやけているので

す。左手は胸におしつぶされ、伸びた右腕

の先には短刀が握られ、それだけが生きも

のようになっているのが、自分でも良くわかり

ました。山内先生が、なにか声をかけてく

れているのですが、そちらへ行こうと思っ

たのですが、立ち止まった其処から、どうし

ようもなく、動けないのです……。……

私は、あの放送の日から、十五日から、一

山内 君もぼくも、庄司は、ずる休みしてる

ンだって喋りあってた。一度も捜したり

しはしなかった。だいいち、待つてすらい

なかつたんだ。学校中の生徒の半分は、い

まだに休んでいるんだ。だから、その半分

はぼくたちとは関係ないし、登校してくる

連中すら、ぼくたちに放っておかれてる。

尾沼 山内先生、こんな所で、ナニを！

山内 吉岡先生、ぼくたちは今、ぼくたちの

ことだけで精いっぱいじゃないのか？

吉岡 そんな、君。君みたいに言ったって。

尾沼 君、君は卑劣ですよ！ 君ひとりで、

庄司君の身方みたいな、いいふりして。

山内 いいふりしてるのは、どっちですか！

貴方は、貴方も責任があると言われた。そ

れでは、その責任を貴方はどうやって、償

われるおつもりですか？ 吉岡先生のように

にへいつくばってですか？

吉岡 それじゃ、山内先生、君はなにをし

た！ いったいなにして謝った！

山内 ……ぼくは謝れない、あやまるなん

て……。あんた方にも、ぼくにも、あやま

る資格はないんです。

尾沼 キミイ（と、嘲笑して）謝るのに、い

ちい資格があるんかね……。……。

山内 責任を負う資格すら、ありはしない。ぼくたちは、黙っていることに狎れてしまつた……。生徒たちに対して、答えないでいる事への無責任さに狎れてしまった。

——問—— 蠅の声

山内 三日まえ……。ぼくは庄司に会っているんです。宿直の晩だった……。ぼくは、庄司に、敗戦の責任は誰にあるのか？ と質問された。戦争は誰が始めたのか？ と訊かれた……。ぼくは答えられなかった。答える事になんの障礙もない今なのに、ぼくは逃げて答えなかった。答えないでいる、卑怯さに、もう心は疼きもしやアしない。その方が楽なんだ。押入れにもぐって、布団かぶっていた方が安心なんだ。そして、呟く、オレにやア女房もあれば、子供もいる。年老いたおふくろもいる……。

尾沼 そりやア君、そりやア、戦争の責任までは、我々は負えませんよ。負う必要はないだらう……。

——問——

油嬢の声に、中年の女がほのかに浮かびあがる。

喪章の女 あたしは、毎年の夏、もうヨレヨレになった喪章を、胸に飾る度に、あの日の、あの時の事々が、それから今日までの二十六年間の他の事には、全く記憶があいまいでポトッとしているにも拘らず、あの事は一つ一つが、活字を組むように想起させるのだ……。〈責任〉は、〈償い〉を必要とするならば、あたしの此の喪章のよごれは、それに見えるかもしれない。しかしあたしは〈被告〉ではない。あたしは〈原告〉なのである。あまり暗れやかな、勇気漂々しい原告ではないし、下手すれば被告側に有利な証人ともなりかねない、あぶなつかしい原告なのである。それでも、あたしは、なんとか原告の席を守っている。めくるめく太陽の下、ものの影が自増しに濃くなつていく、裁判所の庭に人の気配はない。今日も、また、開廷を告げる堅い埴の音は聞けぬのか……。だが、あたしは此処に立ち、生きて在る限り叫ぶ、……知治を殺したのは誰だノと。

庄司 勝(兄) ぼくは、知治に死にいそぐなと言いきかした。しかし、あいつは死神にでもとり憑かれたように、天皇陛下のために死ぬことばかり考えていたんだ……。ぼくには打算があつて、兵隊よりも将校と、それも海軍経理学校にはいった。あとでツブシがきくからね……。ところが、知治には打算どころか、未来的な、誰のせいかわからないが、人間的な夢すらなかったんだ……。国のために死ぬ、天皇陛下万才と叫んで、それが少年にとつての誰一つの夢だなんて……。

——問——

山内 ぼくは謝れない、あやまるって言うのは、あやまって済む場合だ。ぼくは庄司に許してくれと言えない……。

尾沼 キミイ(と、笑つて) 君は、なんだア、その、戦争責任まで考えているのかね？ そんな莫迦な(と、また笑おうとするのだが、ひき攣つてしまふ)

山内 教頭先生、無礼はお許しください、謝ります。だが、先生は、戦争責任までと、おっしゃいましたが、そのとおりです。

尾沼 戦争は、戦争をおこした者の責任です。

山内 誰？ 誰です……？

尾沼 そりや、と、東条ですよ、東条英機だよ。軍人だよ。いや、職業軍人ですよ。山内 そうかもしれません……。そうでしょう、しかし……。

吉岡 君ノ、君は、教育者として、素朴に、もっと率直に、父兄の方々のまえに頭をさげる気持になれんのかね、エッノ、なんだかんだって理屈ばっかこねまわして。なんだ、その道学者ヅラはノ

山内 頭をさげる？ 教育者として頭をさげて？ 本当に頭をさげたり、死ぬまで二度と、その頭はあげられないんだぞノ、よし、本当に、さげてみるノ、教育者として、本当に頭をさげてみるノ、黙ることで、答えないことで、身を守ってきた、日本の教師として、その頭をさげてみるノ

突然、知治の父、庄司知雄が笑いだす。皆、おどろき凝視するが、彼は笑っているのではなく、泣いているのである。平田邦江、力をこめて一人立つ。

——溶暗。——

——溶暗。——

闇を切り裂く、金属音

——幕——

大橋 喜一 リアリズムについてのノート

——西リ演創作学校講演要旨——

■ 内 容

- (1) 「テーマの精錬」ということ
- (2) 作劇は観客の意識との斗いである
- (3) 勉強は比重正しく
- (4) リアリズムについてのノート

久保菜とマルクス・エンゲルスの芸術論

唯物弁証法的創造方法から社会主義リアリズムへ

アイデアリズムとリアリズム

社会主義リアリズムについて

テーマと形象

「典型的な境遇における典型的性格」の問題

久保菜のリアリズムをどう高めていくか

■ 発 行 西リ演中国ブロック創作学校運営委員会

■ 頒 価 200円(送料35円)

■ 申 込 前金で下記へ

広島市八丁廻2-43 広島地裁内

全司法労経書記局 沖 信 子

川 向 う

和 田 澄 子

夏の夕暮れ。
遠くの方から盆踊りの太鼓の音が聞こえる
しま、店に面した部屋で、和枝の浴衣を縫
っている。和枝、店の前に置いた自転車に
配達の醤油や酢のびんを積んでいる。

和枝 ……まだあげそめし前髪の、りんこの
もとに見えしとき、前にさしたる花柳の花
ある君と思ひけり……。

しま 今夜は川向う、盆踊りやな。

和枝 夕暮れの太鼓の音……なんやらおそろ
しいような、それでいて胸がときめくよう
な、……闇をつきぬいて、パッと光りがさ
しこむような、そんな夜がくるみたい……。

しま 和枝、あんたこの頃、毎晩あの妻恋橋
のところで、あの男と逢うてるのやろ。お
母ちゃんが寝てからソロソと抜け出して。

和枝 毎晩やなんて……。

しま ひとの目があるねんで。

和枝 あの人が口笛を吹くのやもん。

しま サカリのついた猫みたいに！

和枝 失礼なこと言わんといて。仕事はちゃ
んとしてるやないの。

しま 当前や、遊んで食べていける、うち
と違う。

つ先の菱田村。

その村はずれに、しまの店がある。
店の近くを早瀬川が流れている。

川を越えると野尻村、野尻村には北ん庄と
呼ばれる未解放部落がある。

高井町と菱田村、野尻村を合併して、来年
春には市制を発足させようとする問題がお
きている。

舞台上手に、酒、調味料、乾物類を商う小
さな、しまの店。

店の一隅に立ちのみのカウンターがあり、
店の土間に続く部屋が上手袖に一部分見え
る。

舞手下手、バス停からの村道に電柱が一本
合併反対の青年団のポスターがはってあ
る。

幕があがると、――

とき

昭和三十年代の始め頃
登場する人

中村しま

中村和枝 (しまの娘)

中村美枝 (和枝の妹)

岡田正夫 (和枝の恋人)

吉岡 (青年団長)

北野 (北ん庄の青年)

北野の妹

梅田

老婆

中年の女

若い母親

和枝の女友達

大阪から郊外電車にのって、二十分位の田
園都市、高井町。そこからバスで五つ、六

和枝 そうですとも！

バス停の方から動め帰りの吉岡が来る。

和枝 あ、吉岡さん、今お帰りですか。

吉岡 ああ。(小脇にかかえた封筒から印刷物
を一枚抜き出して)昼休みに組合事務所
で印刷してきたんや。これ、この前の青年会

で正夫が報告した、合併問題の資料。(和
枝、受けとって、目を通す。吉岡も一枚
別の印刷物を渡す)それから、これは部落
問題の資料。

和枝 ありがとう。(サッと店の棚に置く)

吉岡 それ、水平社宣言や、感動的やぞ。次の
集りまでに読んできてな。

和枝 はい。……でも私……

しま 縫い物の手を止めて、話に気をと
られる。

吉岡 この前の集りの時、俺が北ん庄の友達
に、今夜の盆踊りの音頭とりを一人応援し
てくれと頼まれて、正夫にいつてもう話
をしたら、反対意見が、二、三あったね。

こんなこつちや合併問題、おやじ連中と同
じやないか、近くて遠かった部落問題、取
り組まんとあかんわ。だから次は、北ん庄
の青年に来てもらうて、交流会をしよう

いうことに決ったやないか。反対？

和枝 ううん、そうやないけど。近所の人が

私のこと、「女の子やのに、よう出て行か
はるなあ」、言うてはるらしい。

吉岡 うん。たしかに僕らの村、まだまだそ
んな空気が強い。

和枝 お母さんも「たまには青年団、勘忍し
てもらいーって。

吉岡 女が女がって気にしてたら、何にも出
来へんぞ、男でも結構風当りきついんやか
ら。生意気やとかアカやとか。

和枝 ……うん。

吉岡 正夫なんか、西河の関係でおやじが合
併に賛成してるのに、家んな中で、あいつ一
人やぞ、反対やとハッキリ言うてるのは。

しま 和枝、急ぎもんじゃないのか。

和枝 はい。(自転車を押して店からちよ
つと離れたところ吉岡を手招きする)あれ
ですねん。比頭特にうるそうなつて。

吉岡 お母さん、許してくれはったんか、結
婚のこと。

和枝 (首をふる)式をあげてしもうたらあ
きらめると思う。

吉岡 無茶やなあ、それは。正夫も早いこと

結婚したいと言うてるし、僕からお母さん

に話をすると言うのに。

和枝 あんなわからずやお母さん、何を言
い出すかわからへん。私は今月中にも式を
あげたい。青年団で会費制の結婚式の第三
号、みんなでお願います。当日になつて
お母さんに招待状渡すから。それしか方法
がないんです。

吉岡 お母さん、どうしてそんなに強硬なん
や。

和枝 ……わかりません。

吉岡 わからんやなんて、君……。君、ちょ
いちょいわからん時あるなあ。

しま、店の土間へ降りてきて、外の様子
を気にしながら、カウンターのあたりを
拭いている、和枝のおいた青年団の印刷
物をとって読むふりをする。

和枝 私が？(笑う)私はこんな人間です。

吉岡 はぐらかすなよ。春の演劇祭の時
も、自分からお婆さん役がやりたいてい
い出すんやもん。誰でもあの娘役がやりた
い筈やのに。

和枝 正夫さんも怒つてた、あの時。

吉岡 芝居のサークルでないから僕はだまっ
てたけど、気にかかるよ、君の態度。

和枝 ベコちゃんがりやりたいって言うてはっ
たんやもん、私、人が喜んでくれるのな
ら、大抵の事先にゆずってしまうわ。そう
いうたちなんよ、気にせんといて下さい。

吉岡 ふうん。誰かが正夫君を好きになっ
ても。

和枝 それだけは絶対！

吉岡 そうか。

和枝 だから結婚式！

吉岡 男は反対されても覚悟してしもうたら
それ迄やけど、君んとこお母さんだけや
し、青年団で勝手にちゅうのはなあ。

和枝 でも私……。

吉岡 よし、正夫と相談してみる。来月にな
ったらいつも就職出来るから生活の方は
何とかやっつけていけるな。今夜は正夫と盆踊
りに行くことになつてから、あいつの家
へ行ってくる。

和枝 あの人、行くかなあ。

吉岡 え。

和枝 正夫さん、小学校の時分ね、上級生と
いっしょになつて川向うの子供と喧嘩した
ことあるらしいわ。こつちの盆踊りを、北
ん庄の子が見に来たいうて、
吉岡 そんなこと、あいつ！。

しま (外へ出て来て、吉岡に一寸会釈) 和
枝、行ってごうか、それ。

吉岡 ああすんません、これ、配つてから、
あいつの家へ。

和枝 しらんよ、今の話。

吉岡 次は君もきつと来てくれよ、頼む。

足早やに去る。

老婆、吉岡の後姿をみて、一人で合点す
る。

しま 和枝。

和枝 いってきまーす。(老婆とすれ違っ
て、「今晚わっ」と声をかけて自転車去
る)

老婆 愛想のええ姉ちゃんやなあ、誰にで
も。
しま あ、今のんは青年団の部長さんですが
な。うちの子はほんまに……。

老婆 (照れかくしに笑う) わてはええ限し
てるさかいになあ。耳も遠いし、もうどこ
もかもあきまへんわ。吉岡はんの息子やっ
たんかいな。けど、ここの姉ちゃんはんはほん
まに気易い人や。醤油一本でも「へ、じき
に持ってきますっ」いうて。そやさかい
此頃はうちの近所でも、みんなこの店でっ

せ。「坂田屋」はあかん、昔からの店やお
もうて嫁さんが大きい顔して。

しま おおきに、お蔭さんで。

老婆 あ、これ、回覧板、また川向うといっ
しよになる話や、ベタツブひとつおくんた
はれ。

しま へ、どれがええか見てくれはりまっ
か、(老婆、しまについて、店に入る)

老婆 ああ、ああ、よっころしよっと。(店
の間にべつたりと腰をおろす) ああ、今年
の夏は、えろうおましたなあ、次郎やんも
死んだし、お君さんもいってしもうたし。

しま まだまだお婆ちゃん。

中年の女 がやってくる。

中年の女 今晩は。

老婆 あんたこの留さん、中風はどない
や。

中年の女 へえ、お蔭さんでぼつぼつと。

老婆 そうかいな、まだ具合悪いのん。若い
のになあ、可哀相に。

中年の女 いいえ、うちは二人で一生懸命お
念仏唱えてますよつて、もう治るにきまっ
てます。

老婆 (つくづく) あんたえらいやせたな
あ。今度ちよつと神さんかえてみたらどう

や。

中年の女 神さんと違います。かえるやなん
で、罰あたりまっせ。

老婆 神さんも仏さんもいっしょやがな。御
利益のある方を信心したらええのに。

中年の女 邪教を信じる者は絶対に救われし
まへんのや。(しまに) 古い人はあきまへ
んねん、頭のきりかえが出来へんから。こ
れからは何というても若い人やないと。
しま ああ、何にしましよ。

中年の女 いえ、今日はな……。

老婆 この人の用は決つてますがな。(中年
の女に) 法蓮華経やがな……。そやる。あ
んたはどない言うてんのや、ああ、ほれ、
川向うのこと。

中年の女 うちらは賛成や、反対やて、アカ
みたいなこと言わしまへん。

老婆 なんやねん。

中年の女 反対、反対ちゅうのは、アカです
がな、青年団の。

老婆 そうやがな、青年団はしつかりして
る。今更のことでは、わしらといっしよ
や。

中年の女 (しまに) アカは宗教ちゅうもん
をアタマから禁止してますねん。私らが折

伏にいつてる時、二、三人で原爆のお金と
りにきて邪魔しましてな、あんなのがさ
ばつたら、国は滅びてしまいまっせ。氣い
つけはらんと。青年団はアカの吉岡に影響
されてますねん。

老婆 あの子はえらいがな。大阪へ働きに行
つてる時分に知り合つた娘はん連れて帰っ
て、おやっさんに反対されたら家とび出し
て、二人して工場へ働きに行つてるがな。
仕事が好きやという人間は、あかんねん。こ
ないだ、高井町から孫つれて、バスにのつた
ら、二人が席かわつてくれてな。跡取りや
のに、田んぼはいらんいうて、欲のないえ
え子や。

しま まあ、そうでつか。
老婆 今日び御時勢が変つてるのに、おやっ
さんもええ息子手離したもんや。川向うの
娘が嫁にきたわけやあるまいに。

中年の女 あんなことで若い人らの人気がつ
て。おたくの姉ちゃんも氣いつけはらん
こと。
しま 自ら、アカやの川向うやのて、どない
なつてるのかわからしまへん。

中年の女 そこですがな。前世で悪い因縁を
背負うてる者ほど正しい信仰をせんあ。お

ばあちゃん、目の悪いのんも信仰の力やな
いと治れしまへんのやで。私らほんまに他
人のために一生懸命教うてあげたい思
うて。

老婆 へえへえ、おおきに。あんたも百姓や
さかい、川向うといっしよにならん様に、
もつと力入れてくれんとあきまへんあ。
しま みんな仲好ういくのが一番よろしいの
やろ。

中年の女 今晩七時から、私とここで集ります
ねん。姉ちゃんといっしよに、ほんとい
つべん。な。

和枝 和枝が帰ってくる。

和枝 一本割れてしもうた。(割れた酢のび
んを片付ける)

しま いらんことばつかり考えてるさかい
や。

和枝 いらんことばつてなに？

中年の女 姉ちゃんも、ええ人といっしよ
に、遠慮することあらしまへん。

和枝 これでつか？(手を合わせて) 堪忍し
て。

中年の女 あの橋のところで、こないだの晩、
おそうに。そうでつしやろ。

和枝 私、宗教には関心ありませんねん。

老婆 (笑う) あんた吉衛門さんとも、お妙さんとも、安さんとも、よわってたでえ。

中年の女 (キッとにらみつけて) お婆ちゃん、人間どんなとこでトンコロリンといてしまいかかりまへんねんで。又出直しまっさ。

和枝 もうその御用だけやったら、結構ですんませんけど
中年の女 ま、(にらみつけて帰る)

老婆笑う。
老婆 あの人、昔は可愛らしい可愛らしい顔してたのになあ。

和枝 いやな人、三回目やわ。
老婆 嫁にきた時分から根っから百姓が嫌いでな。此頃はホーレンゲッキョーばかりや。(フト思い出して) トンコロリンとい

く言うてましたな。ほんまでっしやるか？
和枝 気にせんときはあったら。元氣そりやにお婆ちゃん。

しま ほんとはんと。
老婆 (和枝に大げさに見とれて) まあ、やつぱり違うなあ。色は白いし、べべかてスキツとして……。大阪から来た人はどことう垢抜けしたはる。

で。印鑑証明や、税金や、予防注射やいって、半日がかりになってしまわ。
しま そんな事で反対してはるのんと違う、村の人は。

和枝 ダムの事やる、あの早瀬川の上の方に作る。そらそうやと思わ。市になったら多目的ダムを作るといふ計画らしいけど、結局発電所のためのダムやないの。農業用水も、工業用水も、水力発電もというて

けど、結局、発電所が一番先に水をとるんやもの。赤字赤字いうて、なんでそんなダムを作らんならんの。
しま 違うがな、百姓の人らは、野尻村に、北ん庄に水をとられるから……

和枝 お母ちゃん、合併問題ちゆうのはそんな小さい事と違うわんで。今度の合併は全国的な規模で、上からの命令をスーッと通りやすい様に組み直さういうことやで。何でもハイハイ言うてたら、又戦争になっ

てしまわよ。
しま 阿呆かいなこの子は。
和枝 本当や。

しま ようそんなええ加減なこと。
和枝 よそことみたいに思わんとって。朝鮮戦争が終ったん、つい三、四年前やない

しま (満更でもない) いいえエ。こんなお転婆。
老婆 こうつと、何やったかいなあ……あ、ベタツプをひとつ。

和枝 はい。さいっこのケチャップでっせ、三十円。
老婆 そやそや。ケタツプやがな。こんなもん、穴のあいたうどんにかけて、何がおいしいのやろ。ほんなら回覧板忘れん様にな。

しま へえ、おおきに。
老婆 (外で) ほー、ええ風や。こら今晚はよう寝られるわ。(口の中でもぐもぐ念仏を唱えながら考える)。

和枝、回覧板に三文判を押す。
しま なんほいやなお客さんでも、あないにはつきりものを言うたらあかん。

和枝 でも嫌いやもん。
しま それみてみ、橋のところで会うてるのんみんな知ってはるやないか。

和枝 かまへん、うちは。
しま もうええ加減にしときや。この村の人、みんな反対や、合併。

和枝 あの人のおじさんは、合併運動の先頭らしいよ。
の。隣の国でやで、うちの子供の時までに、アメリカに家を焼かれて、親を殺されて、ひもじい思いをして、母親のふところを抱かれた赤ちゃんまでもが……いや、お母ちゃんも見たやないの。あの新聞の写真。うち、あの写真思い出したらゾツとす

る。
しま (呆れて) 合併したら戦争がおこるやで、それは、吉岡はんの意見やな。ようそんな阿呆なことならいに青年団へ行ってるこっちゃ。女の癖にしょうむない理屈ばかり。
和枝 うちが青年団へ行つてよかつたと思ってる。

しま 正夫はんとの事は絶対許しまへんで。
和枝 (サイダーを口のみにする) 関係ないわ。
しま 何ちゆう行儀や！
和枝 青年団は止めてもええ。けど正夫さんとは別れへん。

しま 和枝！
和枝 (酢のびんを一本とって) おそうなつてしもうた、怒ってはるわ。(自転車にのって) 美枝おそいなあ。夕立になるよ。去る。

しま 村会議員の西河はんかてな。
和枝 村会議長や、正夫さんのお母さんの兄さん。

しま ふうん。
和枝 でも正夫さんは反対や。
しま それみなはれ、青年団も反対やろな。

和枝 そりや、私も反対してる。(回覧板を示して) この菱田村と高井町と野尻村を合併して、来年の春までに、市にするという計画。工場よんできて、税金もふえる働くところも増える、道路もよくなる、と何もかもよくなる様に書いてあるけど、実際は、どこの役所も赤字やから、学校や保健所や役所や役所で働らいてる人をへらして、税金を値上げして、赤字をなくそうという事なんや。(吉岡の渡した印刷物を一枚だけ示して、もう一枚は小さくたたんでポケットにしま) これ、あの人や青年団の調査

広報部やから調べてきたんやけど。今迄に合併のすんだとこ、殆んど値上げしてるよ、衛生費も、役所の文書料も。
しま そんなもの、しれてるがな、値上げしても。
和枝 何言うてんの、この村の役場が無くなつたら、バスって、高井町まで行くのや

しま 洗った美枝の運動靴をとり入れる。
美枝は美枝で、夏休みやというのに、野球ばっかし……。
バス停の方から帰ってきた北野、電柱にはってある青年団の合併反対のポスターをビーツと破って、くるくるつとまるめてビヨイと棄てる。

北野 御苦労はんなこっちゃ。一丁あがり！
しま あ、北野はん、
北野 (ニヤリと笑って) まだ仰山残ってるで。(店へ入って) 元氣の出る水のまして。

しま 長いこと顔見しまへんでしたな。
北野 うん、和歌山のダムで、これや(スコップを使う身ぶり) ビール。
しま (ビールを注ぎながら) ま、和歌山の。

北野 おまん、ま、しばらく見えなんだに。(ニヤリと笑う) どや、うまいやろ。(ビールをのむ) ウワーツ、しびれる！
しま なんしゃってんない。おまんもよー
北野 (二人笑う) あれ、紀州かいな。
しま へえ——、まあな。

北野 姉ちゃん、大阪から来た言うとったで。
しま へえ大阪にもいてました。若い時分。

北野 和歌山のどこらへんで獲れたん。
しま どこでもよろしいがな(電氣をつけ
て、浴衣を片付ける)

北野 お、イキな柄やなあ。

しま へえ、和枝が盆踊りに着るいうてな。

北野 ああ、こっちは、わしとこらよりおそ
いからな。

しま 兄ちゃん、ダムは危のうおまっしや
ろ。気いつけはらんと、うちの主人ダムで
死にましてんで。

北野 ええ！ どの？

しま 三谷ダム。

北野 ああ、あれかいな。今やっているとこ
の、前のダムや。マイトでドカンやった
な。

しま (うなづく) まじめな人やったから：
…一番先に入ったいうて。

北野 危いことさせやがって。ドッカーンと
やって、じきに「入れっ」ちゆうから、不
発にやられるねん。穴のあいた長靴位に
思うてやがるから、ほんまの話俺なんか
な、いっちゃん、ドンびりに始めて、止め
る時は、一番槍や。仕事みたくないもん、ゼ
ニコ以上にやったる事あらへんねんで。
しま まあ。うちの主人は、何でも人さんさ

え助かるのなら、自分からいやな仕事を引
き受けんとあかんいうて。

北野 (カウンターの上有る青年団の印刷
物をヒョいとつまんで) おお、おお、仰山
漢字ならべて、(スイと落して) 青年団ま
で反対しよらんかいな。

しま (印刷物をうしろの棚へ置いて) 和枝
はわけのわからんことばっかり……。

北野 デポチンがおったら、イチコロやのに
なあ、ほんまの話。

しま デポチン？

北野 うん、デポチンいう奴や。俺といっし
よに、その川のずーっと下の方のどて作
ったことあるねん。この村の高校生で、
イトに来とったんや。冬のなあ、コチョコチ
に寒い晩や。みんなキチガイ水で暖もりな
がら、ホイサ、ホイサやってたときな、ま
わってきたコップ、隣のオヤジにちよっと
渡したら「お前のだだけは遠慮するわ」
とこうや、俺もうトサカにきたで。ほいた
らデポチン、バツと取って「みんな同じや
ないけえ！」いうて、キュッとあけよっ
た。俺、中学の時分から、これ(呑む)強
かったもんな。
しま まあ——。

北野 なんも、びつくらこかんでもよかちよ
のバイ。

しま (笑う) 英語でつか。

北野 それからや、デポチン、わしらのこと
いろいろききよるわけや、俺、学校の先公
と違うで。プツプツ言うてるひまがあった
ら、いっぺん一番電車の時分に駅へ行って
こいや言うたんや。

しま 駅へ？

北野 うん。行きよった、あくる朝六時頃。
背広組やら、制服組が巣から出てくる前や
がな。長靴に、地下足袋や、日雇いと失対
とヤミ屋と屑屋や、それしかないのがわし
らのとこや。

しま 何も恥しいことおまへん。ちゃんと働
いてるねんから。

北野 デポチン、唸ってしまいう言いよった
な。デポチンがおったらこの青年団、合
併反対やなんて言えへんで。

しま 青年団なんか、知れてますがな。たっ
た四十人位(回覧板をみせて) こんな事は
上の人にまかしたいたらよろしいねん。ほ
れ、もうちゃんと決ってますねん。

北野 (回覧板をみて) 総理大臣も、こうい
う問題については俺のとこへきぎに来たら

ええのにな。何でも教えちやるで。(回覧
板をしまに返す)

和枝が女の友達と話しながら来る。

和枝 そう。青年団へ出てこんようになった
と思うたら、そんなことやったの。

女の友達 フフフフ。

北野 おばちゃん、もう一丁。(しま、ビー
ルの栓をぬく)

女の友達 今夜彼がくるんよ、急に決ったで
しよこの話。お茶とお花と洋裁と和裁と料
理学校で、メッタクタ忙しいね。ほれ、
此頃畑の方も出てへんから、白うなつたで
しよ、手よかつたわ、彼と決って。百姓な
んで、サラリーマンからみたら、馬鹿みた
い。毎日毎日まっくらけになつて。あれ、
頭のある人間のする仕事？ 彼「家におっ
て、僕のことだけかまってくれたらええ」
って言うんよ。

和枝 ふうん、待ってるだけ。(店に入る)

女の友達 ……？

北野 よ。

和枝 (しらぬ顔をして) お母ちゃん、回覧
板もって行った？

しま あ、ちよっと行ってくるわ。(去る)

和枝 (友達に) 特級酒一本やね。

女の友達 あんたも決ったんやてね、正夫さ
んと。あの人、今年も原水禁のキャンパ集め
に来はったわ。好きやねえ、あの人ら、あ
んなこと。あの人のおじさん、村の有力者
やのに、アカみたいなことしてえてえのか
しらん。

和枝 あんた、原爆落ちてもいいの。

女の友達 あんたも変ってるわ。(笑う) で
もいいやないの、まじめな人やから。式の
日決つたらしらせて。青年団の人にも久し
ぶりに会いたいし。

和枝 まだ決ってないわ、そんなこと。

女の友達 団長さんね、川向うの人と歩いて
はったよ、あの人、あっちと違う？

和枝 あんたの方がよく知ってる筈よ、村の
こと。

北野 チェッ。なすびのヘタみたいな顔しや
がって。

女の友達 え！

和枝 はい、千円。もって帰ってね。

女の友達 ひまな時遊びに来てね。ああ、こ
わ。(走り去る)

北野 ねえちゃんの友達やなかつたら、これ
やけどなあ。(足払いをかけるまね)

和枝 うちの店で喧嘩したらいや。久しぶり

北野 なんも、びつくらこかんでもよかちよ
のバイ。

しま (笑う) 英語でつか。

北野 それからや、デポチン、わしらのこと
いろいろききよるわけや、俺、学校の先公
と違うで。プツプツ言うてるひまがあった
ら、いっぺん一番電車の時分に駅へ行って
こいや言うたんや。

しま 駅へ？

北野 うん。行きよった、あくる朝六時頃。
背広組やら、制服組が巣から出てくる前や
がな。長靴に、地下足袋や、日雇いと失対
とヤミ屋と屑屋や、それしかないのがわし
らのとこや。

しま 何も恥しいことおまへん。ちゃんと働
いてるねんから。

北野 デポチン、唸ってしまいう言いよった
な。デポチンがおったらこの青年団、合
併反対やなんて言えへんで。

しま 青年団なんか、知れてますがな。たっ
た四十人位(回覧板をみせて) こんな事は
上の人にまかしたいたらよろしいねん。ほ
れ、もうちゃんと決ってますねん。

北野 (回覧板をみて) 総理大臣も、こうい
う問題については俺のとこへきぎに来たら

やねえ、ビイちゃん。

北野 ビイちゃんと違うというのに。

和枝 十二月三十一日に生れたから、ビイチ
ヤンやて、自分で言うたくせに。

北野 親がビイビイ言うてたからな。けど女
の子らオットコマエのキイちゃん、言うけ
どな。ジェームスデイーンに似てるねんと
(ちよっと様子をしてみせる)

和枝 (笑う) わあ、幻滅！

北野 ねえちゃんの結婚の相手、俺よか男前
か？

和枝 あつたりまえよ。でも結婚出来るかど
うかわからへん。

北野 あわてて、ツガイにならんでもええ
よ。男には気をつけんとあかんぞ、俺が保
障するわ、ほんまの話。

和枝 そんな人と違うわ。お母ちゃんが封建
的やからいかんのよ。

北野 親が反対したかて。ややこの顔を見た
らホタホタツとなるよ。

和枝 嫌い！ (カウンターの向うにまわっ
て、ビールをつぐ) ねえ、キイちゃん、あ
の橋のこと、どうして妻が恋しい橋という
の。

北野 しらんなア、戦争中兵隊に行く男があ

の橋で、ヨメはんと別れたからと違うか、
なあんで。

和枝 それなら夫が恋しいとあの橋に立って
しのんだのやね、若い奥さん。ずーっと昔
は、夫のことをツマというたんよ。

北野 夫婦のことは、ツマツマか。俺もそろ
そろツマになろうかなア。

和枝 (笑って) ヒゲもないくせに。
北野 アネキぶるなよ、一つ違いやないか。
俺今年成人式には行けなんだけど、立派に
資格はあるねんで。

和枝 あら、ポマードの匂いブンブンする、
散髪してきたんやね。

北野 今夜は腰のタガが外れるほど踊ってこ
ましたろ(立ち上って踊り出す)月が出た
出た、月が出たー、ヨイヨイ。よし、今
度はヒゲ生やして帰ってくるぞ。

和枝 どこへ行ったん。

北野 ダムや。三池炭坑の……。

和枝 キイチヤンが羨しい。

北野 なにが。(踊りを止めずに)

和枝 あんた、フーッと消えてしまいたい様
な、そんな思いをしたことなんか、ないで
しょ。

北野 あらいでか。思うだけ損、損と。

和枝 サイダーをのんで考えこむ。

北野 何や、シケた顔して。団長さんの彼氏
に会いたいのか。

和枝 団長は吉岡いう人よ。

北野 え？ デポチンか？ デポチンが合併
反対なんて言うてるのか？

和枝 そりや、合併してダムなんか作る必要
ないもの。

北野 ダムはいかん、合併は賛成や。二本立
てにしたらええねん、ほんまの話。

和枝 今夜団長さん、あんたんとこの盆踊り
に行きはるわ。

北野 ほりかいな。兄貴に説教したろ。

和枝 早瀬川の上の方に作るらしいよ。ダム
のこと教えて。

北野 卵やき作るようなわけにいかんで。俺
なんかダムでも堤防でも何でも作ってき
たんやから。わしらがおらんたら日本、

こんなに復興したらんわ、ほんまの話、え
？ 早瀬川にダム？ ほんまことしたら
わしらの村、堤防もないのにいっぺんにや
られるがな。ダムちゅうのはな……。

北野、身ぶり手ぶりを入れて大熱演。
しま、梅田といっしょに来る。

梅田 百姓ちゅうのは、あきまへん。今年も

きゅうりやトマト、農協へもって行って

も、ただみたいな値や、仲買いに叩かれっ
放しや。農協こないだまでは、米の供出米
の供出いうて、強制的に割り当てて、わし
ら、いじめてからに、あいつらは商売人や
ら、役所の味方で、百姓の味方はしてくれ
へんのやから、あんた。一杯頼んまっさ。

しま 奥さんに許可もろうてきてしまへん
で。

梅田 いや、今夜はいっちょ、農協の集りで
言うてこましたろ、思うてあんた。

しま お酒が入らん時に言いはらんと。

梅田 わしはな、酔うても性根は失なえしま
へんで、(店へ入る) 理事長の西河の奴に
横槍入れたる思うて。

和枝 話を止める。

しま へーえ。(酒を注ぎながら、和枝と顔
を見合わせる)

梅田 (なめる様にのみながら) 百姓はあき
まへんわ。あいつみたいに、早いとこ足を
洗うて、農協を足場にして出世した奴には
かないまへん。西河はあんた、代議士の大
川の腰ぎんちゃくやさかいに、合併の音頭
取りして、点かせいでますねんがな。

北野 西河ちゅうのは、キレもんやな。

梅田 (ギョッととして) ええ？ 西河はんの、
身内でッか。

北野 ヒエッ！ 名前きくのんも始めてのア
カの親戚ですわ。

梅田 びつくりしまんがな、ダムみたいなも
ん作ったら、あんた。――

北野 ワヤクチャや、ほんまの話、俺、知っ
てるねん。ダムちゅうのはな、雨が降らん
でも大水になる仕掛けですわ。

梅田 ええ？

北野 上の方で。風呂の水ひっくり返した様
な雨が降りまっしやろ、ダムは満タンにな
るわねえ、危いからビューンと栓をぬく。
ポチューンともしずくの落ちてこん下の方の
村、海水浴や。

梅田 ほんまでっかいな、あんた。

北野 それであんた、ダムの責任者、(首を
吊るまね)これやりましたがな。下の方
川で魚つってた人らが、アッチゅう間に、
水増えて潮れてしもうたんや。えらいこっ
ちやつたがな。

梅田 へーえ。ええ事教えてくれはった。

北野 早瀬川にダムみたいなもん作られたら
わしらかなんなあ。

梅田 ほんまだっせ、あんた。(しまに)こ

の人に一杯ついでげとくんははれ。

北野 俺、米のジュースは嫌いやねん。

梅田 (酔いがまわっている) いや。一杯い
きまほ。(しまに目顔でしらせる。しま、
別のコップに注ぐ) 農協でみんなに喋った
らんといかん。

北野 俺、合併は賛成やな。

梅田 兄ちゃん、そらあきまへんわ、あの川
はわしらの川やさかいに。

北野 川は天下のもんや、いつあんたらが買
いしめたんや。

梅田 水は百姓の生命や。これとられたら、
わしらはあんた。――

和枝 あの川の水を使うてる工場も困るわね
え。吉岡さん、十河製紙につとめてるの
よ。

北野 それみいな。あいつはダムが反対ちゅ
うことや。

梅田 実はそれだけおまへんねん――。

美枝 お母ちゃん、百円。

しま この子は――。

美枝 (ソフトボールの道具を放り出して)
早よう、百円。今から高井町まで行ってソ
フトボール買ってくるねん、皆待ってるね

ん、バス停で。

しま 男の子みたいに野球野球で……。(百円
を渡す)

美枝 野尻中学でソフトボールの親善試合や
ったら、ボールが五こも足らへんのや。応
援団の男の子にきまってるわ。お富さんの
歌なんか歌うて、北ん庄の子、あの子らに
きまってるわ。(走り去る)

一同、あっけにとられる。

梅田 (北野に) な、あれでツヤやろ、あ
いつらといっしょになったら、何をされるか
わからへん。北ん庄の方が上にあるちゅう
て、水を先に横取りしよるに決ってます
わ。

北野 (酒のコップを押しやっけてこれ)、わ
しいらんで。

しま 梅田はん、もう農協へ行きはらんと。
それ以上酔いはたらあきまへんわ。

梅田 (かなり酔っている) なーん、酔うて
るかいな。わしや正気や(しまに) な、あ
いつらがあかん証拠に、結婚してから身許が
パンて、あの川へとびこんだ奴がおりま
んや、どこへ行ってもあかんのやから。

(笑う。和枝のところへフラフラ寄って行
って) ねえちゃんかてあっちの人間に嫁に

くれ言われたら。

和枝 棒立ちになつてゐる。

北野 (梅田が和枝の肩に手を触れかけたのを払いのけ、コップの酒をいきなり梅田の顔にぶつかける) おい! 頭ひやせ!

梅田 あつ! なにをするねん!

北野 すまなんだの。涼しいなつたやろ。これから暑いつけてものを言うてくれよな。

梅田 あんたは——!

北野 おう、北ん庄や。わしら人の死ぬのん笑ごにできん人間や。

梅田 すんまへん、知らなんださかいに……

(しまに) ほんなこれ、三杯分(金を置

く)

しま (梅田の服を拭きながら) えらいすんまへん。(北野に) 兄ちゃん、こらえとくれやす。

北野 (五十円玉をひとつ投げる) おごつていらんぞ。

梅田 あゝ、勿体ない、なにするねん、五十円も。(あわててさがす)

北野 にわたりのケツでも追うとれ。

しま 兄ちゃん!

梅田 (金を拾つて) なに! (外へ逃げる) チョッ! けつたくその悪い! (去る)

北野 おばちゃん、酒の分、俺払うで。

しま いらまへん。あんたかて気が悪いのん。

北野 おばちゃん、なんで俺怒れへんの。

しま 喧嘩したらあきまへん。嫌われたら損や。

北野 (和枝に) すまん、ねえちゃん。けど

菱田村のドン百姓だけはトサカにくるわ。ダムへ行たらな、その点気楽なもんや、あつちこつちから来とるもんな、とつころが

今年、この村から五人、わしらの飯場へ来よつたんや。そいつらがこないだの大掃除の時、俺の子分つかまえて、「お前は便所

掃除やぞ。お前ら馴れとるからくさいことないやろ。」吐かしよつたんや。子分、ほ

うれん草みたいな顔してふるえとるんや。俺、丁度そこへ行つてな、「よーし、や

たるわ。その代り、この雪隠使いやがたたら承知せえへんぞ。」言うたんや。五人

ともゆでたまご、喉につかえたような顔しやがた、とうとう今度の番はあいつらが

するから言うて謝りよつた。なあおばちゃん、臭いもんは誰がやつても臭いわい。

しま そうですとも。

北野 わかり過ぎてるがな、おばちゃん。勘

狂うわ。(千円札を出して) これでとつて

んか。

しま あらま、ピンピンや。(千円札をちよつと拝むようにして) おおきに。

北野 妹に月謝もつて帰ってきたんや、野尻中学や。(ニコッと笑う)

しま ……。

北野 ねえちゃん、今度帰つてくるとき、結婚祝いに、こーんないのしし獲つて帰つたわ。

しま はい。ビール二本分もろうときます。(無理につり銭を渡す)

北野 (ポケットを叩いて) 忘れへんで。ア

バヨ(外へ出て) 星がひとつも出てへんで

しま 気がつてな。(見送つて)

北野、死んだ筈だよ、お富さん生きていたとは、と歌いながら去る。しま中へ入る。

和枝 伝票を教えて、算盤を入れる。

北野 キイちゃん、阿呆や、あんな事で怒るなんて。

しま 美枝も、美枝や。

和枝 あんなことするから「北ん庄は」って

言われるんやわ。

しま 梅田はんがいかんねん。和枝、この村の人らの本音はああいふことや、わかつたやで。

和枝 大丈夫。あの人が先きになりはつたんやもん。私がね、始めて青年団に入った日

「若い人よ、集れ。ともに語り、ともに手をつないで、民主的な村づくりをしよう」というポスターをみて来ました」何や

の、その目。「これからは女性も、世の中のことを勉強していかんと、ほんまの民主

々義になられへんと思つて、仲間にしてもらいに来ました」言うた私の挨拶が、ク

ツと来たんやで、また、その目、三角にして。昨年の秋に青年団のハイキングに行つ

たやろ、あの時の帰り、二人だけで喫茶店へ行つたんや、その時言いはつた、一目惚

れやで。あの人、クリュームソーダ! おごつてくれはつた。「クリュームソーダ! ごめん

んな」って。私、ジーンとしてしもうた。

しま しょうむない!

和枝 わからへんのや、お母ちゃんには。

しま 阿呆らしつて。

和枝 (サイダーをのみながら) お母ちゃん、あの人の歌、一辺聞いてみて。昨年の盆踊りの時、江頭哀歌なんか、さいっころ

やつたわ。すつごく、男性的。頭のとつべ

やる。

和枝 正夫さんは違うよ。

しま 嫁入りしてから返されたやなんて、ようそんなむごいこと。娘に死なれた親御さんの気持は、どんなんやろ。

和枝 私は死なへん、私が死んだら美枝の一生まで台なしにしてしまふ。私は美枝のためにも、あの人と結婚せんならんや。

しま 和枝。お父さんが死なはつたとき、あんたがとめてた酒屋の主人が、「あんたとこらの葬式変わつてゐるな」言いはつて帰つてきて泣いたな。あれでお母ちゃん、決心したんや。うちには二人も娘がいてる。どうせ苦勞するのやつたら、一層のこと——と思つて、お父さんの死なはつ

たお金と、親せきの借金とで、この店開いた。お蔭さんでポツポツ借金返せるようになったと思つたら、合併の騒ぎや。こんな最中に、正夫さんとのことは無理や。つ

らいやろけど、エライことにならんうちに

あきらめて頼むわ。

和枝、スツと立つてサイダーを取つてくる。

しま おじさんは話のわかつた人でも、家の人がどんな人かわからんやないか。

和枝 私、正夫さんとこへ行つたよ。両親にも、お兄さん夫婦にも会うたもん。

しま いつ!

和枝 一週間程前。正夫さん、二男やから、どうせ独立せんといかんのよ。五反百姓やもん、分けてもらわれへん。お母ちゃん、絶対に内緒やで。あの人お小遣い、月に五百円位よ。せめて千円欲しいなあ、言うて

はつたもん。お酒もビールもめめる身分と違ふんよ。お父さん、「こいつには何にも

やれんけど、それでも承知か」言いはるのよ。「そんなこと気にしてしません。二人

で働いてやつていきます」言うたら、「それ聞いて安心した、正夫はおとなしい

から、あんたみたいな娘はんならまかしとける」って。フフフ。

しま 親に相談もせんと、ようそんなこと。

和枝 お兄さんのお嫁さんおね、一早ようい

つしよになりなさいねつて、正直なところ

あの人が厄介なんよ。それでね、正夫さん、吉岡さんの工場が今月の末に辞める人

がいるから、米月から入れることに決つたんや。七千円もろうたら、何とかやつていける。私がこの店へ手伝いに通うから三千

円位頂戴ね。

んから足の先まで、ビビッと電氣通つた
みたいな歌い方。

しま へーん。

和枝 馬鹿にせんといて。あの十河製紙へ
つとめるの、吉岡さん達のやってる組合づ
くり助けるつもりなんよ。今年の原木禁の
大阪大会へも吉岡さんと行かはったし、二
度と戦争をおさんために、青年の責任を
感じるって、私ら小学校の時、教科書に墨
ぬったもん。あの教科書、今でももってる
よ、二人とも。「これからは女のひとも平
和の問題、考えてくれんとあかんぞ」っ
て。私、結婚するんは、こういう人でな
いと。

しま 川向うのことはどない言うたはるね
や。

和枝 ……気の毒やて。

しま いっべん、キイチちゃんにそない言うて
み、気の毒やて。

和枝 ……

しま 青年団みたいなもん、しょうもない、
止めなはれ、止めてしまいなはれ。民主々
義やとかへチマやとか、そんなもん信用せ
えへんで。正夫はんと結婚は、どうあっ
ても許さへん。

和枝 お母ちゃん。青年団へは、行くな、よ

その家へ遊びに行くな、友達を連れてくる
な、美枝には何にも言うな、するなするな
ばっかりで押さえつけてきたな。もうお断
りや。結婚だけは自分の意思で決める。た
とえ失敗しても、自分で決めたことや、後
悔はせえへん。……私は若いや、もっと
広いとこへ出ていきたい。私らの方からみ
んなの中へ入っていかんとあかんのや。

しま 私も若い時はそう思ってた。こっちさえ
心を広うにもつたらとな。けども鼻の先で
ビシヤリと戸を閉められてしもうた。何回
もな。

和枝 いいや、世の中は変わってるのや、変え
ていかんとあかんのや。お母ちゃんはこの
家の窓を釘づけにして、私らを閉じこめよ
うとしてる。うちがあの人と結婚したら、
お母ちゃんもきつと人を信用するようにな
つてくれる、世の中が違うて見えるように
なつてくれる。

しま それは夢や。

和枝 夢でもええ。あの人と結婚さえ出来た
ら……それから先の私の人生、思うだけ
でも目の中に虹が見える、こんなにも一人
の人を信じられる私の心を、美しいとは思

わん？お母ちゃん。

しま 結婚には戸籍が要るねんで。

和枝 うちら、もう引き返されへんのや。

しま え!!

和枝 あの人の子供を、身ごもつてもうた
んや。

しま ……それでサイダーばかり……。

和枝 堪忍、お母ちゃん。

しま ……お父さん、こんな時があるさかい

に、居つて欲しかったのに……。

和枝 お母ちゃん。

しま あの人を知つてはるのんか？

和枝 (首をふる) あの人と結婚させて。

(涙が溢れる)

しま だまつて奥へ入る。

和枝 お母ちゃん!

しま 傘をもつて出てくる。

和枝 どこへ行くのん。

しま 美枝迎えに。

和枝 ……雨。

しま もう店閉めなはれ。(出て行く)

和枝 パツと涙をふいて、戸を閉め、店の
掃除をする。

若い母親が頭に手拭いをのせてとびこん
でくる。

若い母親 ごめん、開けてちょうだい。

和枝 (戸を開ける) あらま、赤ちゃん、ぬ
れるやないの。

若い母親 卵ある？ 明日の幼稚園の遠足忘
れてたんよ。

和枝 はい。さいつこうに新しい卵ね。
10こ？

若い母親 助かったわ、今まで菜っぱの束し
てたんよ。子供のことなんかコロッと忘れ
てた。うちのお姑さんね、「わてらが嫁に
きた時は納屋の牛よか下やった、一番あと
からきたもんはそれ位に思うて暮してきた
んや」って皮肉たつぶり。私なんか此頃よ
うよう、拾い猫のタマよりちょと上。
(笑う) いつになったら大つびらに子供の
ことがまつてやれるのんかしらん。

和枝 (卵を渡す) でも幸せそうよ。はい、
八十円。

若い母親 (笑つて) うちの人がやさしいか
ら。結婚するのなら、絶対にやさしい人。

ね!

和枝 (皆中の赤ちゃんをのぞきこんで) わ
あ、いい匂い。私、この匂い好き、ほんと
にいい匂い。

若い母親 おっぱいの匂いよ。

正夫が外から店の中をのぞくが、客がいる
ので姿をかくす。

和枝 勇ちゃんは来年学校？

若い母親 それで困つてんのよ、一寸遠いけ
ど、高井町の小学校まで通わせようと思
うて。合併してあつちの子といっしょになつ
たりしたら、ガラ悪うなるでしよ。

和枝 ……そうやねえ。

若い母親 あんたも親になつたらわかるわ、
ありがとや。(走り去る)

和枝、戸を閉めて、カウンターの前へ小
さな椅子をもつてきて腰をおろし、ぼん
やり考えこんでいる。

雨が激しくなる。

正夫、戸を叩く。

正夫 和枝ちゃん、和枝ちゃん。

和枝 (とび立つ様に) 正夫さん! (戸を開
ける)

正夫 ちょっと出て来て。

和枝 今、私一人。入つて。

正夫 いいから。

和枝 (外へとび出す) 待つてたんよ。

正夫 (かたくなに) ここでもいいから。

和枝 ぬれるやないの。

正夫 かまへんこ、もう。

和枝 どうしたん？

正夫 こんな俺みたら、いやになるやろ。

和枝 (ひっぱりこむ様にして連れて入る)

あら、お酒のんできたの？

正夫 のんできたよ。

和枝 どこで。

正夫 ひとりにきまつてるよ。

和枝 (椅子に坐らせて) くるしいの？お水
あげましょか。

正夫 (椅子から立ち上つて) いいよ。

和枝 (笑う) なにしてるの。おかしい人。

正夫 おかしいよ、俺は。

和枝 (タオルをもつてきて頭をふいてやろ
うとする) まあ、グシヨグシヨ。気持ち悪い
でしよ。

正夫 (タオルをとりあげて) いいよ。

和枝 でも雨で助かったわね、盆踊りない
わ、きつと。吉岡さん、あんたの家へさそ
いに……。

正夫 留守やった!

和枝 あら、吉岡さんとこへ行つたん？

正夫 ……

和枝 私ね、結婚のこともあるし、……止め
ようと思つたの、青年団。

正夫 俺も止める。

和枝 あんたは残ってちょうだい。もつといろんなこと勉強してほしい。ほんとよ。

正夫 俺なんかも、どないなつてもええねん。

和枝 なに酔っぱらってるの。今日、お母さんに何も彼も言うたんよ。

正夫 義姉さんが実家へ帰らしてもらい言うて、俺の目の前へ風呂敷包み置きよった。俺のことなんかどないなつてもええねん。

和枝 ……ええ？

しまと美枝、帰ってきて家の中へ入りかけるが、中の様子を見て、しま、美枝を止める。

正夫 兄貴らを犠牲にして、僕だけ……僕には出来ん。おふくろは泣く、おやしは怒る。兄貴は一言も口をきかん。俺が何を悪いことしたちゆうねん。

和枝 私らのことを？ 私らのことで？

正夫 おふくろがあいつの家へ喋りに行ったからいかんのや。村会議長が調べやがったんや。(ポケットから封筒を出す) すまん……。

和枝 (それを取りあげて) 興信所！ それで、それであんたは……。

正夫 僕が……悪かった！

和枝 悪かった？ 今までのことを！ なかつたことに！

正夫、頭を垂れたまま、動かない。

しま、美枝、そつと中へ入る。

和枝 (正夫をゆさぶつて) 今までのこと、全部嘘やったん！ あんたはそれでいいのやね！

和枝、気が狂った様に雨、の中へとび出す。

美枝 姉ちゃん！

しま (封筒をとって) 何ですねん、これは。

正夫 ……すみません……。

美枝 (しまの手から封筒をとって) 西河種吉様……東洋興信所……

しま (封筒をひったくる) わかりました。帰りなはれ、帰つとくんはなはれ、和枝を連れて、家をとび出す元気がおまへのやな。

あんたみたいになに娘をあげるつもりは、はじめつからなかつたんです。帰つとくんはなはれ。

美枝 お母ちゃん！

しま あの娘は、あなたの子供まで宿してますのやで。この人でなし！

正夫 (強く) 和枝ちゃんが！ ええっ！

(叫ぶ様にして走り去る)

美枝 傘！ 正夫さん！ あ、川の方へ……

姉ちゃんはバス停の方へ行つたのに……。

しま (祈る様に) 死んだらあかん、和枝。

美枝 どうなつてんの、一体。

しま (我に返つて) 子供には関係のないことや、あんたはごはんだべて、さつさと寝てしまいなはれ。

美枝 (素早く手紙をとり上げて) なに、これ。

しま いかん！

美枝、さつと奥の部屋へ逃げこんでしまり。しま、へたへたつと小さい椅子に腰を落す

しま こうなると思うてたんや。和枝は夢をみて……。虹みたいな夢みて……。泥ん中へつき落されたんや。いつになつたらこんなこと……。(顔を掩う)

美枝 (奥の部屋から出てきて) なに、これ戸籍とろ本やないの。和歌山県南紀郡、父中村末男、母……。なんでこんなもんを、西河さんが……。

しま (坐り直して) 美枝、ここへおいで。あんたにきかしておきたいことがある。(戸を閉める)

美枝 (店へおりてくる) ……？

しま うちは北ん庄と同じや。

美枝 嘘！

しま ほんまや。

美枝 嘘、嘘……。 (泣く)

しま そやから正夫はん、別れに來はつたんや。

美枝 ……。(激しく泣く)

しま ほんまに、今迄しらなんだのか。

美枝 ……私が小学校のとき、友達のお母さんが……。「あんた、あつちの子？」言いはつて家へ帰つて「あつちとこつちて何のこと。」てお母ちゃんにきいたら、「子供にわからんこつちや一言うてお母ちゃん、ものすごいこわい顔して怒つたことあつたなや。やっばりうち……。

しま そや、あの時はどない教えたらええか、わからなんだのや。

美枝 私もう学校へ行かれへん。学校なんか止める！

しま (静かに) 美枝。お前、着物の袴に、私はムラの人間ですと書いて、外歩いていけるか。

美枝 そんなこと！

しま そのリボンの代りに、あんただけ、わ

らで髪結うて、外をよう歩くか。

美枝 そんなこと！

しま そうか。そうせえと決めはつたらよう生きとらんか。昔は、私らだけ、着物の袴に皮を縫いつけておけ、髪はワラでくくれ雨が降つても、傘はおろか、頬かぶりしてもいかん、よその家へは裏口から、ぞうりぬいで入れと決めはつたらしいで。

美枝 そんなこと……

しま お母ちゃんの小さい時分、買い物に行つたら、ザルでお金受けとつて、ザブザブ水で洗うてから受けとりはつたんやで。

美枝 ……。

しま それでも私ら、生きてきた。生きて生きて、生き抜いてきた。同じ人間がこんな扱いされて、こんな阿呆なことあるもんかちゃんとして一人前の人間として認めてもらえらる日まで、生き抜かんとかあんのや。

美枝 ……。

しま 私は七つの時から、口べらしに子守り奉公に出された。お父さんといっしょになる時は、大阪の北浜で下女やつたんや。下女中でも、ムラの娘やからと後指さされん様に、行儀にも気をつけた、裁縫もおほえた。お父さんは九つの時から、年に米一

石、盗られたという証があるのか。あんたらのそういう汚い心が嫌いやねん。ひ

がまんと思うても、ひがませるのが世間やないのか。

美枝 ……みんなもそう言うたもん。

しま 人が何を言おうとだまってたらよろしい。怒ってもいかん。だまって、しらん顔して辛抱しなさい。

美枝 (ソフトボールをもてあそんでいる) しま わかったな、どんな人のことも馬鹿にするのやないで。けど、誰のことも信用したらいかん。信用したらえらい目に会うねん。

美枝 なんぼ勉強しても、やっぱり姉ちゃん

みたいない目に会うかもしれへん。

しま バス停の方へ行っただんか？ひよっとしたら駅へ。……

梅田が戸を叩く。

しま (とび立つ様に戸を開ける) 和枝か！

梅田 一杯だけ、たのんます。

しま もう店しめましたさかい。

梅田 けったくその悪い。合併反対は潰されそうですがな、たのんますわ、一杯。

しま もう今夜は気分が悪うて。

梅田 さっきの男でっしやろ？ わしも気分が悪うてなあ。ダムを作るのは村のため、国のためやいうて西河の奴。水の話は、

わしにまかしとけ、悪い様にはせえへん。ああまで見得切られたら、信用せんと仕様ないうて、みんなコロッと信用してしまひよった。

しま ……それでっか。

梅田 長いもんには巻かれえとは、このこっちゃん。なんぼ逆らうても結局負けですわ。

しま そうでっか——ほんなら、おやすみ。戸を閉める。

雨が小降りになってる、梅田、被っていた上衣を着て去る。

美枝 野尻中学に、西河さんが寄附した、まっさらなバックネットあったよ、選挙のためやて。

しま ふらん。

北野、女物の浴衣を着て、赤いしごきでたすきをかけ、水色の鉢巻をしめて、妹を連れてやってくる。

北野 今晚は。

しま もう堪忍しとくれやす。明日に頼みますわ。

北野 おばちゃん、俺や、俺や。

しま (戸を開ける) ならんや、北野さんかいな。

北野 (ニコニコしている) これ、妹。

妹 今晚は、北野です。

美枝 あ、あんだ。

妹 (ソフトボールの入ったバッグをさし出して) これ忘れて帰ったでしよ。

美枝 え？

妹 足洗い場に残ってたわ。

美枝 あっ。私、水のみに行つて……私や犯人。

妹 明日学校へ届けるつもりで持って帰ったんよ、そしたら兄さんが……。

北野 うん(笑っている) 善は急げや。

美枝 ごめん！

妹 もう一回さがしに来たらよかつたのに。

美枝 でも男の子らがまだ残ってたから。

妹 ああ、三年の子らやね。来年、卒業でしょ。就職組は学校で厄介扱いやし、勤め先は決れへんし。暴れてんのよ。

北野 この頃の奴はおとなしいよ。三年まで学校へ行きよるんやから。俺なんかジスイズアペンの先公はりたおして、さっさとクビになつてもうた。なにも心配することないよ、仕事みたいなもん、なんぼでもあるわい。

妹 (兄に) 私は高校行くよ。な、兄ちゃん

美枝 (しまに) 私も公立受ける。な、お母

ちゃん。

しま、うなづく。

妹 いっしょに入ろうね。

北野 (嬉しそうに) こいつだけはお寺の前で拾うてきた子や。

妹 嫌い！

北野 公立すべつたら働けよ。俺知らんぞ。

妹 絶対！ すまんなあ。

美枝 うわあ。私もがんばろう。

北野 (妹の顔を小突いて) 早よ帰つて。勉強せえ。兄ちゃん、力水一杯やっっていくから

妹 うん。

しま ありがとさんでした。(手を合わせろ) 助りました。

美枝 ありがと。

妹 がんばろうね。

北野 これ持つて帰れ、(傘を渡す) 橋のところにけつたいな男がおつたから、走つて帰れよ。

妹 さよなら。

しま (見送つて) さよなら。

雨があがっている。

美枝 橋のどこに？

北野 あれ、ねえちゃんは？

美枝 姉ちゃん、失恋したんよ。私とこ、ほ

んとは和歌山のムラやったん。

北野 ええ？ そうか！

しま 和枝、どこへ行ったかわからしまへんねん。

北野 自転車かしておばちゃん、電池と。まさか……。

美枝 私も行く。線路の方やきつと。

しま すんまへん、頼んます。

北野、自転車をひっぱつてくる。

北野 (美枝に) うしろへ乗り！

和枝、ひよこり帰つてくる。

しま 和枝！

北野、自転車からとびおりて、いきなり和枝の頬をたたく。

北野 アホンダラ！ 親に心配させんな。

和枝 ……。

北野 自分が好きになつたんやろ、失恋するのは勝手じゃけど、みんな心配して……よ

う死ぬんじや、こんなとき。

和枝 私は死なへん。死ぬもんか。

しま 和枝。

和枝 世間の笑い話のタネにされるんか思うたら、阿呆らしいなつて……。うちは逆うたるねん、古い人らに。

しま そうやとも。

北野 そんな男あかんよ。うちの妹が結婚しよる時な。うちのお母ん、「親の許しをもらうてから出直してこい」いうて相手の男、三回追い返したつた。とうとう家とび出して。大阪で二人で世帯もちよつた。

ムラの奴やなかつてもほんまに惚れた男ならそうするよ。

しま そうや。

北野 男みたいなもん、バスといっしょや、ちよつと待つてたら又次のバスくるがな、あわててカスみたいな男にのつたらあかん。早よ忘れてしまひ。

美枝 姉ちゃん、あの橋のところに、正夫さんが待つてるわ、きつとそうやわ。

北野 ええ？ あいつが？ よし、いっちょ俺が気合い入れてきたる。

和枝 止めて！ なぐつたらいや！

北野 (ハッとして) そうか……。

和枝 ……盆踊り、やっばりするのやね。

北野 アタリキや。おばちゃん、一杯たのむ、しま、いそいで酒を注いでくる。

北野 すまん。痛かつたやろ。

太鼓の音がきこえてくる。

和枝 (にっこりと) ううん。

しま 私のおごり!

北野 ウワァッ(一息にのむ) うまい!

さあつ、俺が菓もどりのんを、みんな待ったんや。

しま そうですとも。

北野 デボチンに相談せえ、吉岡に。姉ちゃんの彼氏、面だけは拝ましてもらうで。

(去る)

しま (あとを追って) 大きいせんといて、皆に。

北野 (声だけ) まかしといて!

美枝 北野さん、偉いわ。

しま な、和枝。もうひとは信用せんへんな、わかったやろ。

和枝 雨はあがったけど、星はひとつも見えへん。

しま さ、入ろう。

美枝 姉ちゃん、元氣出して。

吉岡 吉岡が走りこんでくる。

吉岡 和枝ちゃん!

しま 和枝。(目顔で相手にするなど教えらる)

吉岡 正夫君のお父さんに話をきいたよ。

正夫君は? きたやろ?

しま 別れるいうて、帰りはりました。

吉岡 本心やないのです。義姉さんに義理を立ててるんや。お父さんも、きつうは怒ったものの、あいつがこのことでグれるかもしれんいうて、心配してはるんや。そんな心配をするのなら結婚をさせてほしいと今まで話してきたんや。

和枝 もういいんです、すんだことやもの。私が無理をいうたら、あの人苦しむだけやもの、あきらめます。

吉岡 正夫だけは絶対にゆずらんというたやないか。

美枝 嘘やわ、姉ちゃんの言うてること。

和枝 こわれん様に両手に抱いて、大事に大事にしてきた宝物を、あの人落として砕いてしまいはった。つき合っても、もう元にはもどりません。

しま 吉岡さん。もうかまわんといておくれやす。水が流れる様に時が立つたら忘れま

すよつて。

吉岡 すんません。もっと早うに取り組ん

たら、北ん庄の問題。僕の責任です。

しま あんたを責めてるのんと違います。和

枝はあの人の子供を...それを知って逃げた人でっせ。

和枝 子供をダンにしとうない!

吉岡 え! 一生暗い道を歩くつもりか、正夫。

和枝 私、あんな人嫌いです!

美枝 嘘やわ、姉ちゃん。(吉岡に) 死のり思うたんよ。

吉岡 (和枝に) 僕らですのや、結婚式。(しまに) 正夫の親が出席せんでも、許して下さい。

美枝 妻恋橋に正夫さん、いてはる筈や。

吉岡 とりあえず今夜はあいつを、ひきずってでも盆踊りに連れて行く。待ってて、明日。

一礼して走り去る。

和枝 キイちゃんが待ってるわ。

三人、吉岡を見送る。

和枝 ...私、やっぱりあの人を嫌いにな

れへん。こんなに憎いのに。

美枝 きつともどつてくるわ、姉ちゃんのとこへ。

日本鋼管労働災害のたたかい

稲垣をかえせ

この本は、金と命のコーカン会社といわれる日本鋼管の労働者で、京浜労演創立メンバーの稲垣弘君の労災死亡と遺された美恵子夫人(京浜協同劇団員)のたたかいの記録です。僕の戯曲「夜」や「明日ぼくらは」は、この夫妻と多くの働く仲間のたたかいに取材して書いたものです。全国の仲間の皆さんにこの本を読んでいただき、稲垣労災訴訟を勝利させていきたいと思います。 黒沢 参 吉

189頁・¥430(〒65) / 申込は京浜協同劇団

(川崎市古市場2-109)へ

あの世はこの世の あの世である

こばやし・ひろし

人物

- 女教師
- 坊主
- 労働者
- 政治家
- マダム
- 農婦
- 老婆
- 男女コーラス
- 明治天皇ABC

舞台 三尺巾の布がたれ下る円型の壁。
一枚おきに固定してあり、固定してない所からは自由に入入りできる。それに沿って鍋底式に中央に向って階段舞台になつてゐる。
全体に明るい色。

タンを押し、緊急出勤命令が出たとか、出ないとか。もし、それで一せいに水爆ロケットがとびだしたりしたら、相手も何しろ一人あたり火薬に換算すると二十トンぐらゐの水爆の量だつて話ですよ。
坊主 正確には二二トンという話ですよ。
女教師 いや、二十トンと聞きましてわ。
坊主 そりゃ古い資料ですよ。日々刻々、今もつくつてゐるんですから、新しい資料だと二二二トンだそうなんです。今年は二三トン、来年は二四トンと。
女教師 それはどこの、どういう資料なんです。
坊主 どこのといわれると何ですが、いつかテレビで……
女教師 テレビなんかあてになりませんわ。テレビで一切判断する人は知性がたりないといわれるんですよ。
坊主 しかし、私たちよりも専門知識をもつた人が話されるんでしょう。
女教師 それがいけないんです。そりゃ、二十トンでも二二トンでもいいですよ。たった二トンの差ですから。それがテレビだといわれるから、私は問題だと思つてます。
坊主 そりゃ二トンの差ですからね。

コーラスの男女は黒い衣裳。ボーイに見えてもいいが牧師に見えてはいけない。あとの登場人物はすべて灰色。スカート等による男女の区別があつてもいい。年令も老若男女の区別がなくてもいい。
梵鐘の音と共に読経の声。
コーラスの部分だけ明りが入り、壁から顔を出して歌う。

出口はあるのか
出口はないのか
右に廻つて鼻をうち
左に廻つて腰をうち
前に進んでおでこをうつ
この世の出口は
あの世の入口

女教師 けど、心が荒んできましたねえ。こんな心がすすんできたのも、やはり、科学、科学つて、科学万能の結果なんですよ。
坊主 そりゃ、たしかにそうです。
女教師 科学つて人間の心まで支配できませんよ。やはり、人間は精神、魂ですからね。人間の心つて、デリケートです。とくに女性ね。そりゃ若い時はいいですよ。とく精神の、魂のつて考えなくても面白おかしく生きてゆけますもの。私だつて十七、八の時は何でもできる、できるような気がするんですよ。ちよつと学校でも頭がよかつたもんですからね。女流作家になつてやろう。女つて男とちがつて、実業家になつたり、大臣になつたりできまけんからね。芸能界に入るか、芸術家になるかですよ。女つてほんとに損ですよ。だから、私は二十才までには女流新人賞をもらひ、二五才までには芥川賞か、直木賞をもらおうと……
笑つちやいやですよ。
坊主 いや、何も笑つちやいませんよ。
女教師 それから結婚しようと思つたんです。
坊主 結構ですなあ。

出口もあれば
裏口もある
再び読経の声。
舞台の中央に明りがつき、坊主と女教師がぐるぐる廻つてゐる。

坊主 何も無い、何も。道に迷つたのかな。
女教師 一体どこへ行くんです。
坊主 せめて家ぐらゐあつてもよさそうもないが、家もなければ人影もない。
女教師 砂漠みたい。
坊主 砂漠だつたら、山や岩がありますよ。石ころ一つないんだから。
女教師 何となく心細くなりましたねえ。まだ、お宅と御一緒だからいいが、これが一人だつたら。
坊主 何も無い、ほんとに何も無い。空ですよ。
女教師 しかし、人がいる所まで行きつかないと……。(立止り) 原爆なんかで地球が死滅したんじゃないでしょうねえ。
坊主 そんなことはないでしょう。そんな心配はなかつたようですから。
女教師 だけど、どこかの国がまちがえてボ

女教師 女つて、何か力をもつてないと男に馬鹿にされますからね。芥川賞ならハクがつくでしょう。
坊主 そりゃそうですよ。それで。
女教師 (急に恥かしそうに) 思つただけなんです。
坊主 ま、それでも結構ですよ。で、いくつで結婚されたんです。
女教師 (さらに恥かしそうに) 弱つちやいませわ、そんなこと。
坊主 もう、そんな、おたがい年ですから。
女教師 私、教師やつてたもんですからおそくなつちやいまして。
坊主 先生というのは晩婚の方が多いですねえ。
女教師 教師が晩婚とはいへませんよ。
坊主 一般にさういうじゃありませんか。
女教師 それは職業婦人、それも腰掛的な職業でなく、一生それで通す職業婦人全体にいえることなんです。
坊主 なるほど。何かお気が若いですねえ。
女教師 おいくつです。
坊主 七七、とても、そんなお年に見えませんよ。私よりも一廻りも上なんて。私六五

ですが。

女教師 (うれしそうに) そうですか。若い時はよくいわれました、先生にしろくもったいないって。

坊主 そうでしょう。女優か、芸者になった方がよかったですよ。いや、いや、いや、そういう意味じゃなくて。いや、私、田舎だもんで、美人だと芸者、芸者だと美人、そういうのもんです。例え、例えですよ。

女教師 例えでも失礼じゃありません。

坊主 いや、あなたというのはわりにつかかるところですわね。

女教師 私は理屈にあわないこといわれるのが大嫌いですから。気は優しいんですけどよ。すぐ、泣いたり、わめいたりしますから。

通る去る。

坊主 ま、しかし、何もかも終わりましたよ。美人であろうが、何であろうが。

女教師 終わりました。何もかも。

坊主 迷いねえ。そりゃ、あとから考えりゃ、ああすればよかった、こうすればよかったということばかりですよ。

女教師 それだけの勇気がなかったんですわ、私って。

坊主 決断ですからね、人生って。

女教師 私って、だめなんです。

少女のようさめざめと泣きながら坊主に抱きつく。労働者が少し前から眺めている。二人は気づかない。

女教師 嫌らしい男でも、男って虚勢張ってますからね。案外とびこんでみると、そういう男ほど素直な可愛い男だと思うんです。

坊主 で、その男はどうしました。

女教師 いろんな作品をかいて、だんだん認められるようになりましたわ。私は新人賞どころか。

坊主 惜しいことしましたねえ。

女教師 三七になってようやく結婚できたんです。それも子供が二人もある。

坊主 終わりました。

女教師 ずっと遠い所へ行ってしまいましたねえ。

坊主 ずっと遠い所へねえ。

女教師 若い時は人生の前途は夢ばかり、何でもあるような気がするんですが。

坊主 それは何もない。

女教師 そう、無ですわ。空ですわ。四十すぎないとわからないんです。空しいってことが。

坊主 いろんなことがあったでしょう。

女教師 ええ、後つけられたり、さわがれたり。

坊主 ラブ・レターももらった、出したり。女教師 だめなんですわ、私って。あれやこれや迷っている中に、一ぱいいんですよ、一ぱい。教師でも機会は一ぱいあったんです。田波という男がいたんです。芝居がちょっとかけるもんで嫌な男でしたが、それが嫌だ嫌だと思いがら心に残るんです。その男、私を職員室で何かにつけて侮辱しましたわ。私、文芸部の顧問やってたもんですから、学校新聞や、生徒の雑誌に詩を出していたんです。それを鼻もちらならない少女趣味だって。それだけならい

坊主 三七、そうですか。後妻という大へんでしたでしょう。泣きなさい。終わってしまったことですから、泣きたいだけ泣きやいいんです。おたがい短い人生ですからねえ。あなたが美人で才媛だったのがよくなかつたんですね。迷われたんですよ。もう少しいい人がいる、もう少しいい男性があらわれるって。それが浮世なんです。

女教師 女ってきつかけを失うとだめなんですわ。何も後妻にならなかつたって機会は一ぱいあったんですが、焦れば焦るほど。教師という職業がすべて邪魔したんです。華でな服をきても限度がありますわ。聖職ですもの、人目につきやすい。

坊主 それも、やはり、一つの職業の虚勢でしようね。

女教師 虚勢じゃなく、そうさせられてるんです。自由に幸せをえられ……。 (はつと気づきはなれる) まあ、どうしましう。

坊主 (照れくさそうに) いや。女教師 (恥しそうに) こんなこと、始めてなんですのよ。見ず知らずの方に。

坊主 いや、私もこんなことは始めてなんです。

いんですけど、私、プロボーションがよかったもので、それにわり華でな服装してたでしょう、目につくんですの。それをヒップがないとか、バストがないとか。私、本物は立派だったんですよ、今はだめですけど。

坊主 そりゃそうでしょう。

女教師 若い時はちゃんとあったんです。それをみんなの前で……。私、その晩、彼の下宿へ行って見せてやろうと思つたんです。彼は酒をのんでいましたの。そこでブラウスもブラジャーもみんなはずして見せてやろうと……。

坊主 それで。

女教師 やめたんです。だって、ぬいたら何されるかわからないんですもの。酒の匂いがブーンとしてるんですから。

坊主 そりゃのんでたらくさいでしょう。ま、しかし、よかつたですわ。危いですよ、そういう時は。

女教師 ……私って、勇気がないのね。あの時、彼の懐にとびこんでたら、二七だったもの、私。

坊主 ……?

女教師 恥しいといつても、ぬぐなんて何で

女教師 男の方って、そういう風ですわ、どなたも。

坊主 とんでもない、ほんとに始めてなんです。私は坊主ですからね、僧侶、宗教家なんです。悩みをお聞きするのが仕事なんです。坊主ってはお与えしかもらえない、お布施も請求することはできない、お下がりをいただく。だが、それが始めて本當の悩みを聞いたような、気がするんです。

女教師 そうですか。お坊主さんですか。

坊主 申訳ありません。

女教師 いいえ、別に。

坊主 あなたと今の関係は、男女の、という大変ですが、おたがい年ですから、あなた七七でしょう。私、六五ですから、老人が悩みを素直に打開けあう。そりゃ人間ですから、女の方がいいですよ。何しろ私は女の方と二人きりで素直に話合うなんて考えられなかつたんです、今まで。その点、キリスト教の牧師というのはいいですよ。懺悔とか、何とかいって、対々で悩みとかを打明けられるんですから、実際若い時は羨しいと思いました。仏教はだめです。若いものは寺へよりつかない、老人だけを相手にするんですから。何しろ大切な

のは若い時だけですからね。坊主というのは職業ですよ。

女教師 それは卑下しすぎですわ。仏につかえる身というのは、むしろ選ばれた職業ですよ。

坊主 とんでもない。

女教師 しかしどうして人間って、こう思うようにならないんでしょう。職業が人間を拘束する。お坊さんにしても教師にしても前世の御因縁でしようか。

坊主 御因縁。

女教師 親鸞聖人のおっしゃる通りですわ。智慧才覚を働かせてもだめ、すべて阿弥陀さまにおまかせする。

坊主 ……全く、その通りですよ。(急に

坊主意識にもどり) ナマンダブ・ナマンダブ・ナマンダブ……み仏に仕える身でありながら、浅ましい凡夫ですから、日々、悩み苦しみ、はっと気づいてみ仏のお慈悲にすがる。そのくりかえしですよ。

女教師 私も人生の無常がわかったのは五十五歳ですわ。それが悟りというんでしょうか。あなたのおっしゃる通り、お寺参りなんて、それまでそれが凡夫の浅ましきですわねえ。み仏のみおしえを聞いて、ほん

ちゃったもんですから。やっぱり、何となく不安なんですよ。

坊主 という。

労働者 あなたはお坊さんですし、あなたはみ仏のみおしえを聞いておられるから、行先、心配ないんでしょうが、私はあわてたもんで。人間あわてちゃいけませんよ。大分悩んだんですがね。

坊主 何を悩まれたんです。まだ、お若い

が。

労働者 生きるか、死ぬかです。

坊主 おいくつですか。

労働者 三七です。

女教師 わかります。私が結婚した年と同じですわ。その頃がちょうど、人間、死というものについて考える年頃ですわ。私も何のために生きてるんだらうと悩みましたもの。それからはもう、情性というより、開きなおりでしよ。子供とケンカばかりでした。実の子でないということは、私、子がなかったんですの、夫が死にましてから、夫の財産も、どうせ先妻の子のものになるんだらうと思ひましてね。使えるだけ使ってやりました。お寺へもほとんど寄附したんですのよ。

とに迷いからさめたといひますか。

坊主 一度はお浄土へ参らさせていたただかなかちやならんのですから。それがなかなかわからんのですよ。今日一日、生かさせていたたくという気持、その気持にさせていたいた時、心から仏恩報謝のお念仏をとなさせせていただけるわけですが、それが自分で生きるといふ気になるんでしようなあ、あなたも、私も。結局、空であり、無でしたが。そうして、一日一日お浄土に近づかせていただいているんです。

女教師 往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲を。ナマンダブ・ナマンダブ……。(知らぬ中に坊主に寄りかかり法悦にひたる)

坊主 (女教師を抱きながら) 如来の廻向なかりせば浄土の菩提はいかがせん。おありがたいことです。もういつお浄土へ参らさせていただいてもいい気持になってきますねえ。こうして、あなたも私も、み仏のみおしえを聞かさせていただいた縁に接して……。

労働者 その、み仏のみおしえを私にも……。

坊主 (驚いて) あんた、どこに。

労働者 ここに。

坊主 いつから。

労働者 ずっと、さつきから。

坊主 立聞きしてたんですか。

労働者 いや、腰下ろして聞いてたんです。

坊主 そりや、ひどい。そりやひどいじゃありませんか。みんな。

労働者 えっ、殆んどみんな、余りお二人が熱心だったもんでしたの。

坊主 ちょっと聞きますが、奥さんが、いや、この方が、こう、さめざめと。

労働者 ええ、その頃からでしょうか。

坊主 あのねえ、この方は昔の、ま、そりや

いいが、私たちは行きづりの、というところが、旅は道づれといひますから。

労働者 ええ、その道づれにお邪魔でしょう

が入れていただきたいんです。

坊主 どこからこられたんです。

労働者 あつちから。

坊主 どちらへ行くんです。

労働者 どこでしようねえ、それがわからな

いから不安なんです。そのみおしえという

ものはどんなもんでしようか。

女教師 み仏のみおしえですよ。

労働者 そのみ仏のみおしえというのを教え

ていただきたいんです。それをきかずにき

女教師 まあ、自殺。それで。

労働者 死んだんです。

女教師 ということは成功したんですか。

労働者 ええ、おかげで。お宅らは、何か、御病気で。むろん、御病気でしよねえ。

坊主 死んだ……。あなた死んだんですか。

労働者 え、私は自殺なんです。やめとこ

うと思つたんですが。気が弱かつたんです

ねえ。何か。ふっと、そんな気になつちや

いましてね。悩む時は長いんですが、その

気になるのは早いですよ。魅いられたよう

に、ひきつけられるように。…首つって。

女教師 まあ、首つって。

労働者 一番、楽だつていいですからね。

女教師 楽でしたか。

労働者 他の死に方は未経験ですからわかり

ませんが、別に楽というもんじゃないです

ね。ただ、あつ、あつと思つていつちや

いました。

坊主 (急にとび上り、大きな声で) わあ！

死んだんだ。死んだ。死んだんだ。

労働者 ……？どうしたんです。

坊主 死んでるんですよ、私たちも。

女教師 ……死んでる。…そうですか、そ

んな気がしませんねえ。

坊主 死んだ。死んじまったんだ、私は。

(泣きだす) どうしたらいいんだ。死んじまった。とうとう、死んじまった。

労働者 お気づきじゃなかったんですか。いや、私は自殺だったから、始めから死ぬ気があったからわかってましたが。

坊主 誰が、そんな、馬鹿な。

労働者 そうですか。

女教師 死んでる。……なるほど、そんな気がしますねえ。

鐘の音と共に歌が始まる。

舞台明るくなる。他の一群、政治家、マダム、農婦がいる。

コーラスは壁の入口から出て、次の入口へ入りながらうたう。

諸行無常の鐘の声

一つなったら

極楽浄土

あの世は

この世のあの世であり

この世は

あの世のこの世なの

諸行無常の鐘の声

一つなったら

極楽浄土

女のコーラス お気づきですか、みなさん、ようこそお越し下さいました。(政治家の一群に) そちらの方もどうぞ。みなさま、

長い間、あの世で御苦勞までございました。いろんな悩みや御苦勞がおありの方も、幸せ一ばいでお暮しの方もおありだと思ひます。しかし、これからは、それも霧のように消えてゆき、浮沈のないこの世で安楽に暮していただくわけでございませ

す。みなさま、お亡くなりになっても、お気づきにならない中は、いろいろおさまよいになるわけでございますが、あの世とお別れたことにお気づきになった方から順次入っていただくことになっているわけでございませ

す。長い間、おさまよいの方も、すぐお気づきになった方もございます。ようこそお越し下さいました。これからはゆつくりおくつろぎいただきたいと思ひます。それで係の者から、この世の御説明をさせていただきます。

男のコーラス では、ざっと説明させていただきます。まず、最初に頭に入れていた

坊主 ほ、ほんとですか、たしかですね。女のコーラス あの世で勝手に空想されたん

じゃありません。坊主 しかし、何か証明はあるんでしょ

うか、ここは地獄でないという。女のコーラス 別にございません。

坊主 証明がなかったら、それに代るようなものは、あなたの身分証明書とか、阿弥陀さまのお姿とか。

女のコーラス そういうものもございませ

ん。坊主 それじゃ信用できんじゃありません

か。女のコーラス とおっしゃっていたとしても

仕方がないと思ひます。農婦 ちょっとお尋ねしますが、死んだもん

に会うにはどうしたらええんでしょ。男のコーラス この世にこられた方ですね。

おさがしになってもいいんですが、これと同じ部屋が無数にあるわけです。今までに

あの世からこの世にこられた方は何億、何十億ですから、大へんだと思ひます。

農婦 じゃ、戸籍みたいなもんはないんです

か。政治家 ずっと神武天皇の時代から。

くことは、この世では欲がないということでございます。物欲、食欲、性欲、この三大欲。それに従ひまして、極めて安楽なお

気持ですごしていただくわけでございませ

す。しかし、当分の間は、あの世の情性といひますか、習性が、そのまま続くと思ひ

ます。それは、その中、徐々に解消してまいりますので、しばらく御辛抱いただきたいと思ひます。従ひまして、物欲、食欲の

対象となつていきます商品、金銭、食物は一切ございませ

ん。あとで御質問はうけたまわりますから。従ひまして、むしろ、ゴミ、排泄物も

ございませ

ん。この部屋に、ゴミ箱、トイレ等がないのもそのためでございます。性

欲もその用を達しませ

ん。運動も必要

ございませ

ん。したい方は自由にして

いただきますが、

みなさんの部屋は

ここでございませ

ん。ここをきま

つたわけで

ございませ

ん。どこへ行

つていただ

いても結構

です。無数に

こういう部

屋が準備

してござい

ます。これら

は壁であつ

て壁でござ

男のコーラス どうか知りませんが、そうい

う方があの世におられたのならおられるで

しょう。戸籍もございませ

ん。労働者 あの食欲がないということは、胃が

悪くなるわけじゃないでしょうが、喰ひも

の

男のコーラス ありません。

労働者 ない。私は国鉄の労働者ですからね

え。何も食べれないとなると……。

女のコーラス 食べる必要がないわけ

です。労働者 そんな無茶な、食べる必要がないと

いっても食べたい……食欲がないか。淋しいことですねえ。

マダム じゃ、寝るのはどこで寝たらいいん

でしょ

男のコーラス どこでも結構です。

マダム どこでもって、男女一緒に

女のコーラス けど、さらに眠られることは

ないと思ひます。みなさん方は永眠された

んですから。

マダム エイミン。

政治家 なるほど、死んだんだよ、眠ってる

んだ。

マダム 眠っている。今、私が。

政治家 そうだよ。

マダム それじゃ寝る時はどうなるの。

政治家 横になるだけだよ。今が眠ってるんだから、それ以上眠ることないんだらう。

あのね、他に部屋はないかね。個室とか、もう少し上等のね。こう調度品のある。

男のコーラス このこと同じ部屋しかございませぬ。

農婦 息子さがしにいつてもええですか。

男のコーラス 息子。

農婦 正一です。

男のコーラス この世におられるんですね。農婦 いいえ、あの世へ……いや、この世へきたるんです。出稼ぎにいつてガス工事でなくなつたんじやが、わしや、それだけ茶しみでお浄土へ参らせていただいたんじやで。

男のコーラス どうぞ、どうぞ。ただ、さき程申上げたように大へんな数ですが、ごゆっくり探して下さい。では、これで失礼させていただきます。

諸行無常の鐘の声

一つなつたら

極楽浄土

あの世は

この世のあの世であり

この世は
あの世のこの世なの

諸行無常の鐘の声
一つなつたら

極楽浄土

男女のコーラスはライトに輝き、喜びにあふれている。できれば踊つて欲しい。みんなしゃんぼりしている。

農婦 じゃ、私、正一を探してきますで。

政治家 しかし、婆さん、何千万もこんな部屋があるらしいよ。婆さんの足じや。

農婦 じゃが、正一に会わにや何のためにお浄土へきたか。正一はなあ、惨めな死方したんじやで。むごいことしました。百姓じや食べてけませんで、ガス工事ちうもんに

いったんですが、バカーンと、爆裂弾のようにはぜましてなあ。顔もない、手も足もばらばらでした。ばらばら……。あつそうそう、お浄土へきても正一はばらばらでしよるか。

政治家 さあねえ、何しろ戸籍もないというんだから不便きわまりないよ。テレビもラ

デオもなさそうだねえ。人さがしなんて、テレビがありやすぐだが。

農婦 どうしましよう。聞きやよかつたが、年とると肝心のことを忘れるんですよ。どうでしようねえ、みなさん、正一は。

労働者 この人お坊さんだから。極楽のことくわしいんじやないんですか。

坊主 知りませんよ、そんなことは。第一、ここが極楽だという保証は何もないんですからね。何も。

労働者 けど、そうだといわれたら、そう思わにや。

坊主 そりや余り人がよすぎますよ。一生の問題ですからね。

労働者 けど、どうなんですか。私たちはわからんが、極楽のことはずつとくわしく、あの世で説いてこられたんでしょう。そのみ仏のみおしえとかでわかりそうなもんですかねえ。

坊主 くわしいだけに簡単に信じられんです。医者でもね、死際は惨めだそうですよ。助かる、助かると慰めても、本人は病気のことは知りすぎますから。それと同じですよ。

労働者 じゃ、極楽じやないというんです

か。

坊主 ……。

労働者 じゃないとしても仕方がないが。

農婦、念仏をとなえながら階段を上り始める。

政治家 やつぱり、婆さん行くの。

農婦 ええ、いつてきます。

政治家 けど、婆さん、その向うに何かあるかわからんよ。この坊さんが極楽じやないというんだから。針の山とか、へびの谷とかそんなもんがあるかどうか知らんが。労働者 しかし、地獄はないといたつたでしょう。

坊主 そんなこと信用できるもんか。マダム ま、そういえはそうですわねえ、あの人の身分証明書もないというんだから。

政治家 身分証明書がないというのは一番いかんね。どこの馬の骨ともわからないわけだから。(労働者に)君、ちよつとのぞいてみたら。

労働者 いやですよ。さっきの連中がふわあ

政治家 どう思うね。

妙な間。

政治家 いちちやつた。

労働者 いちちやいましたねえ。

政治家 帰つてこれるんだらうか。

労働者 さあ。

政治家 音もしないねえ。

労働者 音もしないですねえ。

政治家 どう思うね。

坊主 まだまだ、下手な決断は下せませんねえ。

政治家 重要問題は慎重に、しかも前向きに善処しにやいかんからね。

坊主 要は、あの婆さんが帰つてきてからですよ。

そりいいながら、また元の位置にもどろごろしている。長い間。

労働者 しかし、本当に腹がへらんでしよるかねえ。

政治家 タバコもないし……。

労働者 そうそう、それをいおうと思つたんですよ、私も。

マダム お酒もないしね。

政治家 あるのは女だけだ。

マダム それも、ものの用を達せんというんでしよ。

労働者 そうとういけるんですか。

マダム どちらが。

労働者 (あわててちよこでのむまねを手でする) こ、これ。

マダム 真赤になつて。(笑いながら)お酒のむのが商売だもの。

労働者 どうしてこの世へ。

マダム のみすぎね、肝臓悪くしちゃったの。

労働者 臓のつく病気はよくないそうすね。苦しかったですか。

マダム 苦しいの、何のって。その挙句、眠ったと思ったら死んでたんだわ。

労働者 となると、自殺の方が楽なんすねえ。

マダム あんた自殺、ロマンチックじゃない。

労働者 いや、とんでもない。

政治家 (股ぐらをなぶりながら) もの、用に、達せんか。(急に大きな声で) こりゃ極楽じゃないぞ。

坊主 どうして。

政治家 (相変らず股ぐらをなぶりながら) いや、そう思っただけじゃ。

労働者 お宅はどんな御病気で。

政治家 わし、脳卒中じゃ。

労働者 これはお楽でしよるなあ。

政治家 うん、まあな。

女教師 私、何で死んだかわからないわ。

労働者 あなたガンでしょう。やせておられるから。

坊主 ガンは私じゃ。

労働者 となると、自殺が一番……。

マダム あなた、なぜ自殺したの。

労働者 いや、これは恥かしくてっね。マダム 女性問題。

労働者 いや、そんな華でなもんじゃないすよ。

マダム あんたの年だったら、奥さんも子供もあるんすよ。

労働者 ええ、それだけが心残りですがね。

マダム ノイローゼでもなさそうだし。労働者 それが死んだとたんによくしゃべるようになったんすがね。生きとる中では人間嫌いもいとこで。ノイローゼですよ。ものもいけませんでした。

マダム それで……。

労働者 ええ、実は私、国鉄の労働者でしてね。マル生運動というのが起きたんですよ。御承知のように国鉄は赤字赤字ですよ。これは何も私たちの責任じゃないですよ。旅客運賃は黒字なんですよ。問題は貨物運賃と赤字路線ですが、これは政治の責任ですよ。それをなんと十六万五千人を整理する合理化ということになったんですよ。組合でいろいろ抵抗するんですが、弱

いのは私共ですよ。お上のなさることは弱いものいじめですからね。組合と一しょに

闘うか、どうかということになっちゃうんですよ。むしろ、お上は第二組合に入れというし、それがよくないことに仲人が助役

でしてね。その上、女房のオヤジが田舎駅の駅長なんですよ。職場じゃ助役に責められ、家じゃ女房に悪い。とうとう第二組合に入ったんですが、こんどは第二組合をふ

やせ。そんなことができませんか。自分一人でもたんと思つとるのに。もう、誰とも話もできなくなっちゃったんですよ。もう、この世が……。

坊主 あの世でしょう。

労働者 ええ、あの世がいやんなっちゃうて。

マダム なーんだ、そんな簡単なことで自殺したの。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

政治家 あんたは国鉄の従業員だろう。従業員なら上の命令に従わなくちゃならない。君は当然のことをしたんだよ。何も自殺することなんかない。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

政治家 あんたは国鉄の従業員だろう。従業員なら上の命令に従わなくちゃならない。君は当然のことをしたんだよ。何も自殺することなんかない。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

労働者 あんたたちにはわからんですよ。現場の悩みは、ま、へんなこといわないで下さい。あの世でノイローゼになり、この世でノイローゼになっては立つ瀬がないですからね。

政治家 ノイローゼになるのは迷うからいけないんだ。自分で立ち向う勇気がないから。自分の信念だよ。

労働者 同じようなことを助役からも、駅長からも、女房からもいわれました。あんた、何か駅長みたいな気がしますねえ。

政治家 駅長、冗談じゃない。わしは参議院議員だよ。

労働者 やつぱりちがうと思った。この世でも、そういう人がいるんすかねえ。

政治家 いや、あの世のだ。今はパッチもない。

マダム まあそうです。衆議院の方がうちの店へもよくこられましたわ。とくに吉田という、よつさま、よつさまといて、じつこんにしていただいたんですよ。ゴルフなんかもつれていただいたり。

政治家 ああ、知ってる。わしは池田だ。池田弘太郎というんだ。

マダム あーら、あの、走れ走れコーターロ

1という。全国区の。

政治家 うん、選挙の時にね。

マダム あれはいいアイデアーと思いましたわ。週刊誌で読ませていただいたんですよ。(うたいだす)

走れ走れコーターロー

本命穴馬かきわけて

走れ走れコーターロー

追いつけ 追いつけ

選挙にびつたりすわ。(とまたりたいだす)

政治家 もういいよ。選挙は何でも利用したくちやいけないんだからな、恥も外聞も。

マダム いいえ、そんなこと恥じゃありませんわ。勝てば官軍ですもの。私たちだってそうでしたの。よろしくお願ひしますわ。光栄ですの。

政治家 ああ。

マダム けど、イーさま、借しいことですわねえ、せつかく参議院にでられて。

政治家 この世にもないかねえ、その代議政治というか、そういうものが。さっきの婆さんじゃないけど、戸籍もない、また、誰に聞いてもわからんということは、秩序がないということだよねえ。みんなの悩みや

いのは私共ですよ。お上のなさることは弱いものいじめですからね。組合と一しょに

闘うか、どうかということになっちゃうんですよ。むしろ、お上は第二組合に入れというし、それがよくないことに仲人が助役

でしてね。その上、女房のオヤジが田舎駅の駅長なんですよ。職場じゃ助役に責められ、家じゃ女房に悪い。とうとう第二組合に入ったんですが、こんどは第二組合をふ

やせ。そんなことができませんか。自分一人でもたんと思つとるのに。もう、誰とも話もできなくなっちゃったんですよ。もう、この世が……。

坊主 あの世でしょう。

労働者 ええ、あの世がいやんなっちゃうて。

マダム なーんだ、そんな簡単なことで自殺したの。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

政治家 あんたは国鉄の従業員だろう。従業員なら上の命令に従わなくちゃならない。君は当然のことをしたんだよ。何も自殺することなんかない。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

政治家 あんたは国鉄の従業員だろう。従業員なら上の命令に従わなくちゃならない。君は当然のことをしたんだよ。何も自殺することなんかない。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

政治家 あんたは国鉄の従業員だろう。従業員なら上の命令に従わなくちゃならない。君は当然のことをしたんだよ。何も自殺することなんかない。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

政治家 あんたは国鉄の従業員だろう。従業員なら上の命令に従わなくちゃならない。君は当然のことをしたんだよ。何も自殺することなんかない。

労働者 簡単？

マダム ヤボな話ね、もう少し重大なロマンチックな話かと思つたら。

政治家 あんたは国鉄の従業員だろう。従業員なら上の命令に従わなくちゃならない。君は当然のことをしたんだよ。何も自殺することなんかない。

もんだよ。たとえ死んだとしても、極楽なら、まっさきに個人個人の才能個性を十分生かさなくちゃ。

マダム そうですよ。私なんか、今が女ざかりの魅力を發揮できる時なんですよもの。これじゃ全く女のインポですわ。

政治家 そうだ、インポだ。インポテンツの世の中だ。あの世の監獄だよ、刑務所だ。そう思わぬかね。

坊主 その通りです。こりやインポですよ。マダム インポの世の中よ。

政治家 じゃ、そのインポから回復するため、ちよっとのぞいてくれたまえ。もし、係の奴がいった通り、ここと同じような部屋があるとしたら、そして同じような人間がすんでいるとしたら。

坊主 人間じゃありません。死人ですよ。

政治家 死人でもいい。その死人がわれわれと同じように、秩序もなく、楽しみもなくインポな生活をしているとしたら、こういう地獄でも極楽でもない無秩序な生活を改革しなりやいかんと思うんだ。どうだ、諸君。第一、地獄がないと係の奴がいったが、それがよくない。地獄がないということとは悪平等だからね。人間に張りが出てこ

ない。向上心が生れない。才能が開発されない。それこそインポなんだ。人間は危機があつて緊張も勇気もわいてくるんだ。

(坊主に) どうだね、専門家の腫でのぞいてみてくれんかね。何も怖れることないよ。係の奴が何やってもいいといったんだから。

坊主 じゃ、あなたがやればいいでしょう。私は身分証明書もないものということは信じてませんから。

政治家 君はどうだ。

労働者 いや、結構です。

政治家 だめだなあ、こういう困つてる時には人間勇気をもたにゃ。

坊主 人間じゃない、死人ですよ。

政治家 じゃ、ますます大丈夫だ。これ以上死ぬということがないんだから。

マダム そうよ、それに専門家でしょう。労働者 それにみ仏のお守りがあるんだもの。

坊主 けど、地獄だったらどうします。み仏は地獄にはいませんよ。死ぬより大へんなことですよ。死は一べんづつ経験済みですからいいが、それにどうして私だけを責めるんです。

たがね。どこにいるやら。もう、子供みないなもんでしたよ。

マダム 走れ、走れ、走れ、コータロー、この前の部分は、どういう文句でした。忘れちゃった。

政治家 そんなことはどうでもいいじゃないか。

労働者 オヤジも国鉄に勤めてましたがね。それにしても長生きな方なんですよ。国鉄はね、不規則で労働が激しいから、停年のあと、平均五・六年なんですよ、寿命ちゅうのは。けど、あなたも、使えるだけ使

い、やりたいことやってきたんだから。何も、今さら死んだ原因なんてどうでもいいじゃないですか。

政治家 よし、いつてみる。

政治家 行くの。

坊主 いくんですか。

政治家 政治家というものは決断を必要とする時がある。

坊主 あの婆さんがもどつてきてからにしてはどうですか。

政治家 一つのことかわかりやしない。マダム けど、ひよっとしてひよっとすると、いうこともあるから、ちよっとのぞいてや

政治家 いや、こういう時にこそ生きがいがあると思つて。

坊主 (吐きだすように) 死にがいです。

政治家 しかし、あなた、さうとうひがみつほいねえ。

坊主 坊主は賤業ですからね。

政治家 いや、この世じゃエリートだよ。

坊主 あの世で賤業なら、この世でも賤業です。

マダム もうすこし専門家としての自信をもつたらどうなの。

坊主 あの世で馬鹿にされていて、この世でなぞおだてるんです。あのねえ、坊主と医者と弁護士、こりや賤業ですよ。

政治家 そりやまた、どうして。

坊主 人の不幸に乗じて金をかせぐんですから。同じ不幸でも坊主は死人が相手ですからね。死人じゃ金もだしませんよ、現世利益つて生きてるのを相手にしにゃ。その点、同じ賤業でも医者や弁護士は生きてるのを相手にする現世利益ですから。桁がちがいますよ、桁が。坊主は金もなし、おどおどして人生をすごすんです。それどころか、犬にまで馬鹿にされる。衣きて、異様ですから、乞食でも思つてどうしようか。

めたら。

政治家 もし、帰つてこれなかったら、池田コータロー、みんなのために死んだと思つてくれ、この世の改革のための礎となる。

坊主 その点は二度も死ぬわけじゃないですから。

マダム ちよっとのぞくだけでやめるの。

政治家、心を落ちつけて明けようとする。と老婆入ってくる。政治家こちげ落ちる。

老婆 あつ、すみません、お邪魔します。

老婆、道具もなしで掃除を始める。みんな果敢にとられてる。

労働者 何してるんだね。

老婆 え、私ですか。お掃除してるんです。

労働者 お掃除。ゴミもないじゃないか、か、それも掃もなしで。

老婆 ええ、何もやることないもんですから。それに長いこと暮しとりますと、部屋の人と話すこともうなりましてたいくつ

だもんで。

(妙に笑い) 吠えて吠えて。

政治家 さうとうひがんでるねえ。

マダム じゃイーさんどう。

政治家 わし。

マダム だって、イーさん政治家でしょう。

政治家 というのは人の先頭に立つものよ。

政治家 うーん。……よし。

政治家、階段を上っていつて壁をあけようとするが、あけられない。

マダム こわいの。

政治家 いや、ちよっと考えてるんだ。

マダム、走れ走れコータローの鼻唄をうたいます。

労働者 あなた、よくしゃべったのに静かになっちゃいましたねえ。

女教師 死んだことはわかったんですが、なぜ死んだか思ひだせないんです。

労働者 年だからね。あなた低血圧でしょう、脳軟化症だったんですよ、きっと。うちのオヤジもそうでした。七八で死にま

政治家 あんた、長いって何年ぐらいすんでるんだね。

老婆 さあ。大部すんですよ。

坊主 ここは地獄かね、極楽かね。

政治家 そうそう。

老婆 さあ。

政治家 向うの部屋も、ことと同じように。

老婆 ええ、ことと同じように。

政治家 こういふ爺さんや婆さんばかり。

老婆 いいえ、この頃若い人が多くなりましてよ。交通事故とか、何かで。

政治家 えらい人なんかも。

老婆 えらい人って、この世じゃ。

政治家 あの世でえらかった人は。

老婆 おいでのようにですよ。明治天皇なんか

もおいでのようですから。

政治家 メイジ天皇。ほ、ほんとだね。

老婆 ええ、私、会いましたで。

政治家 婆さんがじかに。ああ、もつたいない。君、諸君、みなさん。明治大帝がおられるそう。明治大帝。(おるおるである) どういうことなんだ。いや、この世も見捨てたもんじゃないよ。これこそ、地獄に仏だ。全くだ。いいね、諸君、これでこの世の大改革はもうまちがいなしだ。われ

われの手で、このインボから回復が計れるんだ。ね、いや、いや、私は血がもえたぎり始めた。血管がふきだし、心臓が破裂するような気持だ。この大改革はねえ、この世では有史以来、誰も手をつけなかったことなんだぞ。歴史的大事業だよ。まずねえ、明治大帝をいただいて、この明治大帝がおられるということが、われわれに運が向いてきたということなんだ。おそれ多いが、この明治大帝をいただいて、まず民主的な決議機関をつくる。そして、そこでこの世の根本的な間違いのもとである。インボテンツのもとである。物欲、食欲、性欲の三大欲の回復の決議をする。

マダム 決議して回復できるんですか。

政治家 いや、君たちわからんかねえ、議会の権限というものを、女を男にし、男を女にする以外何でもできるんだ。まず物欲は物ができればいい。物欲がすべてのもつたから、食欲、性欲、名譽欲、権力欲、すべて物欲から出ている。だから、何よりも物をつくること、生産を開始することだ。一にも生産、二にも生産。物資が豊かになれば身を飾ることも、女に物をやることもできる。女がきれいになり、魅力的になれば性

欲も自然生れてくる。そうして、われわれはインボから回復することができるんだ。

あの世と同様人間性豊かな。

坊主 死人でしよう。

政治家 わかっとる。死人性豊かな社会が生れる。どうだ諸君。

坊主 賛成、異議なし。

政治家 (老婆に) で、明治大帝の御座所は。

老婆 ゴザンヨ……?

政治家 お住いになっておられるところじや、お付の人は何人ぐらい。お迎えの準備をせにやならんから。

老婆 お付も何もありませんよ。これと同じ部屋に転っておられたから。

政治家 転って、あつもつたない。これもこの世の無秩序の何よりの証拠だよ。それでどの部屋かわかるかね。

老婆 さあ、わかりませんねえ、さがしてみや。

政治家 わからん。しかたがない。おさがし

しましょう。もう何も怖れることはない。

みんな手わけしておさがししましょう。

いいね(坊主に) じゃ、あなたはこの入口

から。(労働者に) あなたはこの入口から

労働者 ……ちよつと、まって下さい。

政治家 何を。もう怖れることはないんだ。

それとも君はこの大事業に反対なんかね。

労働者 反対ちうことはないんですが、また

あの世と同じようになる気がしましてね

え、もし、なつたら、こんどは自殺のし

うがないですか……。

政治家 何いってるんだ。あの世じゃ、君は

ただの労働者だったが、この世じゃ、私が

政権をにぎったあかつきには君は労働大臣

だよ。

労働者 労働大臣。そりやありがたいんですが、労働大臣って第二組合をつくる役でしょう。それだけはとも身分不相応でしょう。

政治家 君は自分に立ち向う勇氣がないね

え、自分の信念をもたにや。ま、いい。

(マダムに) じゃ、あなたはこの入口か

ら、あなたは厚生大臣のポストを与える。

マダム まあ、どうしましょう、イーさん。

何も知らないもの、お酒つぐことしか。

政治家 いや、大臣なんて誰でもできる。私

はこの婆さんとこの入口から行きます。婆

さん、わしにつきあってくれんか。

老婆 へえ。

政治家 じゃ、景気づけにやりますか。新し

い、この世の再建のために。文句は私についてきて下さい。

みんなうたいます。

スタートダッシュででおくれるどこまでいってもはなされる

ここでおまえがまけたなら

おいらの生活ままならぬ

走れ走れコーターロー

本命穴馬かきわけて

走れ走れコーターロー

追いつけ追いこせひっこぬけ

政治家、老婆、坊主、マダム、それぞれ

の入口から出てゆく。

労働者 ……みんないっちゃいましたねえ。

女教師 ……。

労働者 まだ、死んだ原因のこと考えてるん

ですか。

女教師 それもですが、何か子供たちに悪い

ことしたような気がしましてねえ。もう少し

し残しておいてやればよかったですって。

私は後妻が嫌で嫌で仕方がなかったんです

が周囲がすすめるもんで。それも先妻というのが死んだんじゃなくて逃げられたんですのよ。女狂いのひどい人でしたから、それがわかったのは結婚してからなんですの。もう少し調べりゃよかつたんだけど、ただ、金があることだけが取えでしてね。金があるところくないですわ、男って。若い女を二人も三人も開つて、月々のお手当が四十万、五十万なんですの。

労働者 五十万。へえ、考えてみりゃ男って安いもんだねえ。私ら、五千円、六千円の春斗だけを楽しみに生きてきたよりなも

んですが。

女教師 向うが向うなら、こつちもこつち

と、芝居を見たり、温泉へいったり、それがだんだんこうじてきて、アメリカへい

たり、ヨーロッパへいったり。

労働者 あんたが一人で。

女教師 ヴェルサイユ宮殿、ルーヴル博物

館、ノートルダム寺院、あのセーヌ河の

畔。

労働者 へえ、見かけによらんもんです

ねえ。言葉、通じるんですか。

女教師 通じやしませんよ。通訳をやった

んです。それが若いバリ；大学の日本語科

の青年でしてね、フランス・モリエール
っていうんですけど、日本文学に詳しい
んです。欧外や漱石や藤村など夢中で話
合いましたわ。藤村の「新生」についても
フランスは「わが心にあらず、御心のま
まに」といった節子の態度が余りにも日本
人的だと攻撃するんです。日本ではむしろ、
節子をすてて旅立っていった岸本に非
難が集中しましたわね。私、日本人とフラ
ンス人の感覚の差を感じましたわ。いよいよ
別れる時、フランスはいうんです。じ
つと私を見つめて。「あなたは岸本のような
人だ」って。(異様な笑い)私、夫には
悪いけど、その方と親しくなっちゃったん
です。

労働者へえ、おいくつでした。

女教師 四七ですわ。

労働者 あんた、七と余程関係があるんで

ねえ、二七で恋愛し、三七で結婚し、四七

でよめく、七七で死んだんでしょ。ま

んだありそいですね。五七・六七と。

女教師 二七の時は片想いでしたわ、フラン

ソアとの場合は熱烈に愛したわ、フラン

セーヌ河の岸辺で、春の陽光をあびなが

ら、いつまでも二人は離れなかつたんで

す。愛というのが、こんなにすばらしいも
のかと始めてわかりましたわ。

労働者 ……四七でねえ。

女教師 向うの方には日本人って若く見える

んですのよ。フランスもいってましたわ

十七・八かと思つたって。

労働者 それじゃ四七と聞いて、がっかりし

たでしょうね。

女教師 とんでもない。ますます愛してくれ

たんですの。

労働者 (笑い) そりゃ、奴さん童貞だった

んでびっくりしたんだね。

女教師 まあ。(恥しそうに)私の方がリ

ドされたんですもの。

労働者へへ、どちらにしても女っていいで

すねえ。男なら一生先生だが、とたんに金

持の奥さまになり、フランスのフランス

という青年と熱烈によろめけるんだから。

女ってハブニングがあるからいいですよ。

ある日、突然知事夫人になる人もあるんだ

から、ポッポ屋なんて、ポッポと春斗を

楽しみにして一生終るんです。

農婦が歌をうたいながら入ってくる。

労働者 やあ、婆さん、息子はいたかい。

農婦 ああ(首をふる)

労働者 それにしては馬鹿に景気がいいじゃ

ないか

農婦 (いかにも嬉しそうに) ばらばらじゃ

ないよ。正一はばらばらじゃないんだよ。

労働者へえ、そりゃどうしてわかつたん

だ。

農婦 交通事故でばらばらになった人も、飛

行機がおつちてくしゃくしゃになった人

も、みんなまともなんじゃ。ある部屋へい

つたらな。沖繩で玉砕したとか、サイパン

で木端みじんにされたとかいった人ばっか

が集つとつたが、みんなまともじゃよ。仏

さまのおかげさ。ナマンダブ・ナマンダブ

まともならな、いつか会えると思つて。

労働者 そりゃそりだ。果報は寝てまでとい

うからな、ゆっくり探すんだよ。その時は

わしも一しよに探してやるよ。

農婦 ありがとうよ、みなさんは。

労働者 明治天皇さがいいいったよ。

農婦 明治天皇。なんで。

労働者 なぜか知らない。

農婦 また、もの好きもいるんだねえ。そん

な古い天皇さま探してどうするんだらう。

(古代神を昇唱でうたいだす)あんな正一
はな、この古代神ちうのがうまかつたんじ
ゃ。祭になると、正一のうたに合せて踊つ
てな。(声を出してうたいだす)踊ってみ
せようか。

農婦踊りだす。古代神が聞えてくる。

農婦 あれ、ありや正一の声だよ。正一の。

(必死になり)正一ノ 正一ノ どこにい

るんだらう。正一ノ

労働者 婆さん、踊るんだノ 踊るんだノ

労働者も踊りだす。二人は夢中である。

狂ったようである。これは必ずしも古代

神でなくてもいい。民踊であれば演出者

の自由である。

女教師は一人泣いている。

しばらくすると政治家、明治天皇Aをつ

れて入ってくる。

政治家 おいおい明治天皇じゃ、明治天皇。

明治大帝のおこしじゃ。何をポカンとして

おる。明治大帝じゃ、明治大帝。おじぎを

するんじや、頭を下げるんじや。

政治家一人一人頭を下げる。女教師
一人泣いている。政治家も明治天皇の前
にぬかづき、おもむろに労働者と農婦に
向って話したす。

政治家 不肖、池田コーターロー、ようやく

明治大帝をおさがし申上げ、ここに御臨御

いただくことになった。怖れおおくも明治

大帝におかせられては、不肖池田コーター

ロー、この世の大改革案を御奉上申上げた

所、怖れおおくもかしこくも、われわれ民

草の苦衷にいたく心をかたむけられ、哀憐

を憫せ給い、天下万民をして、富強の安き

に甘んずるよう、よきにはからえとお訓し

になりました。不肖池田コーターロー、こ

の言葉に恐懼感激、粉骨砕身、お応えし

たいと思つ次第であります。皇統連綿と照

臨し給い、皇祖皇宗の徳を受継ぎ給い、わ

が日の本をして近代国家へとお導きになつ

た明治大帝をいただき、不肖池田コーター

ロー、みなさまと共に殉国報恩に徹すれ

ば、必ずこの大改革は成就するものと思ひ

ます。只これこそがこの世に生れたわれわ

れ民草の勤めであり、ひいては上御一人の

盛衰を安じ奉ることになるのであります。

この世に生れた身の幸せを思い一日一日を
おるそかにせず、この大事業を、みなさん
と共に完遂したいと思ひます。では只今
より、陛下のお言葉を受承りたいと思ひま
す。承諾必謹とはこのことでございます。

脊々服膺して明日からの生活に備えたいと

思ひます。(女教師に)その女ノ 何し

てるんだ。仕様のない奴。(明治天皇に)

申訳ございません。では謹んで承るよ

うに。

明治天皇A 朕オモフニ 我ガ皇祖コーソノ

國ヲハジメルコト宏遠ニ 徳ヲタツルコト

深厚ナリ ナンジ臣民 ヨク忠ニ ヨク孝

ニ億兆コロロイツニシテ……

坊主、別の明治天皇Bをつれてとびこん
でくる。

坊主 あなた、あなた、明治天皇がみつかつ

たんですよ。明治天皇。

政治家 なに。

坊主 とうとうみつかつたんですよ。

政治家 なにいつてるんだね。失礼な。明治

天皇はもうすでにここにいらっしゃる。

坊主 ええ、そりゃおかしんですよ。

偽物じゃないですか。

政治家 何をいうか、御前の前で。(明治天皇Aに) 申訳ございません。失礼の段、平にお許しをいただきますと存じます。(坊主を隅につれてゆき) あのねえ、明治天皇は前からおこしになり、暖いお言葉をいただいているんだ。

坊主 けどねえ、あの方も明治天皇といっておられるんですよ。何度も念を押したんです。何かの間違ひじゃないですか。(明治天皇Aの前に行き) あんた、本当に明治天……。

政治家 (とんでゆき) 何いうか、失礼千萬な。どの馬の骨かわからんと太者をつれこんできて、こともあろうに陛下を。明治大帝を濫称し奉るとは、不敬罪だ！ 例え不敬罪がなくなっても、皇室にも名譽があるんだぞ！ なるほど、君は陰謀を企んでいるんだな。そうだ、どうも君の態度が非協力的だと思っていたが、明治大帝がこの世にあらせられるということが、わかって、急に大衆をまどわし、わしの計画を邪魔する気になったんだ。そうだろう。なに、その手にはのらんで、化の皮をはがしてやる。

坊主 ちよつ、ちよつとまって下さい。私は

あんたの指示に従ったままですよ。それよ、この本人も明治天皇といってるんだし、そっちの方もいっておられる。これは事実なんです。現実的に考えにやいけませんよ、現実には二人の天皇が存在しているんだから。となりや、どちらかが偽物なんです。こっちが本物で、こっちが偽物だとはいいませんよ。こっちが本物でこっちが偽物かも知れません。ただ、こっちが本物ならこっちが偽物、こっちが偽物なら、こっちが本物。

マダム、新しい明治天皇Cをつれてとびこんでくる。

マダム イーさん！ イーさん！ 明治天皇がみつかりましたよ、明治天皇。政治家 なんだって。

坊主 ……また。

マダム ……どうしたんです。

坊主 もう二人いるよ。何しろ、明治天皇は一人で十分だからね。

マダム けど、この方は真正銘……。

マダム イーさん、こりやどうなってるの。政治家 (はきだすように) こっちが聞きたいんだ。

マダム 死人は何人いてもいいが、明治天皇の死人は一人じゃなくちゃいさんのだね。せつかくみつけてきたのに。

政治家 あたり前のことだ。よし、こうなりや、本物と偽物とよりわけにやらん。この中にお一人おられる筈だから。

坊主 そうです。身許確認です。

政治家 あの、(ある決意をもって) 御三方に謹んで申し上げます。明治大帝が三人もあらせられては、われわれ臣下としては、二君にまみえずと申しますが、誠に迷惑な次第でございます。この民草共の苦衷をお察しいただき、御無礼の極みと存じますが、改めて身許の御確認をさせていただきます。正直にお名乗りいただきたいと存じます。(急に恭々しく) いうまでもなく、真の明治大帝におかせられては、かかることは御不快のきわみであり、御心痛いばかりと存じますが、かかる異常な事態をお認めいただき、お許しいただきたいと存じます。(また最初にもどり) むろん、偽の方は、かかる事態の元兇であり、とも

に天をいただかざる国賊として誅伐し奉らねばならない所でありますが、正直に申立てていただければお許し申上げたいと思えます。ではこれが最後でございます。

政治家、おごそかに明治天皇Aの前に行き、深々と最敬礼をする。

政治家 陛下は明治大帝であらせられますか。

明治天皇A (うなづく)

政治家、極めて満足し同様に明治天皇Bの所にゆく。

政治家 陛下は明治大帝であらせられますか。

明治天皇B (うなづく)

政治家、不快になり、明治天皇Cの所にゆく

政治家 (声がうわづり) 陛下は明治大帝であらせられますか。

明治天皇C (うなづく)

政治家絶句。みんな顔を見合わせる。明治

天皇ABCだけは階段の上で無表情。

坊主 何か、そのそれを証明するもの、ええ例えは身分証明書とか、それに代るようなものを見せていただいたらどうです。

政治家 うん。それしかない。身分証……。労働者 ちよつとまって下さいよ。死人に身分証明書なんてあるんですか。誰が発行するんです。誰が証明するんです。(政治家に) あんただってそんなものもってないでしょう。参議院議員だといわれるから、それを信じるだけです。何の証拠もないんですよ。いいじゃないですか。可哀そうですよ。三人でも、四人でも、御本人がそう信じてるんだから。

明治天皇ABC 朕オモフニ 我が皇祖コーソ！ 国ヲハジムルコト安遠ニ 徳ヲタクルトコト深厚ナリ ナンジ臣民 ヨク忠ニ ヨク孝ニ 億兆ココロライツニシテ……

そういいながら、階段を三人が下りてくる。女教師、急に目を輝し、ABC一人一人を見て廻る。

女教師 (異様な笑いと共に) ああ、わかつ

た、わかつたのよ。私の死んだのは。私の死んだのは……まあ、わかつたのよ。

諸行無常の鐘の声
一つなつたら

極楽浄土
あの世は
この世のあの世であり

この世は
諸行無常の鐘の声
一つなつたら
極楽浄土

群像はシルネットになり、梵鐘の音、ありがたい読経が聞えてくる。カーテン・コールになつても小さく聞えている。公演終了マイク中も読経が聞えている。観客が去つても聞えている。

へ一九七一年十一月六日脱稿

上演のために

■ 作者の住所

黒沢 参吉 横浜市戸塚区上矢部町一三二九
 小島 真木 静岡市上足洗一―一二―三伊藤方
 栗木 英章 名古屋市南区沙田町三―四〇
 作間 雄二 弘前市品用町一
 和田 澄子 大阪市城東区茨田諸口町一八二
 こばやしひろし 岐阜市桜通四

■ 上演の場合のおねがい

掲載作品を上演する場合には、必ず次のことを守ってください。
 第一に、作者の許可を得て上演することです。無断上演はもちろん礼を欠くことになりませんが、作者はできるかぎり上演舞台をみて自分の勉強もしたいし、上演の成功のためにできる協力を望んでいます。その協力関係から、お互いの成長を上げていきたいのです。その意味で作者への連絡をキチンとつけてから稽古にかかってください。

第二は上演料のことです。お金のことをいうときたないような感覚が、私たちに共通してありますが、上演会場に使用料を払うように、作品にも使用料が必要です。それが乏しいとしても、作者の再生産を保證する力になります。

東西リ演では、日本演劇協会の規定に準じて、次のように上演料をきめています。

- A 無料公演のとき (一回につき)
 - 一幕物 〇六〇〇円以上
 - 多幕物 〇一、二〇〇円以上
 - B 有料公演のとき
 - 一幕物 〇二、〇〇〇円以上
 - 多幕物 〇四、〇〇〇円以上
- 以上のことを尊重しあって、この掲載作品が全国各地で舞台化されることを期待します。

■ あとがき

七一年もおしつまった、ギリギリのところ、約束の戯曲集をお送りすることができました。
 十月から十二月にかけて、東西リ演の各集団の活動は、はなはなしく、またそれにふさわしい、ちからのこもった舞台や注目すべき創作劇なども登場しました。この取約は、次の20号で「創造問題の特集」として編集したい考えです。
 こうした東西リ演の活動と、この戯曲集とが即座に結びつかぬということがあるかもしれません。しかし、これまでの、活動に即したかに見える創作劇の安直さにこそ、むしろ、問題がありました。その意味で、実質的なこの第一集が刺戟剤となり、ぞくぞくと、意欲をもった作者たちが、のびのびと、筆をとってくれたらどんなにすばらしいでしょう。

では、元氣一杯、72年へ進撃を!

(もも)

- 演劇制作スタッフ派遣 ● 舞台用器材貸出・販売
- 舞台照明操作・プラン作製・一式引受



組合や会社の文化祭・サークルの発表会とき
 どんなご相談でも気軽にお申越してください。

特にサークルのしごとは、サークルの身になって
 いろいろな経験を生かし、経費の点もご便宜をは
 かります。……………ぜひどうぞ!!

株式会社 第一ステージサービス

代表・川崎ひろし

東京都渋谷区代々木2-12・西原ビル TEL.03-370-0487 (代表)

演劇会議 別冊2号 一九七二年一月一日発行

定価 二五〇円 (送料四五円)

編集委員

秋坂桃彦・塚越松雄・黒沢参吉
 こばやしひろし・新木祥之
 藤沢 薫・猿渡公一・栗原 省

発行所 演劇会議 発行所

川崎市小田 四二二八二七
 秋坂 方

電話 〇四四四 〇七七五